

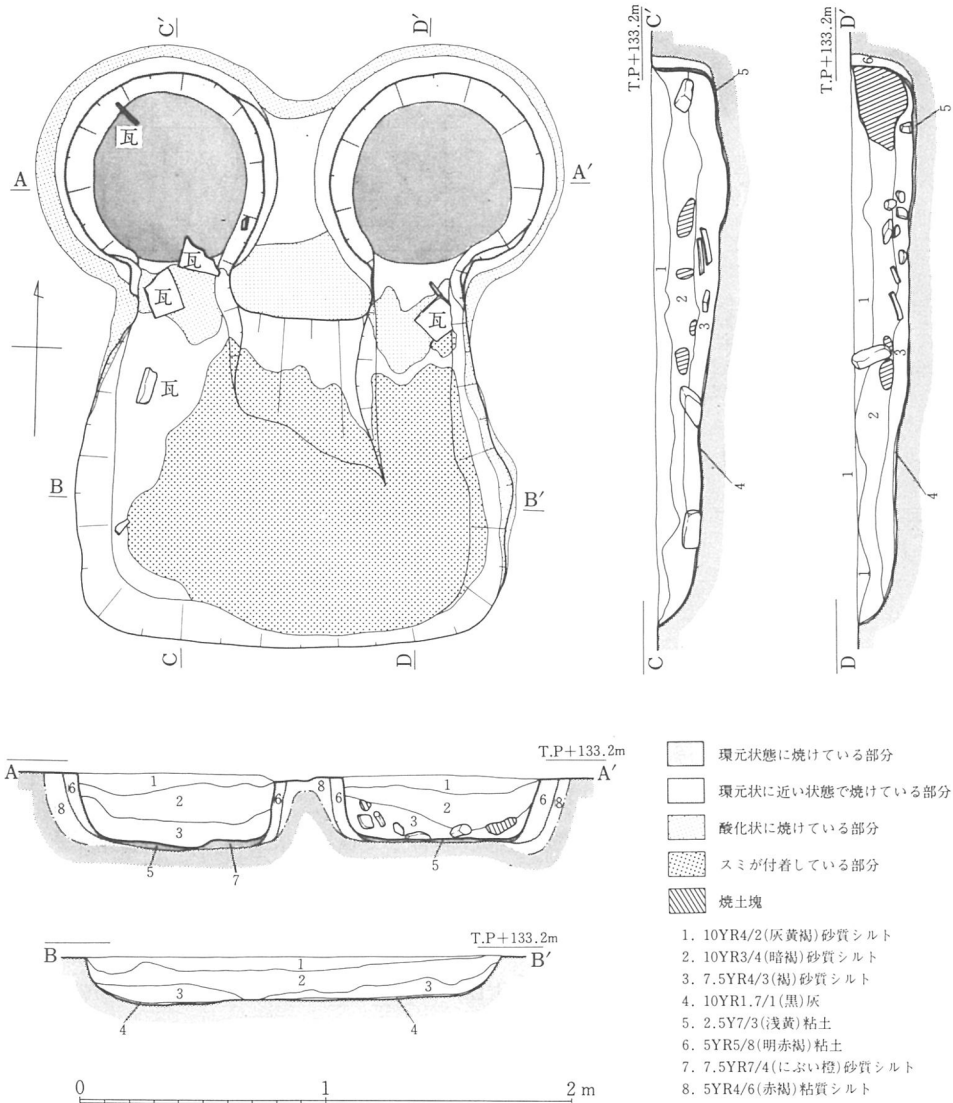
第32図 526・527・528-OX実測図

師器小皿と陶磁片が出土した。525-O Bを中心とした建物の一画と考えられる。

528-O X (第29・30・32図) 東側遺構群北寄りで検出した東西方向の石列である。主軸方向はE-14°-Nを示し、2個がならべられた状態で遺存していた。石は扁平で、35×30cmと35×15cmの大きさを測る。石列の北側には、3~10cm大の礫を多量に敷詰め整地を行なっている。周辺部より陶磁器片が出土する。525-O Bを中心とした建物の一画と考えたい。

524-O H (第29・30・33図) 東側遺構群東寄りで検出したカマドである。上部構造は、後世の削平・攪乱のため明らかにしにくい、焚口部を南側に向けた2連の焼成部円

形を呈したカマドである。焼成部は直径約80cm、深さ検出面より約30cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は3層に分層でき、上部構造が落下したと考えられる焼土塊のかたまりが認められる。両焼成部間は25cmを測る。壁体及び底面は、還元状に固く焼きしまっているが、粘土等による貼壁は観察されなかった。焚口部分は幅約30cmを測り、その南側には灰落し部分の掘り込み土坑が形成されている。灰落し部は長軸幅1.8m、短軸幅1.3m、深さ検出面より20cm前後を測り、平面隅丸方形を呈する。埋土は焼成部同様3層に分層でき、



第33図 524-OH実測図

底面に黒色の灰層が約1cmの厚さで堆積する。灰落し部分の東西方向の断面はU字形を呈し、南側から北側焼成部に向って徐々に深くなっていく。埋土中より18世紀代の唐津系陶磁器と平瓦が出土した。525-O Bに伴うカマドと考えられる。

以上の東側遺構群は525-O Bのみが建物というよりも、これらすべての遺構を合せて一つの建物とみるべきであり、この場合建物内の土間の一画とするのが最も妥当であろう。ちなみに本地区北側に接する民家は少なくとも400年は遡るとされ、その前身建物の一部と考えられる。なお、さらに下層からも後述する建物(553-O B)が検出されている。

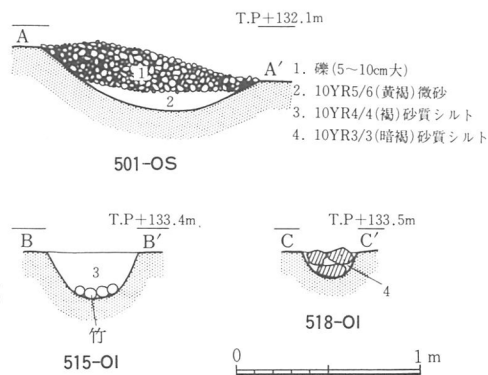
(2) 西側遺構群

500-O Z (第29図) 西側で検出した水田区画である。東側は調査区外にのびるが、西側で肩部の一端を検出した。南側は501-O Sによって画されている。平面東西に長い長方形に近い形態であったと思われる。南北幅約8m、耕土の厚さ20~30cmを測る。耕土は10G Y 4/1暗緑灰色粘土で、16世紀~18世紀代の土器・陶磁器片と瓦が出土する。

501-O S (第29・34図) 西側で検出した東-西方向の溝で、わずかに蛇行する。両側は調査区外にのび、総延長8.5mを検出した。幅0.9m~1.2m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。南側肩部と北側肩部とでは、約15cmの高低差があり、南側の方がレベル的に高い。溝内は上、下2層に分層でき、特に上層には拳大の礫が人為的に埋めこまれている。一種の暗渠排水と同じである。500-O Zの南側を画する溝で、上層より15世紀末~18世紀代の土器・陶磁器類が出土する。

515-O I (第29・34図) 西側遺構群中央部北寄りで検出した東西方向の暗渠である。両側は調査区外にのび、総延長23mを検出した。幅0.4~0.5m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R 4/4褐色砂質シルトで、16世紀~18世紀の土器・陶磁器及び瓦片が出土した。底面に竹をならべて水通しをよくしている。中央部で517-O Iと接続する。

516-O S (第29図) 西側遺構群北側中央部で検出した北西-南東方向の溝である。北西側は調査区外にのび、南東端は袋状に自然消滅する。総延長4.4mを検出し、幅0.4m、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R 4/3にぶい黄褐色礫混り砂質シルトで、土師質



第34図 501-O S・515-O I・518-O I 断面図
(実測地点は第29図参照)

の甕片が出土した。

517-O I (第29図) 西側遺構群中央部南寄りで検出した北西-南東方向の暗渠である。北西端は515-O I と接続し、南東側は調査区外にのびる。総延長12mを検出し、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。515-O I と同じように底面に竹がならべられている。

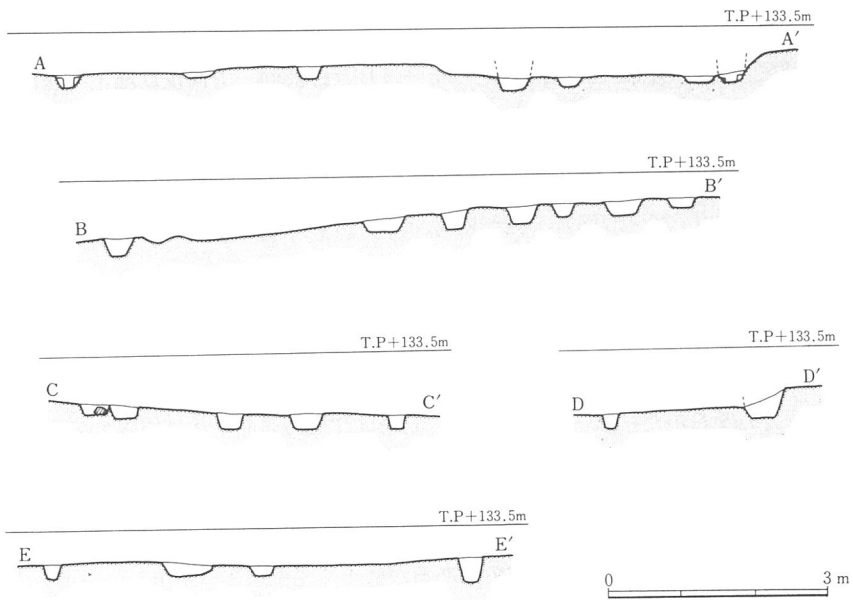
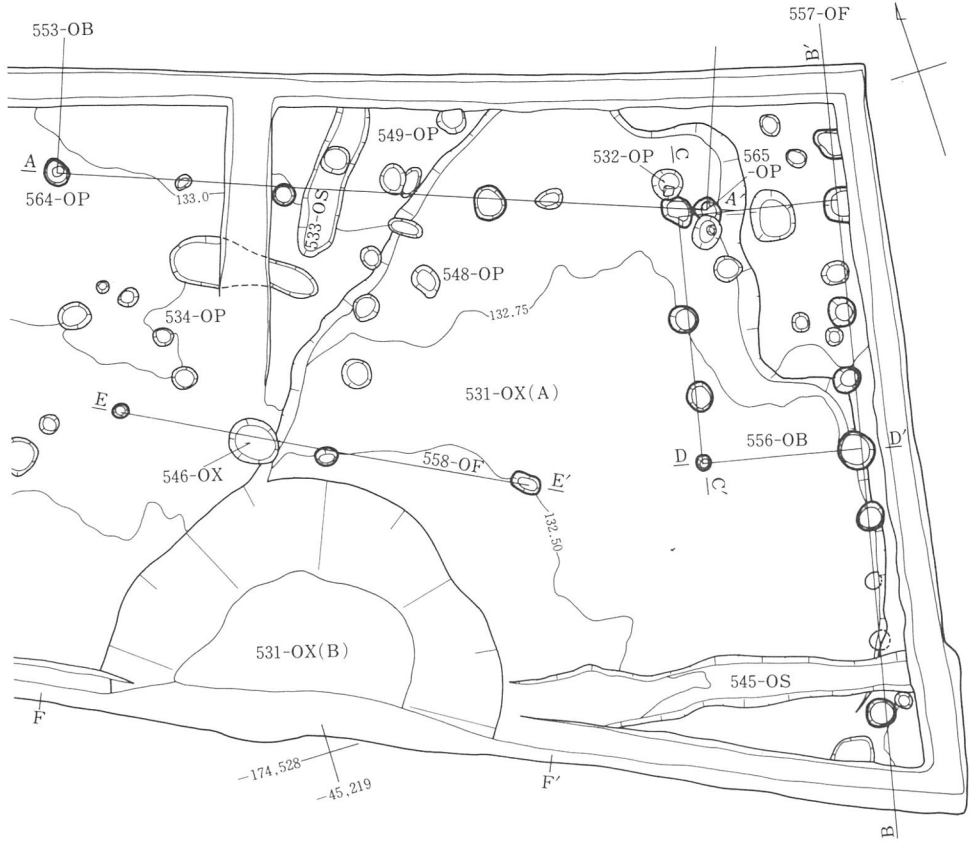
2. 第2遺構面

本地区全域で検出した遺構面であるが、東部調査区では第1遺構面に相当する遺構も重複したかたちで検出された。遺構面は北東方向から南西方向に緩傾斜した面である。最も高いところでT.P.+133.4m、最も低いところでT.P.+131.2mを測る。検出した遺構には、建物・柵列・園池・溝・土坑・谷状遺構・水田等がある。これらは、出土遺物より13世紀前葉~中葉、14世紀中葉~後葉、15世紀~17世紀代の3時期の遺構に大別でき、別に第1遺構面相当遺構(18世紀以降)が少数ある。以下、遺構別に記す。

(1) 建物・柵

553-O B (第29・35図) 中央部北寄りで検出した掘立柱建物である。東西棟と思われるが、南側のみを検出したにすぎない。梁間については不明であるが、桁行3間(9m)で、柱間距離3m(10尺)の等間隔を測る。主軸方向はE-21°-Nを示す。柱掘形は直径30~40cmの平面円形を呈し、深さは検出面よりそれぞれ15~20cmを測る。柱穴内埋土は暗褐色砂質シルトを基調とし、564・565-O Pには直径約15cmの柱痕が観察される。遺物が出土していないので時期を明確にしがたいが、層順及び周辺遺構との関係から14世紀中葉~後葉の建物と考えたい。

556-O B (第29・35図) 中央部東寄りで検出した掘立柱建物である。梁間1間、桁行3間の南北棟であるが、東側は柵列557-O Fの一部を兼ねる。規模は比較的小さく、梁間方向で2.1m(7尺)、桁行方向で3.3m(11尺)を測り、主軸方向N-15°-Eを示す。桁行の柱間距離は一定でなく、北側1間が1.5m(5尺)、他の2間がそれぞれ0.9m(3尺)を測る。柱掘形は上面が削平されているため一定ではないが、直径20~50cm、深さ20cm前後を測る。柱穴内の埋土は東側と西側では異なり、東側は黄褐色系の砂質シルトで、柵列557-O Fを構成する柱穴と同じである。西側は褐色系の粘質シルトであることから、柵列557-O Fに付属した物置小屋的なものであろう。遺物は出土しないが、層順及び周辺遺構との関係から16世紀~17世紀の年代観が考えられる。531-O Xと重複し、それよ



第35图 553・556-O B 周边实测图

り新しい。

557-O F (第29・35図) 中央部東寄りで見出した南北方向の柵列(塀)である。総延長9mを見出し、両端部は調査区外に続く。主軸方向はN-15°-Eで556-O Bと同じである。柱間距離は、一部間隔がずれるものも認められるが、基本的に0.9m(3尺)を測る。柱掘形は直径30~50cmの平面円形を呈し、深さは検出面より20cm前後を測る。柱穴内の埋土は黄褐色系の砂質シルトで、遺物は出土しなかった。西側に付属建物として556-O Bが見つかり、その東側桁行方向の柱の一部を兼ねている。531-O Xと重複し、それより新しく、層順及び周辺遺構より16世紀~17世紀の柵列(塀)と考えられる。第1遺構面で見出した525-O Bを中心とした屋敷地以前、すなわち、その前身とされる屋敷地の東側を画する柵列(塀)と考えるべきである。その東側には、現在これらの後身屋敷地とされる民家への進入道が接していることから想定することができる。

なお、調査区北側に接する現民家は少なくとも400年は遡るとされ、今回の調査区からもその一端が実証されたといえよう。また、前記553-O Bもそれ以前の前身建物の可能性があり、さらに200年前後遡ることになる。

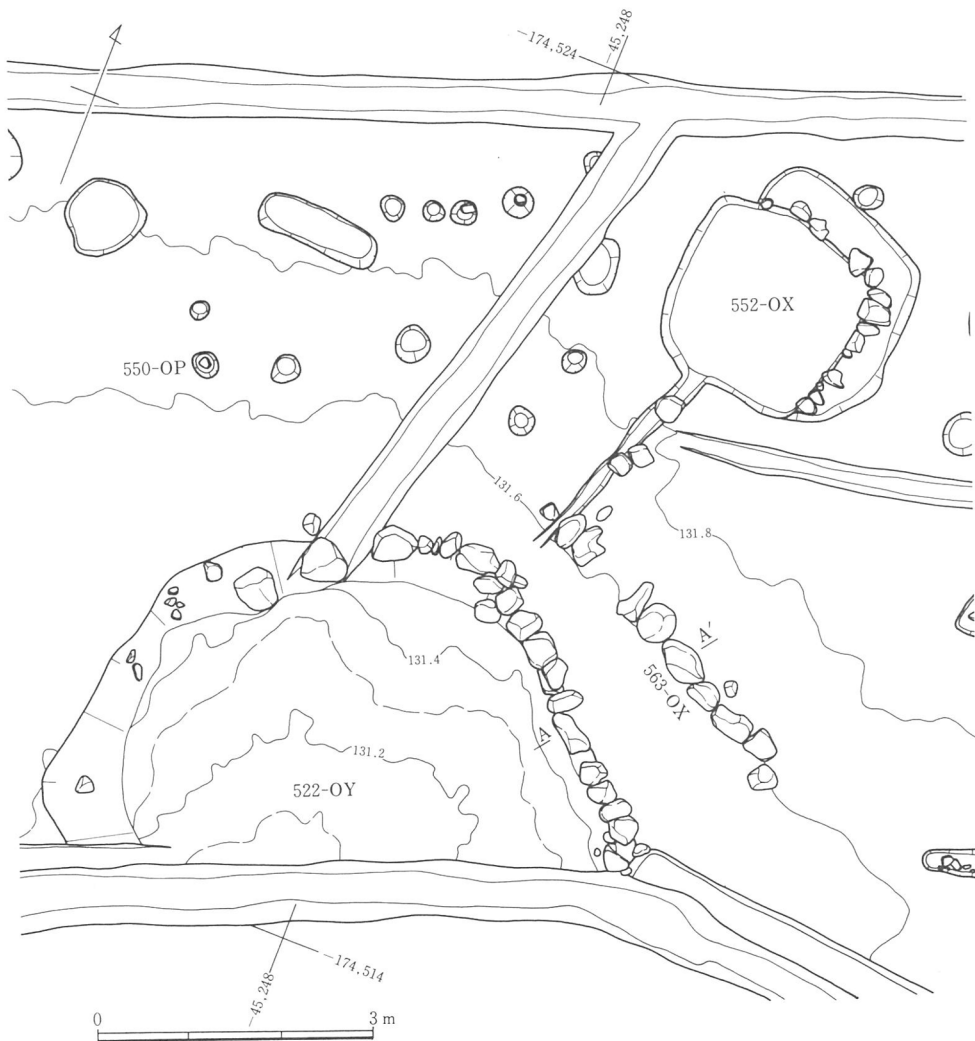
558-O F (第29・35図) 中央部で見出した東西方向の柵列である。3個の柱掘形が同一柱筋上にならび、主軸方向E-25°-Nを示す。柱間距離3m(10尺)を測る。柱掘形は径25~40cmの円もしくは楕円形を呈し、深さ検出面より20~30cmを測る。柱穴内埋土は暗褐色系の粘質シルトで、遺物は出土しなかった。層順及び周辺遺構の関係から14世紀後葉の時期にあてはめることができる。553-O Bとほぼ同一方向及び埋土の状況が同じであることから、553-O Bに伴った柵列と考えるべきであろう。

(2) 園池関係の遺構

522-O Y (第29・36・37図) 西側南寄りで見出した園池である。南側は調査区外のため規模、形状については明確ではないが、直径約6mのほぼ円形を呈した園池と考えられる。深さ0.6mを測り底面鍋底状を呈する。埋土は、基本的に上・中・下の3層に分層でき、その内、中・下層はさらに細分が可能である。北東側汀線には、護岸と景観を兼ねた30~50cm大の礫石がならべられているが、元来は汀線の周囲全体に施されていたものと思われる。石敷のような底石は見出されなかった。15世紀末~17世紀代の土器・陶磁器と木製品が多量に出土した。これら遺物の層位的な時期差は認められなかったが、概して下層が古く、上層が新しい。また、少数ではあるが種子や昆虫遺体(玉虫)も出土している。池への導水は、池自体の湧水が著しいことから、大半はそれによったと思われるが、北側

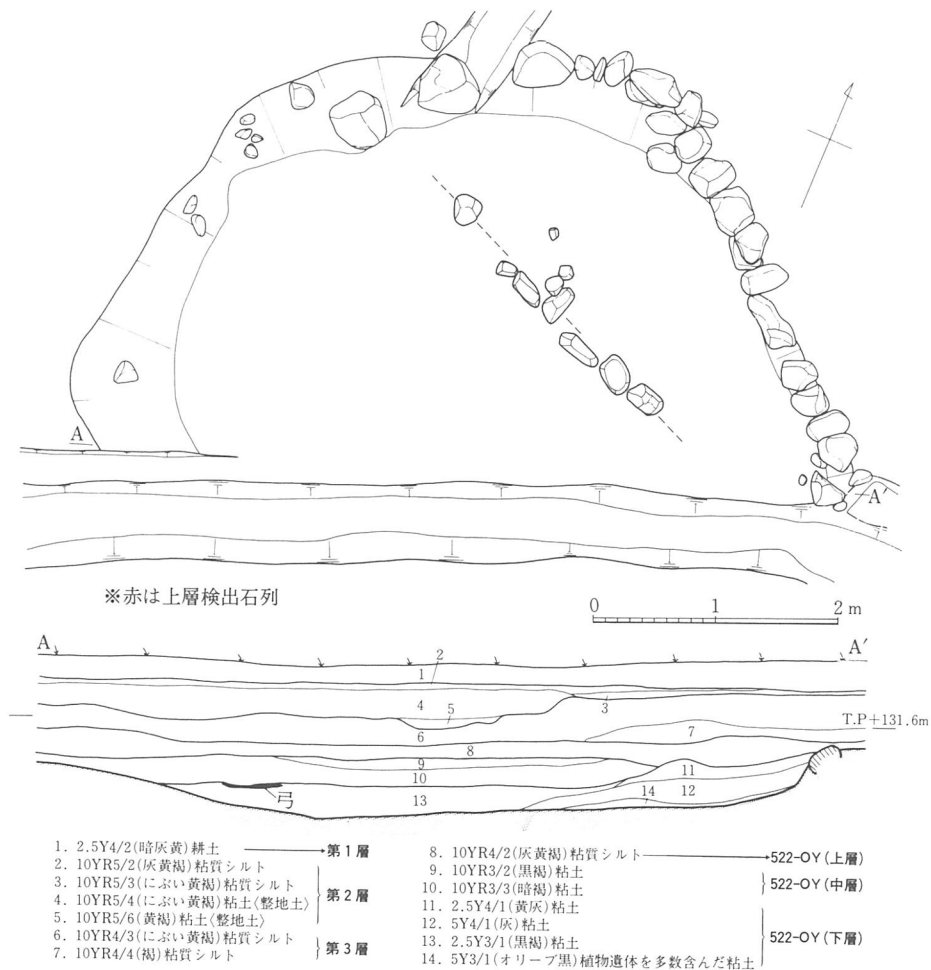
部分で集水施設552-OXと小溝によってつながっていた可能性があり、地形的に考えて、この部分が導水施設の一部を兼ねていたとも考えられる。

なお、本園池がある程度没した段階、すなわち中層上面において北西-南東方向の石列を検出した。総延長約2.5mを測る。本石列はどのような意図をもってならべられたかは不明であるが、後述する園池の北東側で検出した石列563-OXとほぼ同一方向の平行であることから、何らかの関係があるものと思われる。あるいは、園池最終段階の護岸石もしくは景石的なものであったかもしれないが、著者は本地域が緩傾斜地であることから、522-OY埋没時の整地に使用されたものと考えたい。



第36図 522-OY周辺平面図

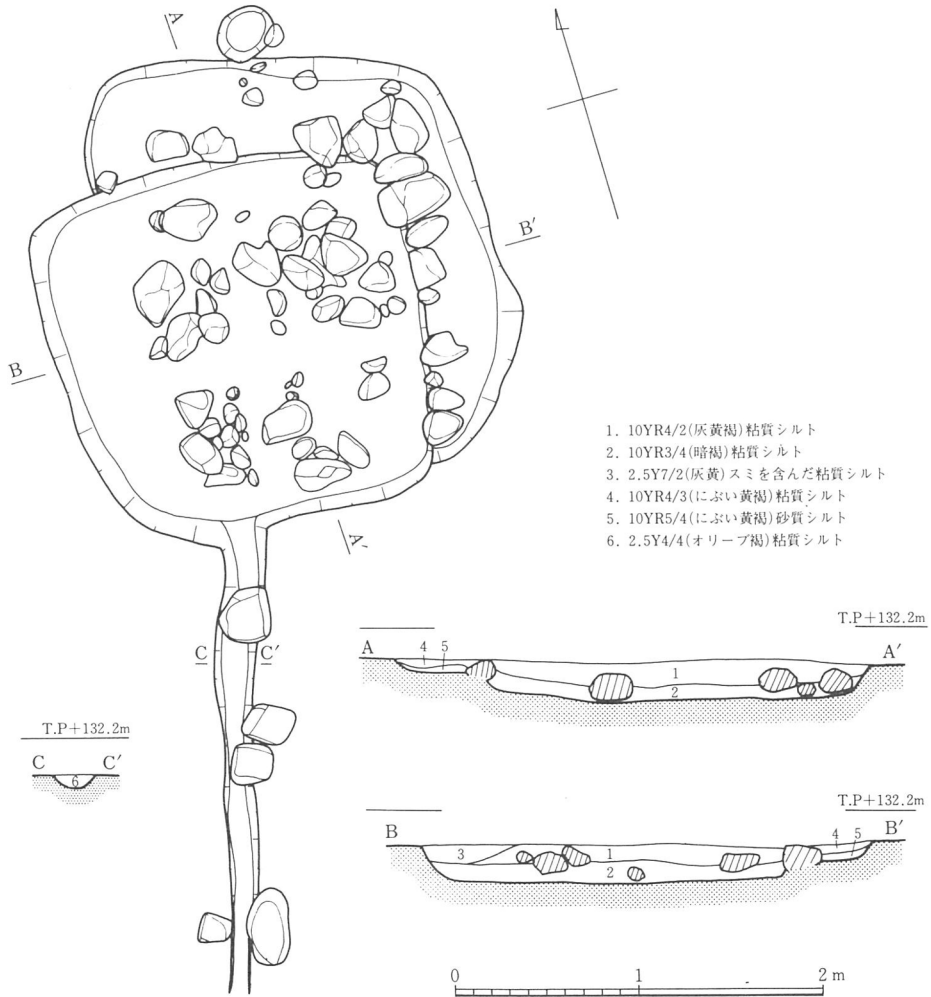
552-O X (第29・36・38図) 西側北寄りで検出した集水遺構と考えられる。平面2×2mのほぼ正方形で、深さは検出面より0.2mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、15世紀~16世紀代の遺物が出土する。周囲には人頭大の礫石がならべられていたと考えられ、その痕跡が北側と東側に認められる。これら石列は、さらに2~3段の石垣状に積まれていた可能性があり、従来はもう少し深かったと思われる。内部からは、これら積石に使用されたと考えられる礫石が廃棄された状態で出土する。石列周囲は方形の土坑を切った状態で検出されていたが、これは石垣をつくるための掘方なのか、もしくは全く別の土坑なのか、それとも522-O Xの前身施設的なものなのかは不明であった。



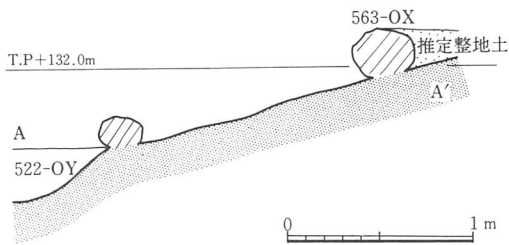
第37図 522-O Y 実測図

本遺構の南側には、園池522-OYに向って小溝が派出し、端部は後世の削平のため検出時には削減していたが、本来は522-OYとつながっていたものと考えられる。小溝は、幅10~20cm、深さは検出面より最も深いところで8cmを測り、断面U字形を呈する。522-OYへの導水施設と考えたい。

563-OX (第29・36・39図) 西側中央部南寄り、522-OYと552-OXの間で検出した北西-南東方向の石列である。30~50cm大の礫石を使用したもので総延長約4mを検出した。本石列の用途は不明であるが、522-OYに対しての景石と考えるには、あまりにも見苦しい感じである。むしろ、石列の方向が等高線と同じであり、緩傾斜地であることから、園池周辺地域を階段状に整地するために使用された石列であった可能性が強い



第38図 552-OX実測図



第39図 522-OYと563-OX関係図
(実測地点は第36図参照)

(第39図参照)。

以上、これら園池関係の遺構は15世紀後半～17世紀代の所産であり、前記557-O Fに画された屋敷地に伴った遺構群と考えられる。

(3) 溝・暗渠

506-O S (第29図) 東側中央部で検出した北北東-南南西方向の溝である。総延長4.5mを検出し、北北東端部は後世の削平のため袋状に削減する。南南西側は502-O Oに切られている。幅0.35m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、18世紀代と考えられる陶磁器片と土師器小片が出土した。

508-O S (第29図) 東側中央部西寄り検出した円弧状にカーブを呈した溝である。東端部は袋状に終り、南側は試掘調査によって切られている。総延長1.5mを検出し、幅20cm、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は炭化物を含んだ10Y R3/4暗褐色砂質シルトで、瓦器・土師器片が出土する。

518-O I (第29・34図) 東側北寄りで検出した南-北方向の暗渠である。北側は、513-O Xに切れ、南端部は袋状に終る。総延長2.5mを検出し、幅0.25m、深さは検出面より15cmを測り、断面U字形を呈する。10~20cm大の礫を埋石し、水通しをよくしている。遺物は出土しなかったが、周辺遺構との関係から18世紀以降の所産と考えられる。

533-O S (第29・35図) 中央部北寄りで検出した北東-南西方向の溝である。北東側は調査区外にのび、南西端部は袋状に終る。総延長2mを検出し、幅0.5m、深さ0.15mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/2灰黄褐色砂質シルトで、14世紀後葉の瓦器椀・土師器小皿・陶器片が多量に出土した。

545-O S (第29・35図) 中央部南寄りで検出した東西方向の溝である。総延長5.5mを検出し、東側は調査区外にのびる。西側は531-O X (B)に取りつくようなかたちで自然に消滅する。幅0.5m~0.7m、深さ0.1m前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/6褐色粘質シルトで、土師器小皿が1点出土した。531-O Xと重複し、それより新しい。

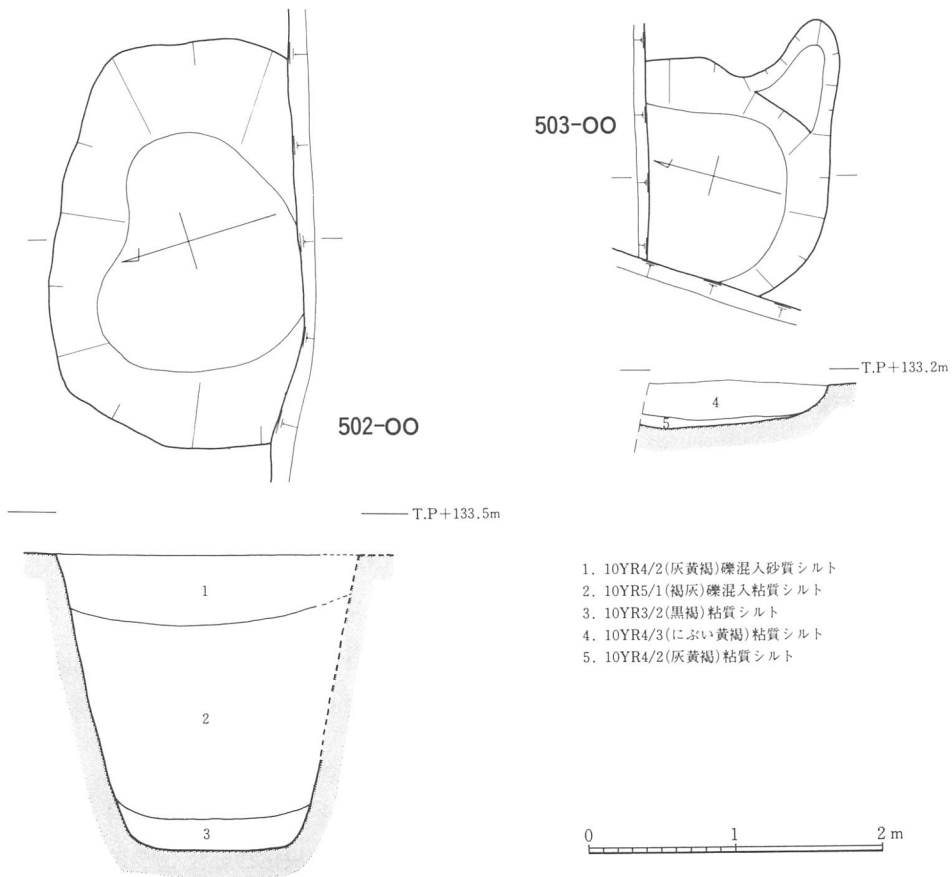
555-O S (第29図) 東側北西寄りで検出した東-西方向の溝である。総延長8mを検出し、両端部は調査区外にのびる。幅0.3m前後、深さ0.1m前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R3/3暗褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。513-O Xと重複し、

それより新しい。

559-O S (第29図) 西側北寄りで見出した南-北方向の溝である。総延長4.5mを検出し、北側は調査区外にのび、南端部は袋状に自然消滅する。幅30cm前後、深さ3cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色小礫混りの砂質シルトで遺物は出土しない。562-O Oと重複し、それより新しい。

560-O S (第29図) 中央部南西寄りで見出した東西方向の溝である。総延長2mを検出し、東側は試掘溝によって切られ、西側は袋状に終る。幅0.4m前後、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R2/3暗褐色粘質シルトで、遺物は出土しない。

561-O S (第29図) 中央部南西寄り、560-O Sの南側で見出した東西方向の溝である。西端部は袋状に終る。長さ4m、幅0.6m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R3/3暗褐色粘質シルトで、遺物は出土しない。



第40図 502・503-O O実測図

564-OS (第29・44図) 西端部で検出した北西-南東方向の溝である。総延長4mを検出し、さらに両端部は調査区外にのびる。幅0.5~0.7m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/2灰黄褐色細砂で遺物は出土しないが、周辺遺構との関連から16世紀~17世紀代のものと考えられる。用水路を兼ねた529-OZと530-OZを画する溝と考えられる。なお、第1遺構面で検出された501-OSは、本溝の上層で検出されたものであり、水田関係の溝の位置が世襲されていることをうかがい知ることができる。

(4) 土坑

502-OO (第29・40図) 東側南寄りで検出した平面楕円形の土坑である。南側は調査区外であるが、長径2.8m、短径2m前後、深さ2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は3層に分層でき、18世紀代と考えられる土師器・陶磁器類と巴文の軒丸瓦が1点出土した。現在でも湧水が著しいことから野井戸であった可能性が高い。506-OSと重複し、それより新しい。

503-OO (第29・40図) 東側南西寄りで検出した平面不定形の土坑である。北側と西側が試掘坑及び排水溝によって切られているため規模については不明。深さは0.3mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、14世紀後葉の瓦器碗が出土する。

507-OO (第29図) 東側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径0.7m、短径0.5m、深さ5cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、土師器小皿等の小片が出土する。

509-OO (第29図) 東側北西寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径2m、短径1m、深さ5cm前後を測り、底面は凹凸が著しい。埋土は10Y R3/3暗褐色砂質シルトで、陶磁器片が少量出土する。

512-OO (第29図) 東側南寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径0.5m、短径0.4m、深さ7cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、土師器小片が少量出土する。

519-OO (第29図) 東端部で検出した平面不定形の土坑である。長径2.5m、短径1.7m、深さ8cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、土師器小片が出土する。

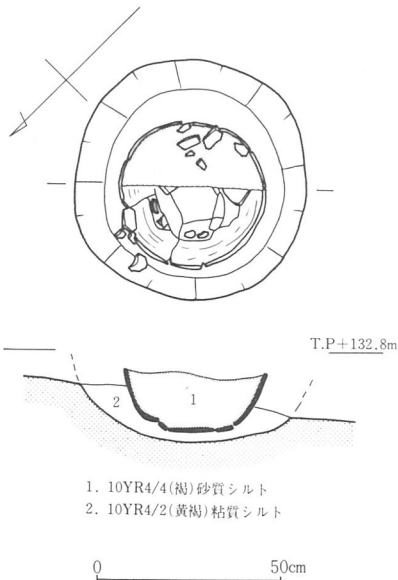
523-OO (第29図) 西側南寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径1.5m、短径1m、深さ0.1mを測り、底面すり鉢状を呈する。埋土は、炭化物を含んだ10Y R4/4褐色粘質シルトで、13世紀前葉の瓦器片が出土する。

よる区別は困難であった。

最も深い部分である531-O X (B)の南壁部分で土層観察するかぎりでは、2期の整地が考えられる。すなわち、基本的に2層に分層した下層と上層の時期がそれである。下層の時期は、おそらく557-O Fによって画された屋敷地を造成するために整地されたものである。15世紀末～16世紀初頭の時期が考えられる。特に深い(B)部分の整地には、土砂と共に拳大の礫石が多量に埋め込まれている。上層の整地時期は、第1遺構面で検出した525-O B等の屋敷地を造成する時に整地されたもので、18世紀初頭の時期にあたる。この時の整地には、前回は整地した上層部を一度削り取り、その上に新たな土砂を盛っていることがわかる。したがって、(B)のような深い部分では、ある程度の整地土の時期区分は可能であるが、(A)のような比較的浅い地域では、上・下の整地土が混じりあって攪乱されたような状態になっている。そのため、層順による遺物の時期区分を困難にしている。

なお、遺物には、整地される以前に廃棄されたもの、この場合13世紀中葉～14世紀後葉と1回目の整地時期である15～16世紀、さらに2回目の整地時期である18世紀代の3時期に大別でき、遺構の時期にはほぼ一致する。

535-O X (第29図) 中央部西寄りで検出した段状の落込みである。東側が高く、西側が低い。高低差約0.5mを測る。すなわち、東側肩部から底面まで約0.6m、西側肩部から



- 1. 10YR4/4(褐)砂質シルト
- 2. 10YR4/2(黄褐)粘質シルト

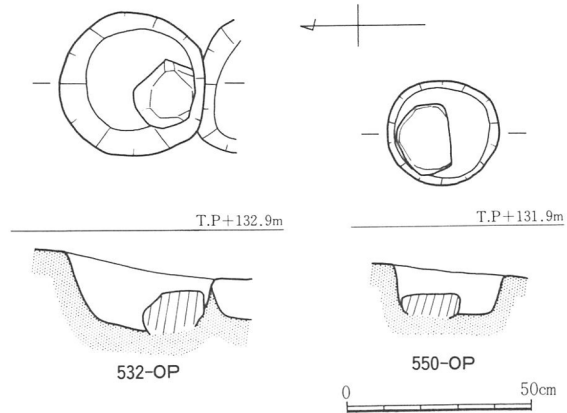
第42図 546-O X実測図

底面まで約0.1mを測る。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色砂質シルトで、人為的な整地土と考えられる。18世紀代の染付茶碗が出土することから、525-O B等を含めた屋敷地造成時に整地したものであり、造成後はこの部分で段差をもって、東側を平坦にしている。531-O Xの2回目の整地と同時期に行なわれたものであろう。

546-O X (第29・35・42図) 中央部で検出した埋甕である。上部はかなり削平を受けて欠損している。掘形は平面円形を呈していたと思われ、検出面で直径65cm、深さ13cmを測り、底面鍋底状を呈する。甕は土師質で、16世紀代の所産と考えられる。糞尿溜の可能性が高い。531-O Xと重

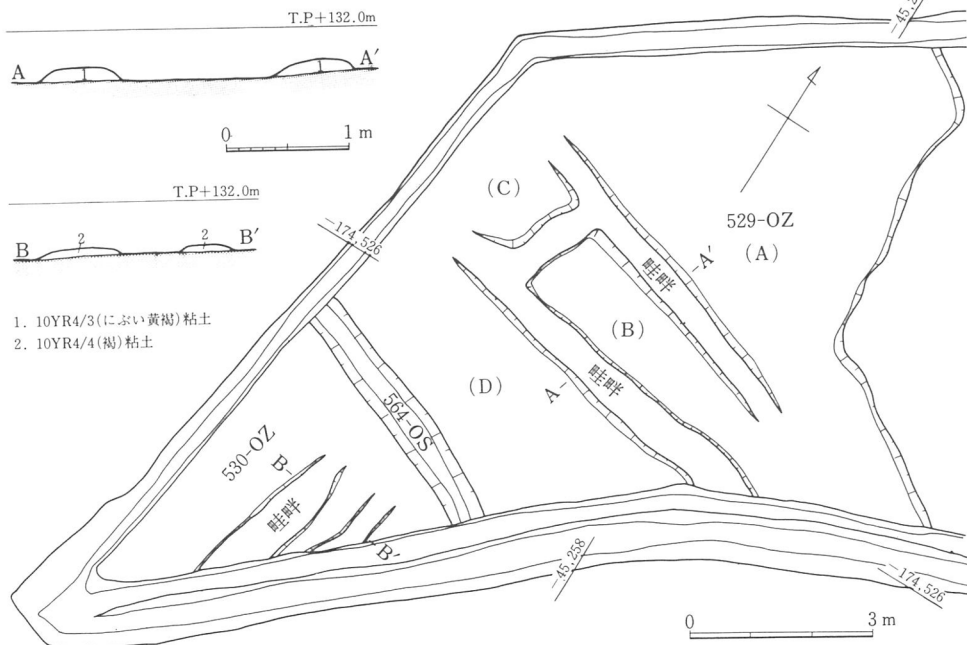
複し、それより新しい。

ピット群（第29・43図） 中央部東寄りと西側北寄りに多く分布する。これらの大半は柱穴と考えられ、直径20～40cmの平面円形を呈し、深さ検出面より10cm前後を測るものが多い。埋土の状況によりA～Cの3群に大別できる。A群は10Y R4/4褐色砂質シルトで、13世紀中葉の遺物が出土し、中央部東寄りのなかでも特に北側に多くみられる。B群は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、14世紀中葉～後葉の遺物が出土し、中央部東寄りの全域と西側北寄りの地域に多い。そのなかには、532・550-O Pのような根石が存在するものもある（第43図参照）。C群は10Y R3/3暗褐色砂質シルトで、16世紀～17世紀代の遺物が出土し、中央部東寄りの地域に多く認められる。

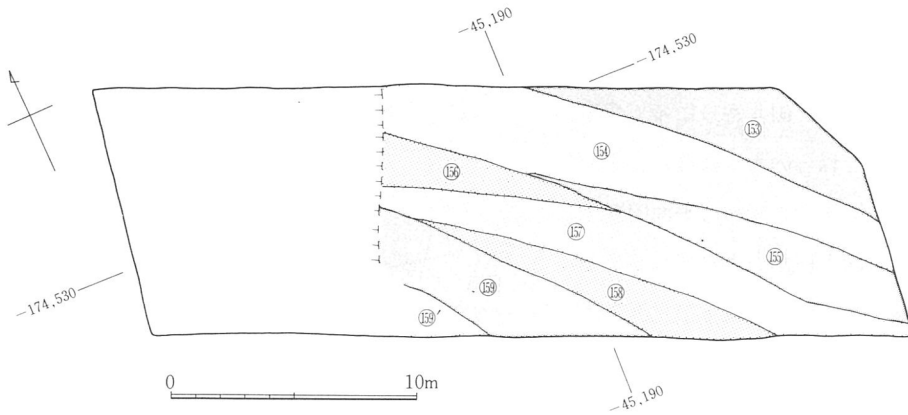


第43図 532・550-O P実測図

水田（第29・44・45図） 明確に水田区画とわかるものは東端部で検出した529・530

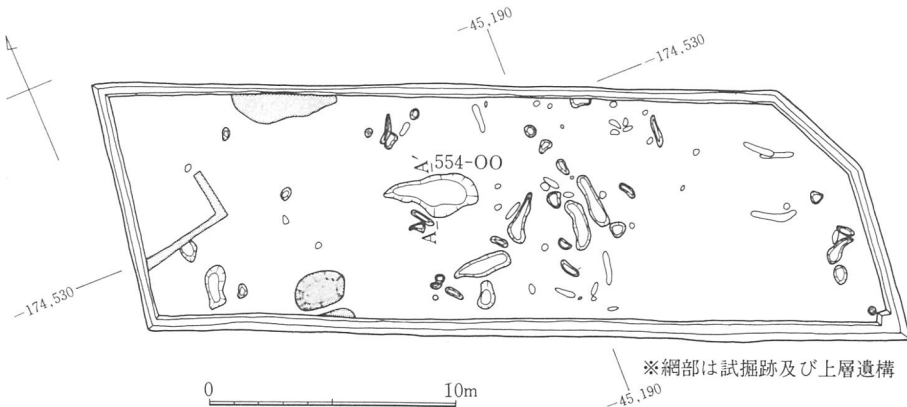


第44図 529-O Z実測図



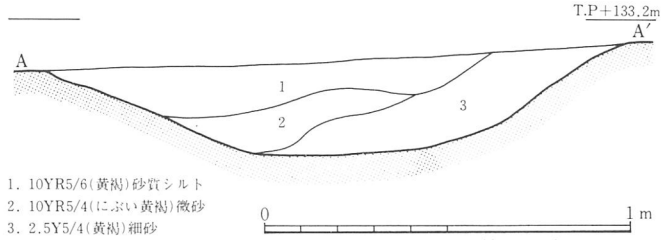
第45図 F地区東部推定水田区画

—O Zである。両水田は564—O Sによって北と南に画されているが、規模については調査区外にひろがっているため不明。529—O Zでは、後世の削平をかなり受けているもののH形に遺存する畦畔を検出し、少なくとも(A)～(D)の4小区画の水田が想定される。畦畔幅は60～80cm、高さは最も高いところで10cmが遺存していた。畦畔上部は、ある程度盛られていたものと思われるが(調査段階ではすでに削平されていた)、基底部分は周囲を一段下げることによって削り出した状態で構築されている。耕土は10Y R5/2灰黄褐色粘土で、約5cmが遺存していた。530—O Zでも南北方向の畦畔を2条検出したが、両畦畔間は30～50cmと極めて狭く、同一時期とは考え難い。幅は東側畦畔で40cm、西側畦畔で80cm、高さは両者とも約5cmが遺存していた。耕土は529—O Zと同じで、厚さ約3cmが遺存していた。530—O Zの底面からは瓦器・土師器小片が少量出土するのみであるが、529—O Zからは14世紀～17世紀代の遺物が多量に出土した。これは水田の存続期間を示



第46図 F地区東部第3遺構面全体図

すものであり、特に17世紀代の遺物が多いことから500-OZ (529-OZ上部の第1遺構面で検出) に再編される際にかなりの量が廃棄されたものと思われる。



第47図 554-O-O土層断面図(実測地点は第46図参照)

また、本地区の東側では、鋤溝と考えられる小溝群が多数検出された。これは、本地区が水田面であることを示唆する。溝の方向は北西-南東方向を示す。これらは、埋土によって10Y R5/3にぶい黄褐色砂質シルトと10Y R5/6黄褐色砂質シルトの2群に大別することができる。前者は中央部から北部地域、後者は南部地域に分布する。後者が前者を切るが、出土遺物を見るかぎりでは時期差は認められない。幅10~50cm、深さ2cm前後を測り、出土遺物より14世紀中葉~後葉の時期が考えられる。なお、これらは地形・溝の状況から第45図に示した㊸~㊿の7区画の水田を推定した。その状況はB地区第2遺構面検出の推定水田区画と同じであり、わずかな段差をもって階段状に造成されていたものと思われる。

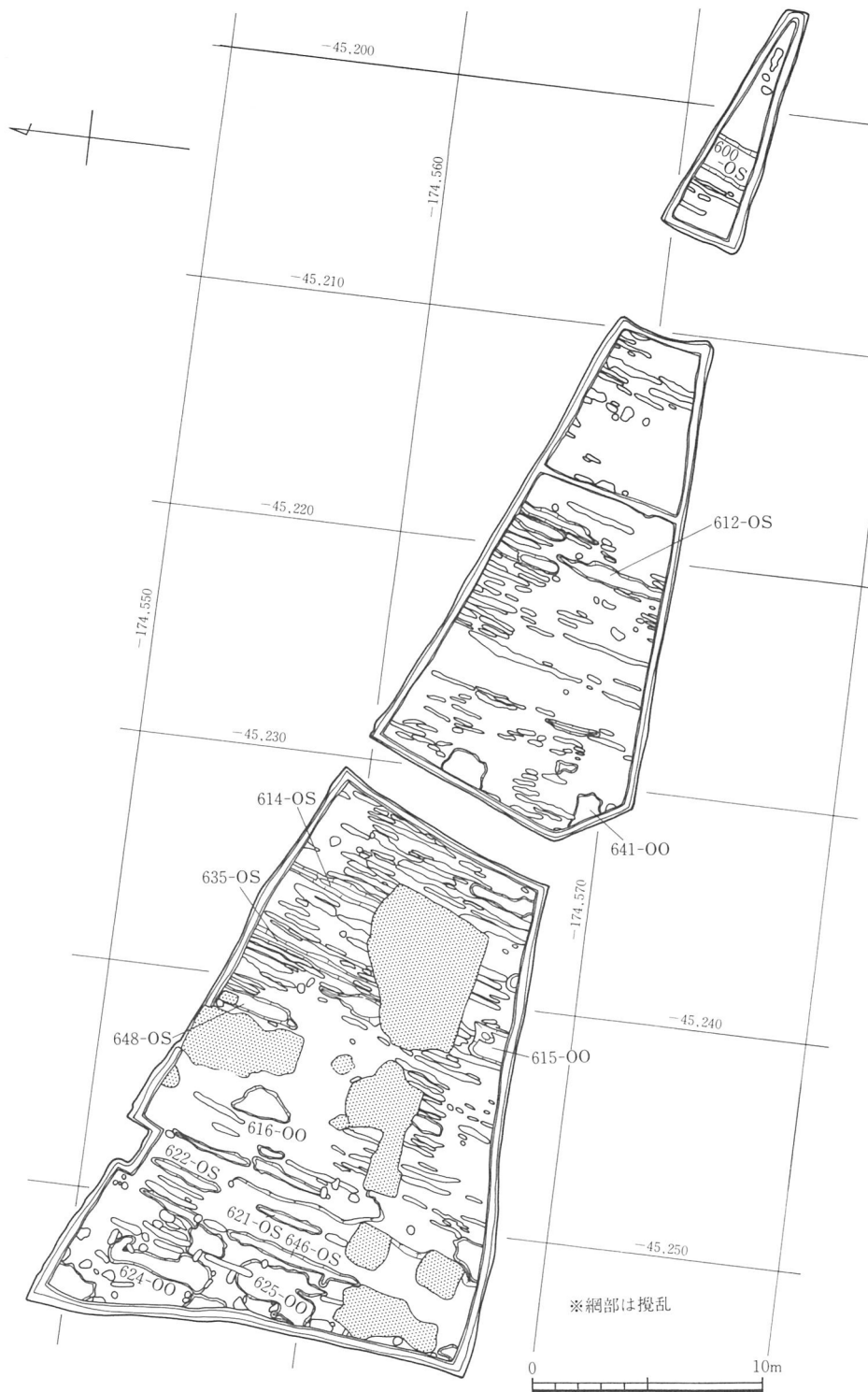
3. 第3遺構面

調査区の東部のみでしか検出することができなかった。遺構面は、東から西の方向へわずかに下降・傾斜した面で、東側でT.P.+133.4m、西側でT.P.+132.8mを測る。検出した遺構は土坑状の落込みみであるが、その大半は自然のものと考えられ、唯一554-O-Oのみが人為的な所産と見られる。

554-O-O (第46・47図) 東側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径3.8m、短径1.8m、深さ0.25mを測り、底面船底状を呈する。埋土は3層に分層でき、時期不明の須恵器片が少量出土する。

第10節 G 地区

本地区では、遺構面を1面しか検出できなかった。この遺構面は、全調査区を通してみただけの場合の第2遺構面に相当する。遺構面はT.P.+131.6m~131.9mに位置する。検出した遺構は、B・C・D・E地区同様水田耕作に伴った鋤溝と考えられる小溝群が大半で、他に溝・土坑がある。



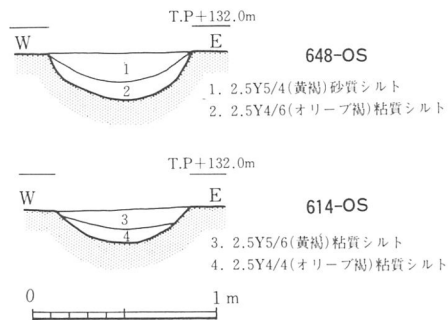
第48図 G地区全体図

600-O S (第48図) 東側で検出した北北東-南南西方向の溝である。総延長2 mを検出したのみで、両端部は調査区外にのびる。幅1.7m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/6褐色砂質シルトで、瓦器小片が出土した。溝の方向が水田面と考えられる小溝群と同じであることから灌漑水路と考えられる。

612-O S (第48図) 中央部東寄り検出した北北東-南南西方向の溝である。北端部は袋状に終り、南側は調査区外にのびる。総延長5 mを検出し、幅0.5~0.8m、深さ0.2 mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R6/2灰黄褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。推定水田区画㊦-O Zと㊧-O Zを画する溝である。

614-O S (第48・49図) 中央部北寄り検出した北北東-南南西方向の溝である。北側は調査区外にのび、南側は後世の攪乱坑によって切られている。総延長4 mを検出し、幅0.3~0.7m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、瓦器・土師器小片が出土する。推定水田区画㊨-O Zと㊩-O Zを画する溝である。

615-O O (第48図) 中央部南西寄りで検出した平面方形の土坑と考えられるが、南側は調査区外である。東西幅1.4m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は2.5Y5/3黄褐色粘質シルトと2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトの上、下2層に分層でき、遺物は出土しない。

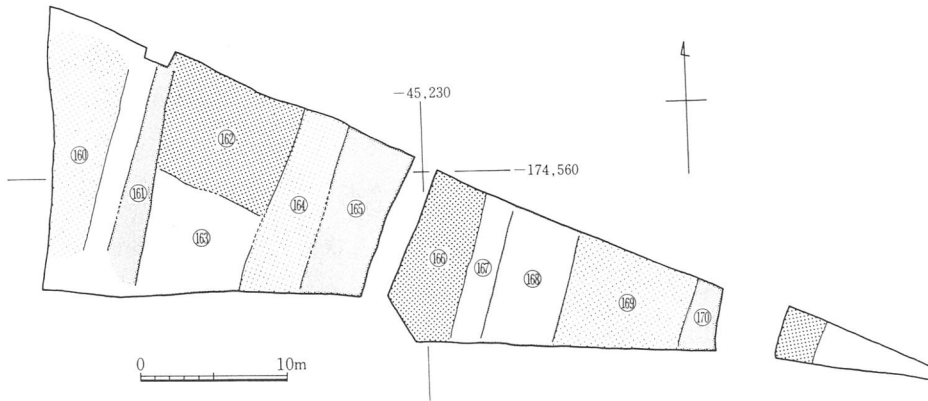


第49図 648・614-O S土層断面

616-O O (第48図) 西側北寄り検出した平面不定形の土坑である。長径2.5m、短径1.3m、深さ0.1mを測り、底面すり鉢状を呈する。埋土は10Y R3/4暗褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。

621・622-O S (第48図) 西側で検出した北北東-南南西方向の溝である。後世の削平のため、とぎれてはいるが、従来は一連のつながった溝と考えられ、さらに北・南側の方向にのびていたものと思われる。幅40~50cm、深さ7cm前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は、10Y R5/4にぶい黄褐色もしくは2.5Y R5/3黄褐色の砂質シルトで、遺物は出土しない。推定水田区画㊪-O Zの西側を画する溝である。なお、本溝の西側には、後述する646-O Sが平行に走り、その両溝間の約1mは里道のような道であった可能性が高い。

624-O O (第48図) 西側北寄り検出した平面不定形の溝状土坑である。長径4.5m、



第50図 G地区推定水田区画

短径0.7m、深さ0.1mを測り、底面船底状を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片と鉄滓が出土した。

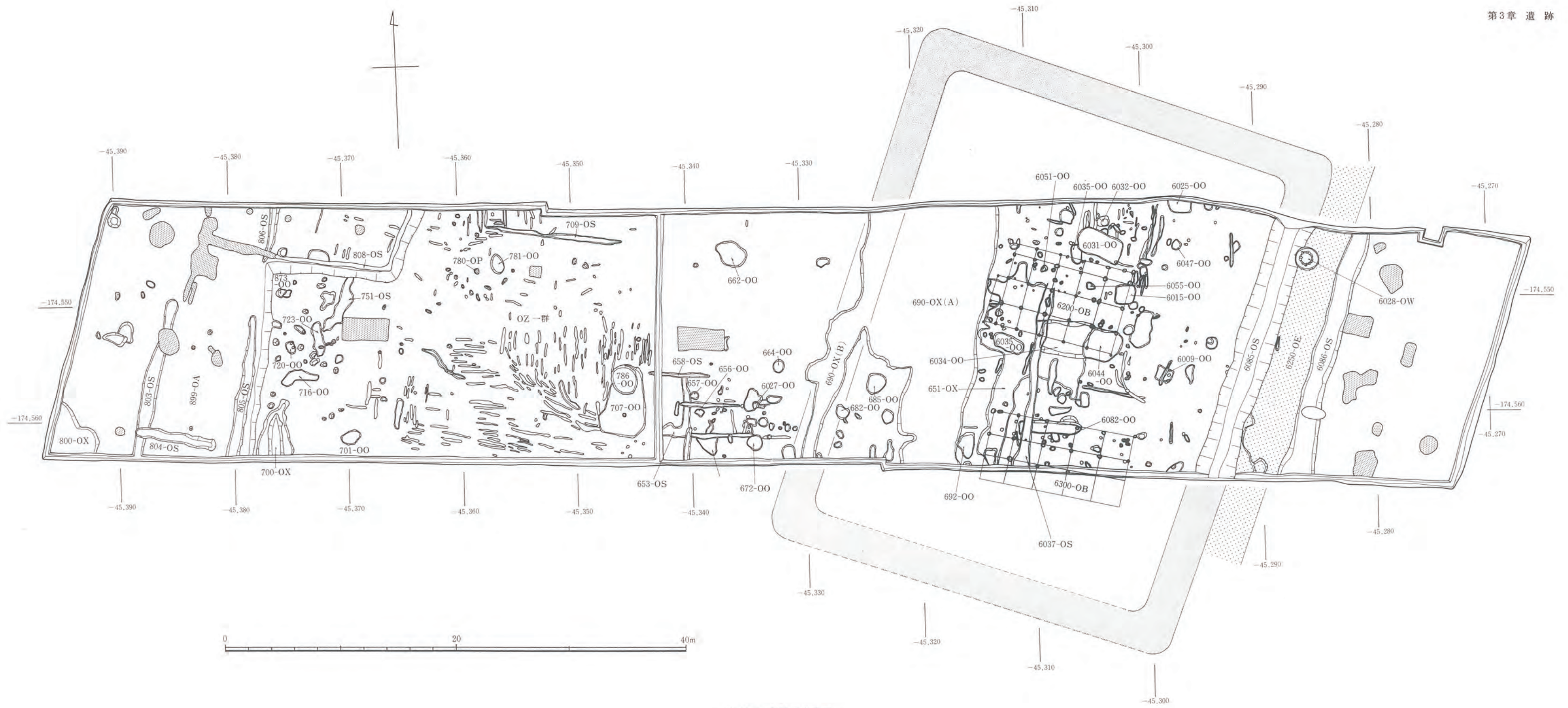
625-〇〇（第48図） 西側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径3.6m、短径1.5m、深さ0.1mを測り、底面船底状を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。

635-〇S（第48図） 中央部で検出した北北東-南南西方向の溝である。北側は調査区外にのび、南側は後世の攪乱坑によって切られている。総延長6mを検出し、幅40~60cm、深さ15cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/2灰黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。推定水田区画㊸-〇Zの西側を画する溝と考えられる。

641-〇〇（第48図） 中央部南寄りで検出した平面不定形の土坑である。西側は調査区外に広がるが、南北幅1m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/2灰黄褐色粘質シルトで遺物は出土しない。

646-〇S（第48図） 西側で検出した北北東-南南西方向の溝である。後世の削平のためとぎれてはいるが、従来は一連のつながった溝と考えられ、さらに北・南側の方向にのびていたものと思われる。幅0.4m前後、深さ0.1m前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5Y R5/4黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。推定水田区画㊸-〇Zの東側を画する溝である。本溝と前記621・622-〇S間は、里道のような道であったと考えられる。

648-〇S（第48・49図） 西側北寄りで検出した北北東-南南西方向の溝である。総延長3.7mを検出し、北側は調査区外にのび、南側は袋状に終る。幅0.8m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、遺物は出土しない。推定水田



第51図 H地区全体図



第52図 H地区東半部建物群周辺実測図

区画⑩-OZの東側を画する溝である。

水田(第48・50図) 全域で鋤溝と考えられる小溝群を多数検出した。これらは、本地区が水田であったことを示唆する。溝の方向は北北東-南南西方向を示す。小溝群は、埋土によって10Y R5/2灰黄褐色砂質シルトと10Y R6/2灰黄褐色砂質シルトの2群に大別することができるが、埋土による時期差は認められない。幅20cm前後、深さ3cm前後を測るものが最も多く、出土遺物より13・14世紀代の水田面と考えられる。なお、これらは地形、溝の状況等から第50図に示したような⑩~⑰の水田区画を推定した。

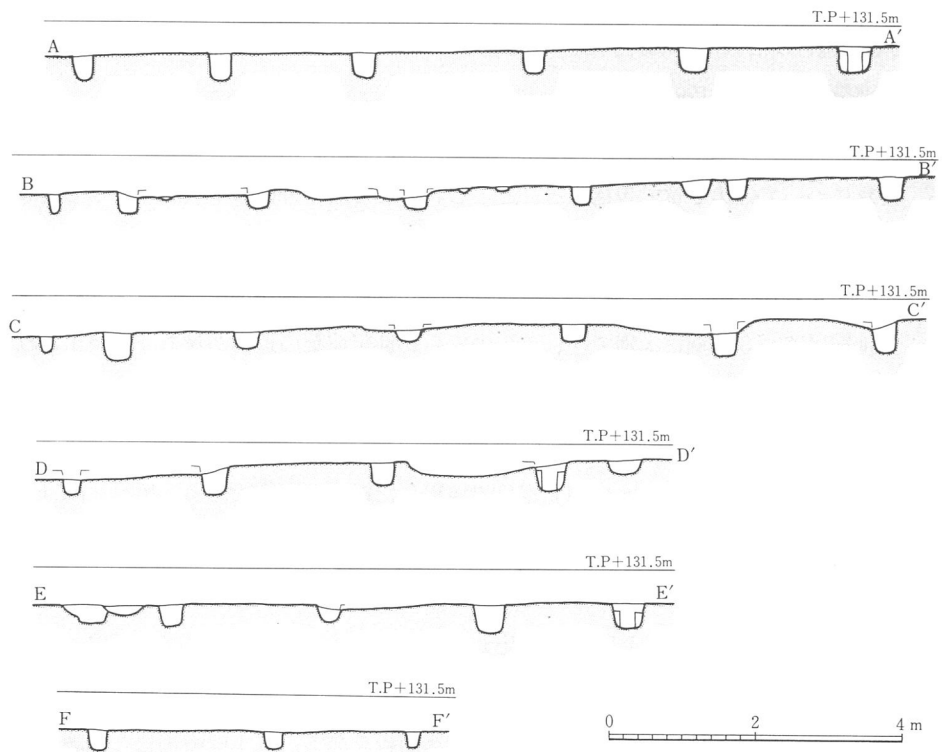
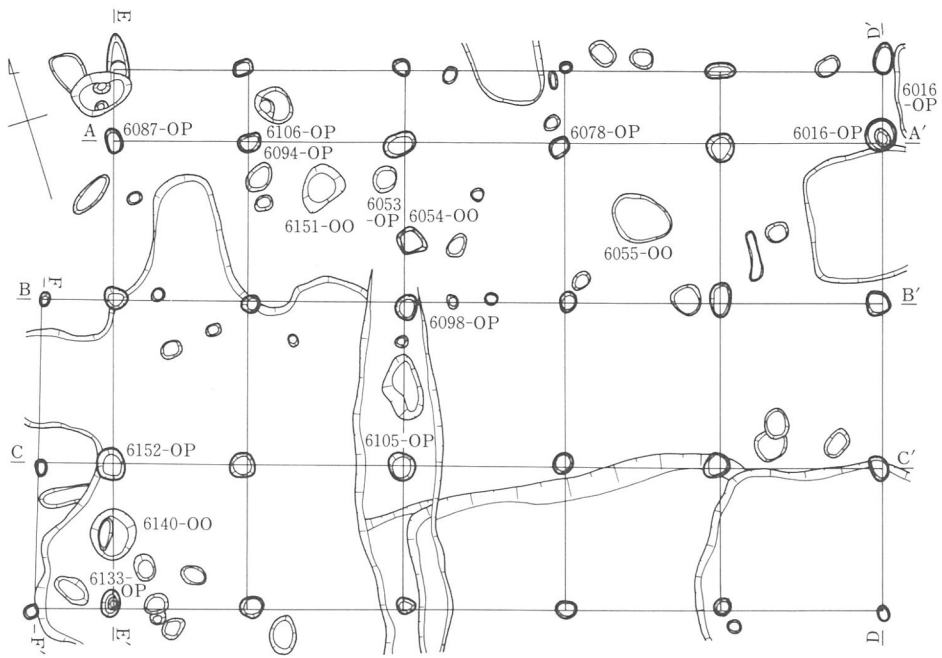
第11節 H地区

本地区では、G地区同様遺構面を1面しか検出できなかった。この遺構面は、全調査区を通してみた場合の第2遺構面に相当するが、一部において第1遺構面や第3遺構面の時期に相当する遺構もあわせて検出している。遺構面は東から西方向へ緩やかに下降・傾斜し、Y=-45.360~45.380ライン付近で平面鉤形に屈曲した急激な崖状の段差(高低差約0.6m)をもち、再び西方に緩傾斜する。東側の最も高い部分で、T.P.+131.5m、西側の最も低い部分でT.P.+128.4mを測る。

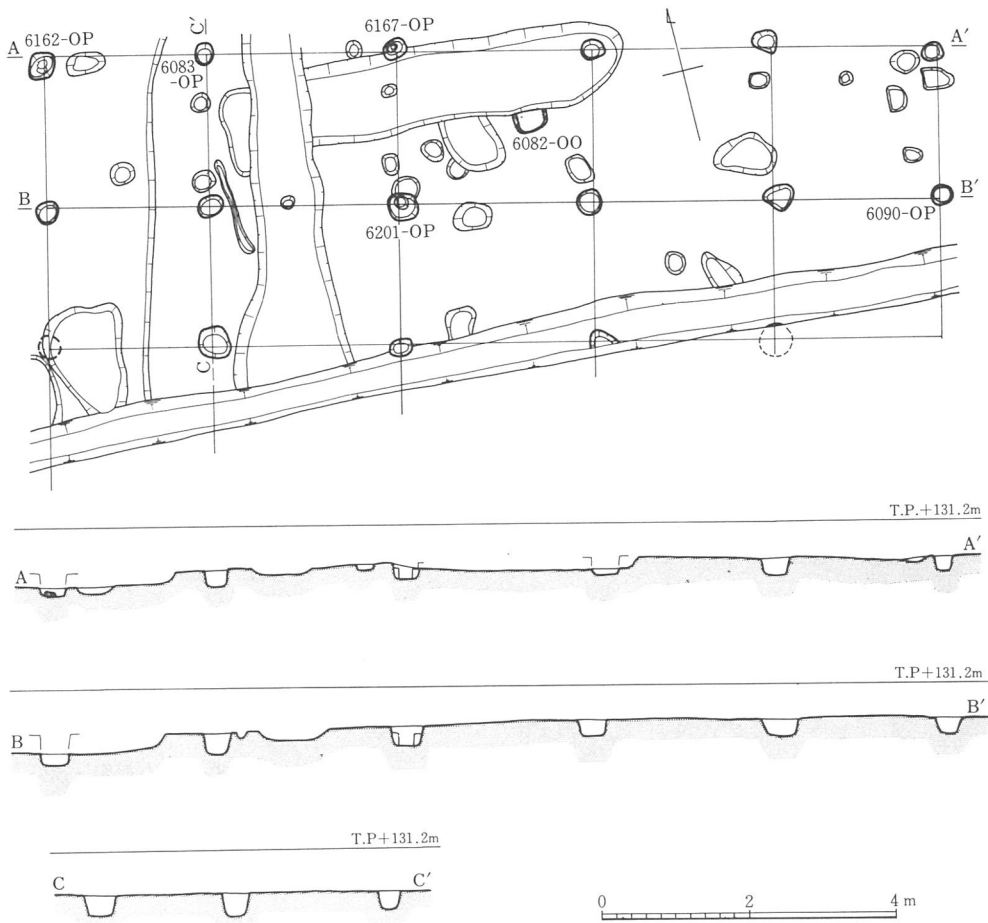
本地区で最も注目されるのは、溝でかこまれた鎌倉時代前半の館跡を検出したことである。これについては第6章で包括することとし、ここでは各遺構の事実関係のみを記載する。検出した遺構には、掘立柱建物・井戸・溝・土坑・その他がある。これらの遺構は、出土遺物から6世紀後葉、10世紀末~11世紀前葉、12世紀末~13世紀中葉、14世紀中葉~末、16世紀以降の5時期に大別でき、その中でも13世紀前葉の遺構が最も多く検出されている。以下、遺構別に記す。

(1) 掘立柱建物

6200-OB(第51~53図) 東側北寄りで検出した総柱の建物である。桁行5間(10.4m)、梁間3間(6.4m)の東西棟で、北側と西側に庇をもつ。柱間距離は桁行方向の西端1間分のみが1.8m(6尺)で他は2.1~2.2m(7尺)のほぼ等間隔を測る。庇は、それぞれ身舎から約1m(3尺?)外側に張出したものであるが、西面庇については、南側2間分のみしか確認できなかった。南北主軸方向はN-16°-Eを示す。身舎の柱掘形は直径25~40cmの略円形を呈し、深さ検出面から30cm前後を測る。埋土は暗褐色を基調とした砂質シルトで、6016・6133-OPには直径約20cmの柱痕が観察された。庇の柱掘形は、身



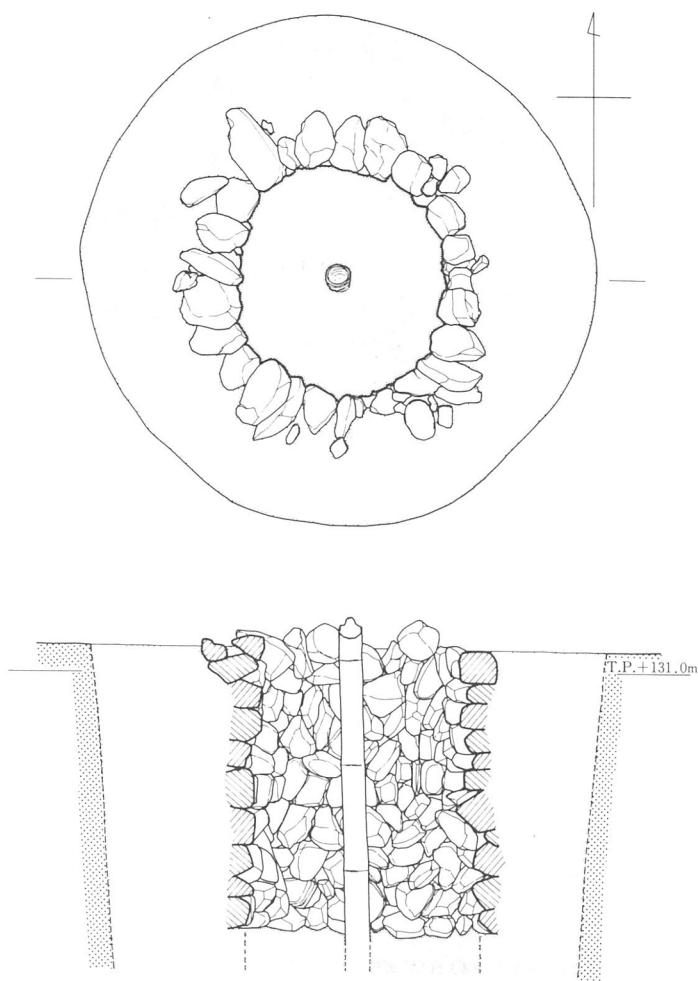
第53図 6200-O B実測図



第54図 6300-O B 実測図

舎より若干小さく、直径20cm前後の円もしくは楕円形を呈し、深さ検出面より20~30cmを測る。各柱穴内からは、13世紀前葉の土器及び鉄製品が出土する。これらは本建物の廃棄時期を示すものであろう。なお、後述する6054-OOは、本建物に伴った地鎮関係の遺構と考えられ、12世紀末の土器と小刀1振が出土していて、本建物の創建時期を示唆する。6034・6044-OOと重複し、それより古い。

6300-O O (第51・52・54図) 東側南寄りで検出した総柱の建物であるが、南側は調査区外である。桁行5間(12m)、梁間2間以上の東西棟であるが、梁間については桁行の規模から3間であったと考えられる。柱間距離は、桁行方向で2.3~2.5m(8尺)、梁間方向で1.8~1.9m(6尺)のほぼ等間隔を測る。南北主軸方向は、6200-O Bよりわずかに北側に振れ、N-12°-Eを示すが、肉眼的にはほぼ平行に近い。柱掘形は直径30~40



第55図 6028-OW実測図

cmの略円形を呈し、深さは検出面より20~30cmを測る。埋土は暗褐色を基調とした砂質シルトで、6167・6201-OPには直径20cmの柱痕が観察され、6162-OPには根石が遺存していた。柱穴内からは、13世紀前葉の土器が出土することから、建物の廃棄時期を示唆すると共に、6200-OBと同時期の建物であることが知られる。

(2) 井戸

6028-OW(第51・52・55図) 東側北寄りで見出した石組井戸である。地元の伝聞によれば数年前まで使用していた井戸とされ、深さ約6mはあったとされる。しかし、調

査時における掘削深度は危険防止の観点から約1.2mまでしか実施していない。井側は人頭大の自然礫を平面円形に積み上げたもので、直径0.9mを測る。掘形は、直径2.1mの平面円形を呈する。井戸の構築時期については、調査段階で遺物が出土していないことから明確にはできないが、井戸の形態及び使用期間等から近世以降の所産と考えたい。なお、井戸中央部には直径7cmの節を抜いた竹が底面より突き刺さった状態で遺存していた。これは井戸廃絶時に「息抜」と呼ばれる一種の祭祀的なものである。

(3) 溝

653-OS(第51図) 中央部南寄りで見出した溝で、東-西方向の溝と南-北方向の

溝からなり、両溝はほぼ直角につながる。東端部は袋状に終り、北端部と西端部はそれぞれ、658-O Sと調査時の排水溝によって切られているが、東端部同様袋状に終わっていたと思われる。幅30~80cm、深さ10cm前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。

658-O S (第51図) 中央部西寄りで検出した東-西方向の溝である。総延長5.5mを検出し、西端部は袋状に終る。幅30cm、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5Y 5/2暗褐色砂質シルトで遺物は出土しない。653-O Sと重複し、それより新しい。

6010-O S (第52図) 東側南寄りで検出した東-西方向の溝である。総延長5.7mを検出し、両端部は袋状に終る。幅20cm、深さ5cm前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色粘質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。6011-O Sと重複し、それより古い。

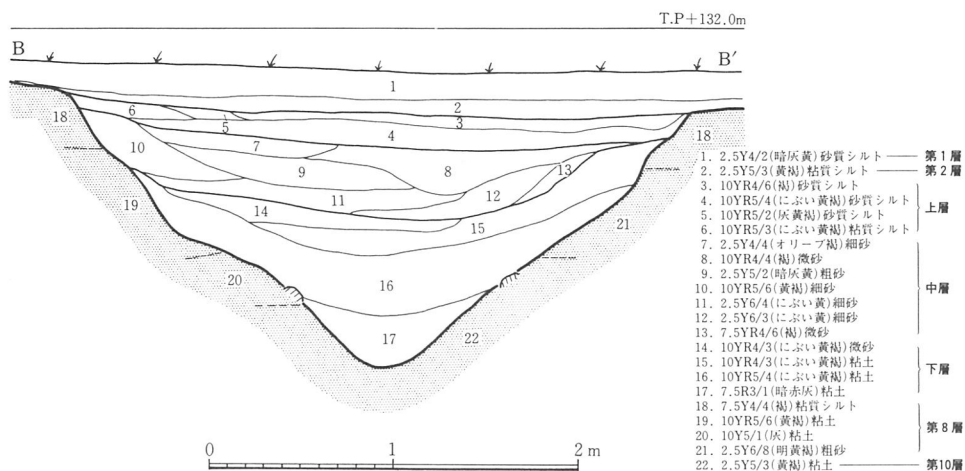
6011-O S (第52図) 東側南寄りで検出した北から東方向へ円弧状にカーブを呈した溝である。総延長5.5mを検出し、両端部は袋状に終る。幅20cm、深さ5cm前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。6010-O Sと重複し、それより新しい。

6023-O S (第52図) 東側北寄りで検出した南-北方向の溝であるが、わずかに東側に振れる。総延長5mを検出し、北側は後世の削平のため袋状に消滅し、南側は13世紀前半の土坑に切られている。幅30cm、深さ6cm前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/2灰黄褐色砂質シルトで、黒色土器A類の破片が出土することから10世紀後葉~11世紀初頭の所産と考えられる。

6024-O S (第52図) 東側北寄りで検出した南-北方向溝であるが、わずかに東側に振れる。総延長3.7mを検出し、両端部は袋状に終る。幅20~40cm、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/2灰黄褐色粘質シルトで、瓦器片が出土する。

6037-O S (第51・52・57図) 東側で検出した南-北方向の溝であるが、わずかに東側に振れる。総延長16mを検出し、南側は調査区外にのび、北側は後世の削平のため自然消滅する。幅0.7~1.5m、深さ15cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、13世紀中葉の瓦器・土師器が出土する。6200・6300-O B及び6034-O Oと重複し、これらより新しい。

6045-O S (第51・52図) 東側南寄りで検出した南-北方向の溝であるが、わずかに東に振れる。総延長3.1mを検出し、両端部は袋状に終る。幅70cm、深さ7cmを測る。埋



第56図 6085-O S南壁土層断面図 (実測地点は第52図参照)

土は2.5Y5/4黄褐色粘質シルトで土師器と須恵器小片が出土する。

6085-O S (第51・52・56図) 東側で検出した南南西-北北東方向の溝である。総延長24mを検出し、両端部は調査区外にのびる。幅3.5m、深さ1.5mを測り、断面V字形を呈する。埋土は、基本的に上・中・下の3層に大別でき、さらに各層ごとに細分が可能である。遺物の出土量は極めて少なく、中層上面から16世紀代の青磁片とタタキを施した土師質甕の体部がそれぞれ1点出土したのみである。しかし、本溝は建物6200・6300-O Bと方向がほぼ同じであること、また前記建物と同一時期と考えられる溝6086-O Sと平行で同一方向を示すことから、これらの遺構と同一時期、すなわち12世紀末～13世紀前半に掘削されたものと考えたい。

本溝は、現地地形等から第51図で示すように建物6200・6300-O Bを囲むようにめぐっていた可能性が高く(これについては第6章で述べる)、後述する690-O X (B)はそのなごりと考えられる。すなわち、屋敷地を画する溝で、その形態から防禦を目的としたものであろう。

ところで、本溝は3層に分層できたが、下層の堆積状況からして、流水及び滞水の状態は認められず、一般に思われているような水をたたえたような堀ではなく、空堀であったことがわかる。しかも、下層からは拳大の礫が多量に含まれていることから、これらの礫を使用した土塁がめぐっていた可能性が高い。この場合、土塁は館の空間からして本溝の外側に想定せざるを得ない。本溝と6086-O Sとの間、幅3.5mの空間がそれにあたる。このように考えるならば、堀が土塁の内側、すなわち館側に面していたことから、つねに

清掃がいきとどき、そのため下層からの遺物の出土がみられなかったのであろう。

しかし、下層が水成堆積でなかったのに対して、中層では砂のみが堆積していることから、かなりの流水が想定される。また、前記下層出土の土塁使用礫は、下層の上部に多く、しかも人為的に投棄された状態で出土していること、さらに下層部は非常に堅くひきしまっていることから、人為的作用がはたらいていたと思われることなどから、その後、おそらく周辺の遺構・遺物から考えて、14世紀中葉～後葉頃に灌漑用水路として改修されたと考えたい。その北端は、現在の用水路に取り付く位置にあたる。存続期間は中層上面から16世紀の青磁片等が出土していることから、少なくともこの時期までは使用されていたことがわかる。なお、本溝出土の青磁片と約270m離れたB地区第1遺構面検出の暗渠04-O I出土の青磁片が同一個体であることが判明している。この時期にこの地域全体に対して、ある一定の開発が行なわれたことを示唆するものとして留意される。

6086-O S (第51・52図) 東側で検出した南南西-北北東方向の溝である。総延長23mを検出し、両端部は調査区外にのびる。幅1.8~2.8m、深さ0.4mを測り、断面U字形を呈する。埋土は7.5Y R3/2黒褐色粘土で、13世紀前葉の土器が多量に出土する。

本溝は、建物6200・6300-O B及び6085-O Sと同一時期で、しかも同一方向を示すことから6085-O S同様、館跡を画する溝と考えられ、本溝より東側の周辺地域では、遺構は全く検出されなかった。しかし、溝の規模、形態からして純粹に防禦を目的としたものではなく、また館の周囲全体にめぐっていたとは考えがたい。本溝は、その堆積状況から常時滞水状態であったと思われ、館の外堀を一部兼ねた灌漑用水路として機能していたと考えたい。

709-O S (第51図) 西側北寄りで検出した東-西方向の溝であるが、わずかに北側に振れる。総延長12mを検出し、両端部は袋状に終る。幅20~50cm、深さ10cm前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、14世紀中葉の土器が出土する。後述する推定水田区画⑴⑵-O Zの南側を画する溝である。

751-O S (第51図) 西側北寄りで検出した南-北方向の溝であるが、わずかに東に振れる。総延長5mを検出し、北側は段落ちによって切られ、南側は袋状に終る。幅は一定でなく0.6~1.1m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、13世紀前葉の瓦器片が出土する。

803-O S (第51図) 西側で検出した北北東-南南西方向の溝である。総延長14mを検出し、北側は袋状に終り、南側は調査区外にのびる。幅1~1.4m、深さ0.2mを測り、

断面V字形を呈する。埋土は礫混りの10Y R5/6黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。道899-O Aの西側側溝と考えられる。

804-O S（第51図） 西側南寄りで検出した東-西方向の溝であるが、わずかに北に振れる。総延長7mを検出し、両端部は袋状に終る。幅0.8m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。803-O Sと重複し、それより新しい。

805・806-O S（第51図） 西側で検出した北北東-南南西方向の溝である。805-O Sと806-O Sは、途中5mの間隔があいてはいるが一連の溝と考えられる。両端部は調査区外にのびる。幅0.5~1m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は礫混りの10Y R4/4褐色粘質シルトで、遺物は出土しない。道899-O Aの西側側溝と考えられる。

808-O S（第51図） 西側北寄りで検出した北東から西方向に逆L字形に屈折した溝で、段状に落下した部分の下辺部にそっている。総延長15mを検出し、西側は袋状に終る。幅30cm、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。近世以降の水田耕作に関係した溝であろう。

（4）土坑

656-O O（第51図） 中央部南寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径0.8m、短径0.6m、深さ5cmを測り、断面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。

657-O O（第51図） 中央部南寄りで検出した平面略楕円形の土坑である。長径0.9m、短径0.5m、深さ7cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。653-O Sと重複し、それより古い。

662-O O（第51・60図） 中央部北寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径2.8m、短径2.1m、深さ0.15mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は2.5Y R4/4オリーブ褐色砂質シルトで、拳大~人頭大の石が廃棄された状態で出土する。時期については明確ではないが、開墾・整地時に出土した礫の廃棄坑と考えられる。

664-O O（第51図） 中央部で検出した平面楕円形の土坑である。長径1.2m、短径0.9m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は2.5Y 4/4オリーブ褐色砂質シルトで、拳大の石が廃棄された状態で出土する。662-O O同様、開墾・整地時に出土した礫の廃棄坑と考えられる。

672-O O（第51図） 中央部南寄りで検出した平面ほぼ円形の土坑である。直径1.3m、

深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、土師器小片が出土する。653-O Sと重複し、それより新しい。

682-O O (第51・52・59図) 中央部南寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径1.4m、短径1.0m、深さ0.15mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、土師器小片が出土する。

685-O O (第51・52図) 中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径1.9m、短径1.6m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルトで、拳大の石が廃棄された状態で出土する。開墾時に出土した礫の廃棄坑と考えられる。

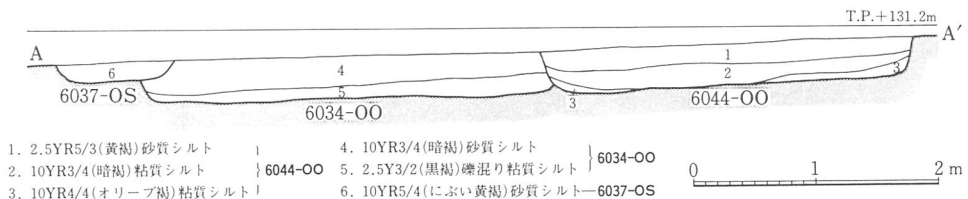
692-O O (第51・52図) 西側南西寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径2.2m、短径1.4m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。

6009-O O (第51・52図) 東側中央部で検出した平面略方形を呈した土坑である。長辺1.5m、短辺1.0~1.2m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、12世紀末~13世紀前葉の土器が出土する。

6015-O O (第51・52図) 東側北寄りで検出した平面正方形の土坑である。一辺1.5m、深さ0.15mを測り底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色粘質シルトで、13世紀前葉~中葉の土器が出土する。6200-O Bと重複し、それより新しい。

6025-O O (第51・52図) 東側北端で検出した平面略方形を呈した土坑と考えられるが、北側は調査区外のため不明。東西幅2.1m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は、礫を多く含んだ10Y R4/4褐色粘質シルトで、遺物は出土しない。

6027-O O (第51・58図) 中央部南寄りで検出した平面略楕円形の土坑である。長径76cm、短径55cm、深さ10~15cmを測り、南側がわずかに深くなる。埋土は5Y R3/2暗赤褐色粘質シルトで、ほぼ完形の6世紀代の土師器甕が1点出土した。甕は南側を口にして、人為的に置かれた状態で出土している。墓の可能性が考えられる。多くの溝、土坑と重複



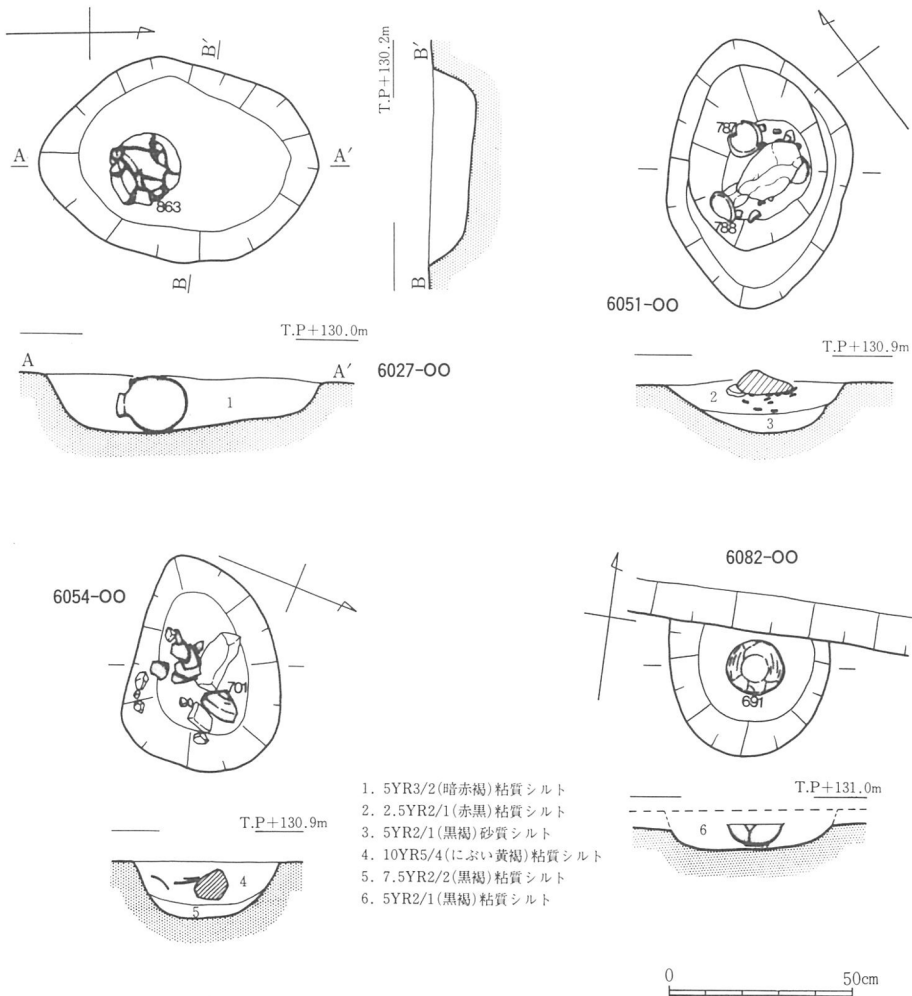
第57図 6037-O S・6034-O O・6044-O O関係土層断面図(実測地点は第52図参照)

するが、それらより古い。

6031-〇〇（第51・52図） 東側北寄りで検出した平面略隅丸方形を呈した土坑である。長径4.1m、短径2.1m、深さ0.25mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色粘質シルトで、13世紀前葉の土器が多量に出土した。

6032-〇〇（第51・52図） 東側北寄りで検出した平面略楕円形の土坑である。長径1.1m、短径0.9m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色砂質シルトで、黒色土器(A類)・土師器片が出土する。

6034-〇〇（第51・52・57図） 東側中央部で検出した平面隅丸方形を呈した土坑と考えられるが、東側を6044-〇〇、西側を6037-〇Sによって切られている。長径5m前後、



第58図 6027・6051・6054・6082-〇〇遺物出土状態図

短径3m、深さ0.35mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、13世紀前葉の土器が多量に出土する。6200-OBと重複し、それより新しい。

6035-OO（第51・52図） 中央部西寄りで検出した平面楕円形の土坑である。長径2.7m、短径1.3m、深さ0.1mを測り、断面船底状を呈する。埋土は10Y R5/2灰黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。

6036-OO（第51・52図） 東側南寄りで検出した溝状の土坑である。長径5.5m、短径1.1m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、瓦器・土師器・須恵器片が出土する。6037-OS及び6300-OBと重複し、前者より古く、後者より新しい。

6038-OO（第51・52図） 東側南寄りで検出した平面円形の土坑であるが、南側は6036-OOによって切られている。直径1.5m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色粘質シルトで、瓦器・土師器小片が多量に出土した。6036-OOと重複し、それより古い。

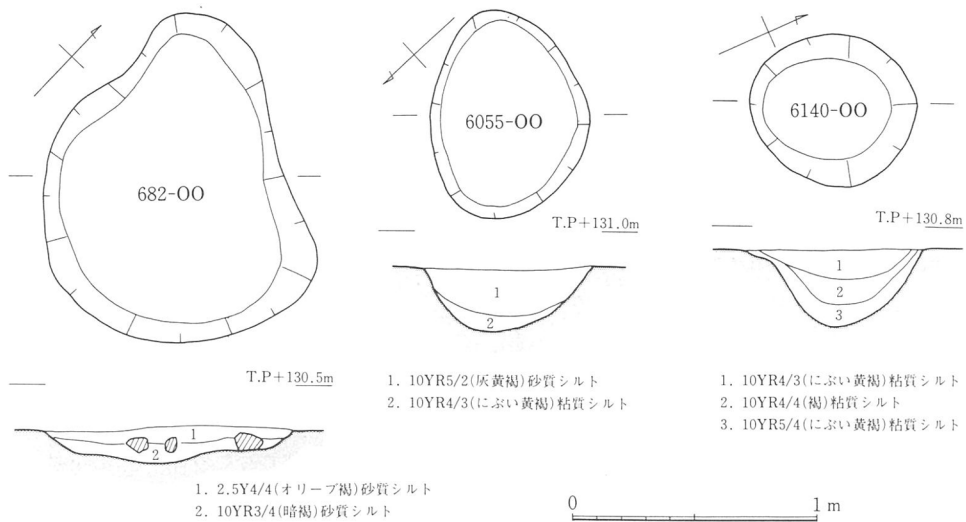
6040-OO（第51・52図） 東側南寄りで検出した平面隅丸方形の土坑である。長径1.3m、短径0.7m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は2.5Y 4/4オリーブ褐色砂質シルトで、土師器小片が出土する。

6042-OO（第51・52図） 東側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径3.3m、短径1.5m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R6/3にぶい黄橙色で、瓦器・土師器小片が出土する。

6044-OO（第51・52・57図） 東側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径3.2m、短径2.6m、深さ0.25mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は3層に分層でき、多量の13世紀前葉の土器と鉄製品が出土した。6200-OB及び6034-OOと重複し、それらより新しい。

6047-OO（第51・52図） 東側北寄りで検出した平面略円形の土坑である。直径0.8m、深さ0.1mを測り、底面凹凸が著しい。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色粘質シルトで、瓦器・土師器及び混入と考えられる黒色土器(A類)の小片が少量出土する。

6051-OO（第51・52・58図） 東側北寄りで検出した平面略楕円形の土坑である。長径73cm、短径50cm、深さ15cmを測り、2段に掘り込まれた状態を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、上層より13世紀前葉の土器・鉄製品及び20×10cm大の石が出土した。なお出土遺物は小皿が主である。切合関係は認められないが、6200-OBと重複し、出土遺物



第59図 682・6055・6140-〇〇実測図

を見る限りではそれより古い。6054-〇〇同様、6200-〇Bに伴った地鎮遺構の可能性も考えられる。

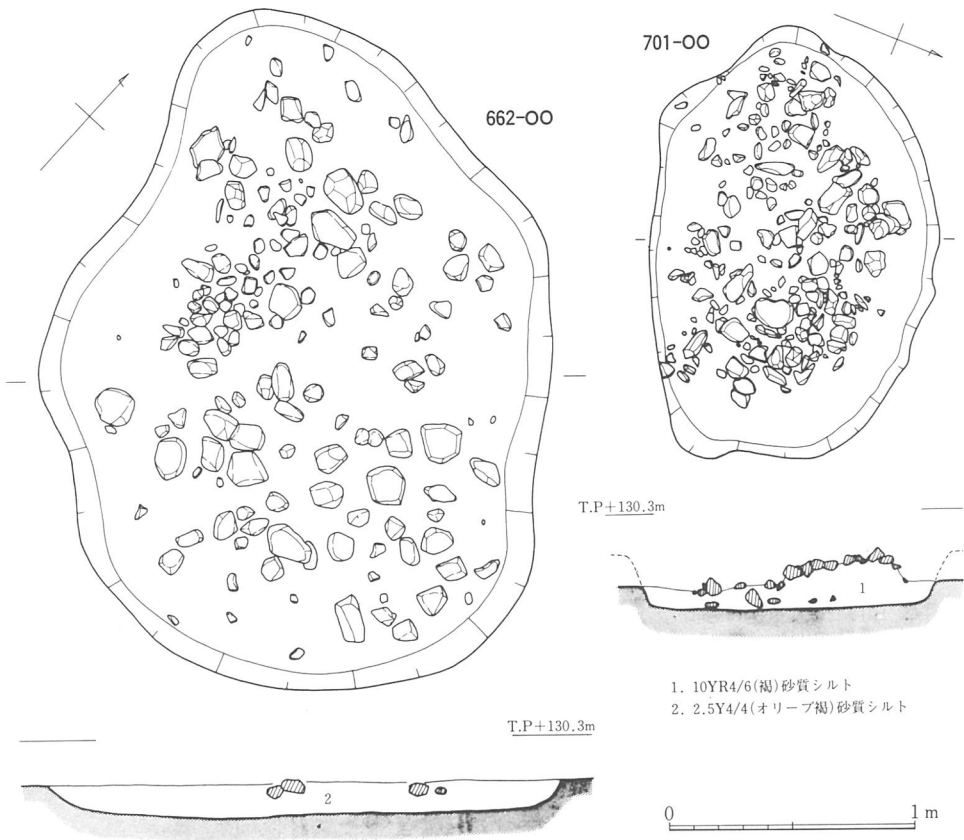
6054-〇〇(第51・52・58図) 東側北寄りで検出した平面卵形の土坑である。長径60cm、短径40cm、深さ15cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、12世紀末～13世紀初頭の土器及び小刀が1振出土した。切合関係はないが6200-〇Bと重複し、出土遺物で見るとそれより古い。6200-〇B建築に伴う地鎮遺構と考えたい。

6055-〇〇(第51・52・59図) 東側北寄りで検出した平面卵形の土坑である。長径85cm、短径65cm、深さ25cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、10世紀末～11世紀初頭の土器が出土する。切合関係は認められないが、6200-〇Bと重複し、出土遺物を見る限りでは、それより古い。

6066-〇〇(第51・52図) 東側南寄りで検出した平面卵形の土坑である。長径80cm、短径50cm、深さ7cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10YR4/4褐色粘質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。

6140-〇〇(第51・52・59図) 東側中央部で検出した平面楕円形の土坑である。長径0.7m、短径0.6m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は3層に分層でき、遺物は出土しない。切合関係は認められないが、6200-〇Bと重複する。前後関係については不明。

6082-〇〇(第51・52・58図) 東側南寄りで検出した平面楕円形のピット状の土坑であるが、北側は6036-〇〇によって切られている。推定長径60cm前後、短径45cm、深さ10



第60図 662・701-00実測図

cm前後を測り、底面鍋底状を呈する。埋土は5YR2/1黒褐色粘質シルトで、13世紀前葉の瓦器碗1個体が上向きにすえられた状態で出土した。6300-0Bとほぼ同時期と考えられるが、地鎮に関係した遺構の可能性が高い。

6168-00 (第51・52図) 東側北寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径0.8m、短径0.5m、深さ0.3mを測り、2段に掘られている。埋土は10YR3/3暗褐色粘質シルトで、遺物は出土しない。6200-0Bの南北柱筋の中央に位置することから、東柱の柱穴であった可能性も考えられる。6037-0Sと重複し、それより古い。

701-00 (第51・60図) 西側南寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径1.8m、短径1.2m、深さ0.2m前後を測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10YR4/4褐色砂質シルトで、拳大～人頭大の石が廃棄された状態で出土する。開墾・整地時に出土した礫の廃棄坑と考えられる。

707-00 (第51図) 中央部南西寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径3.1m、

短径1.7m、深さ8cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は7.5Y R4/3褐色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が出土する。786-〇〇と重複し、それより古い。

716-〇〇（第51図） 西側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径3.2m、短径0.9m、深さ0.1m前後を測り、底面凹凸が著しい。埋土は礫を多く含んだ10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。

720-〇〇（第51図） 西側中央部で検出した平面楕円形の土坑である。長径1.2m、短径0.7m、深さ0.15mを測り、底面凹凸が著しい。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、土師器小皿が出土する。

723-〇〇（第51図） 西側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径3.1m、短径0.8m、深さ6cmを測り、底面船底状を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで瓦器小片が1点出土した。

781-〇〇（第51図） 西側北東寄りで検出した平面楕円形の土坑である。長径1.7m、短径0.9m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、瓦器・土師器片が出土する。

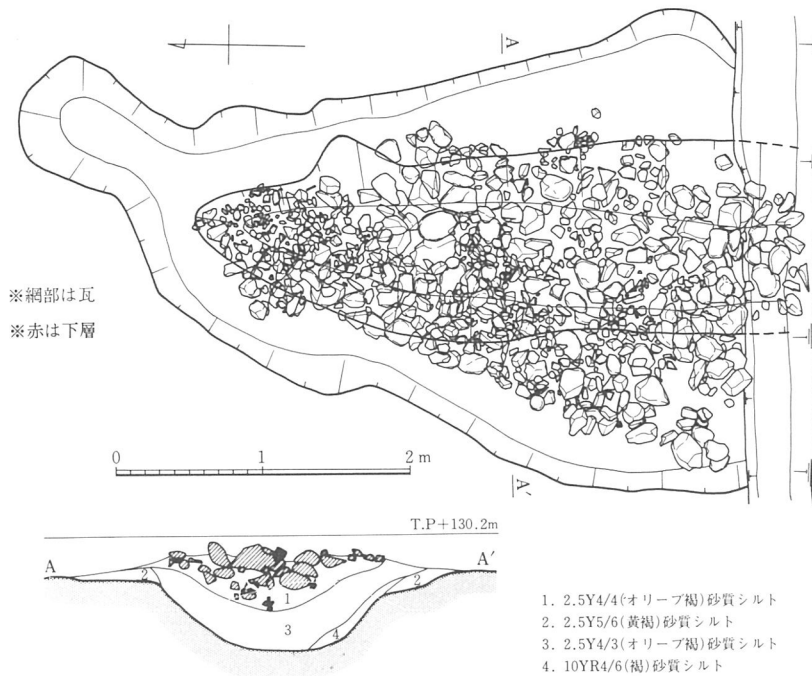
786-〇〇（第51図） 西側南東寄りで検出した平面円形の土坑である。直径1m前後、深さ0.15mを測り底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/2灰黄褐色砂質シルトで、13世紀前葉の土器が出土する。707-〇〇と重複し、それより新しい。

873-〇〇（第51図） 西側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径1.1m、短径0.7m、深さ0.2mを測り、底面凹凸が著しい。埋土は7.5Y R4/6褐色砂質シルトで、13世紀前葉～中葉の土器が出土する。

（5）その他の遺構

651-〇X（第51・52図） 東側で検出した不定形の溝状の落込みである。深さは5～10cm前後を測る。埋土は5Y R2/2黒褐色砂質シルトで、遺物包含層とほぼ同じであることから区別しにくい。6200・6300-〇Bと重複し、それより古く、出土遺物で見るとかぎりでは、両建物構築時に埋められたものと考えたい。

690-〇X（第51・52図） 中央部東寄りで検出した溝状の落込みである。館廃絶後に削平されたもので、深さ10～30cmを測る。埋土は2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルトであるが、拳大の石が多量に出土する。しかも、これらはよくひきしまっていることから、館の土塁等に使用した石を廃棄した後に、新に耕地として整地されたためと考えられる。690-〇X（B）は館の西側を画していた堀底部の残欠の可能性が高く、6085-〇Sとつながっ

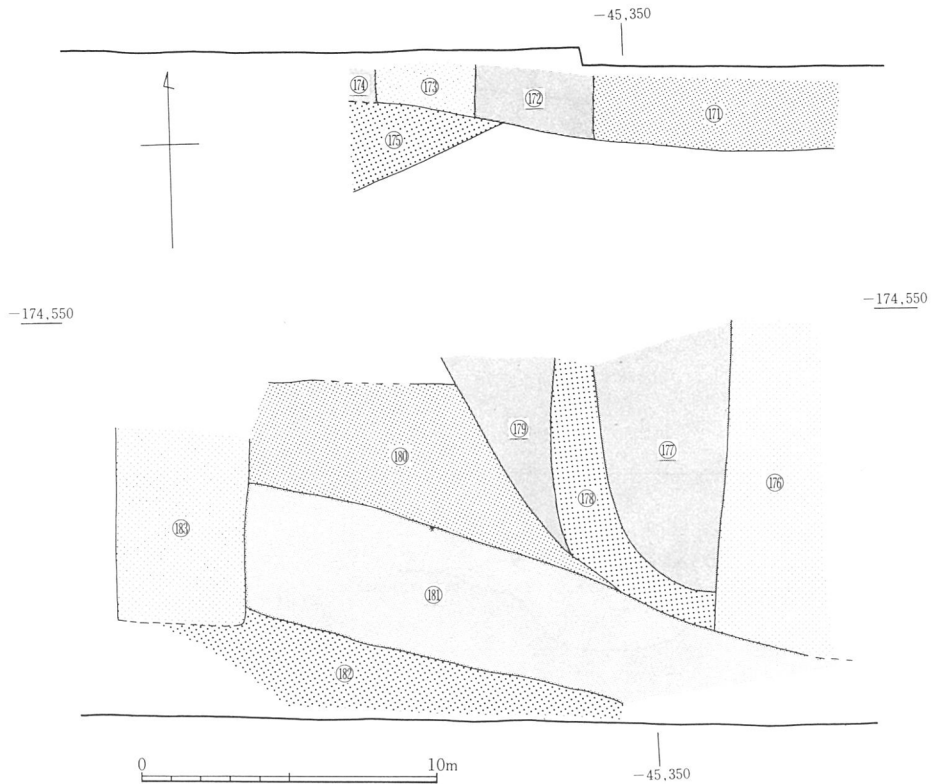


第61図 700-OX実測図

ていたと考えたい。埋土中より瓦器・土師器小片が出土する。

6250-O E (第51・52図) 東側に位置する南南西-北北東方向の土塁跡と考えられる。6085-O S と6086-O S の間、幅約3.5mの空間地は、すでに後世の削平のため平坦な面として検出されたが、6085-O S 等から多量の石が出土していることから、従来はこれらの石を使用した土塁がめぐっていたものと想定できる。その方向から6085-O S 同様、6200・6300-O B 等の屋敷地の防禦を目的としたものと考えられる。しかし、屋敷の周囲すべてにめぐっていたかどうかについては、疑問が残る。また、土塁本来の高さもそれほど高いものではなかったと考えられ、その上面に板塀的なものがあつたと推定したい。

700-O X (第51・61図) 西側南寄りで検出した平面不定形の落込みである。総延長5.5mを検出し、南側は調査区外に続く。検出部分の最大幅3.5m、深さ0.6mを測り、2段に掘り込まれ、断面U字形を呈する。埋土は4層に分層でき、上層には拳大～人頭大の礫石及び瓦が一見ならべられた状態で廃棄されている。また16世紀～17世紀代の土器・陶磁器もあわせて出土している。これらの中には2次焼成を受けたものが多く含まれている。このことから、現在は当地区北西の福瀬戎神社境内にある小堂寺の前身寺院が、当地区の南側にあつたとされており、本寺院が焼失した後に、整理する段階で廃棄されたものである



第62図 H地区中央部推定水田区画

う。なお、混入と考えられる瓦器片も出土する。

800-O X (第51図) H地区からI地区にかけて検出した遺構であるが、大半がI地区で検出されていることから、本遺構についてはI地区のところで説明する。

899-O A (第51図) 西側で検出した北北東-南南西方向の道跡である。両側に側溝として803-O Sと805・806-O Sがある。幅7m前後を測り、両端部は調査区外にのびる。本地区の南側に小堂寺(本地区北東の戎神社境内にある)の前身寺院があったとされることから、その参道と考えられる。

ピット群(第51・52図) 東側と中央部南寄り、西側北寄りの3群に大別できる。東側の大半は柱穴と考えられるが、他については不明。これらは、直径10~30cm、深さ5~30cmを測り、平面略円形を呈する。埋土は、褐色もしくは暗褐色砂質シルトで、13世紀代の遺物を出土するものが最も多いが、一部10~11世紀代の遺物が出土するものもある。特に6053-O Pの出土遺物は多い。また780-O Pからは石鏝も出土している。

水田(第51・62図) 西側中央部寄りで鋤溝と考えられる小溝群を多数検出した。こ

れらは本地域が水田であったことを示すものであろう。これら小溝群は南―北・東―西・北西―南東方向を示すものに大別できる。幅10～20cm、深さ3cm前後を測るものが最も多い。埋土は10Y R3/4暗褐色砂質シルトと10Y R5/3にぶい黄褐色砂質シルトのものがあり、前者は北側に多く、後者は中央部から南側に多い。遺物量は少ないが、13世紀～14世紀代の土器片が出土することから、本水田の時期を示唆する。なお、溝の方向、埋土の状況、地形等から第62図に示した㊸～㊾の水田区画を推定した。

第12節 I 地区

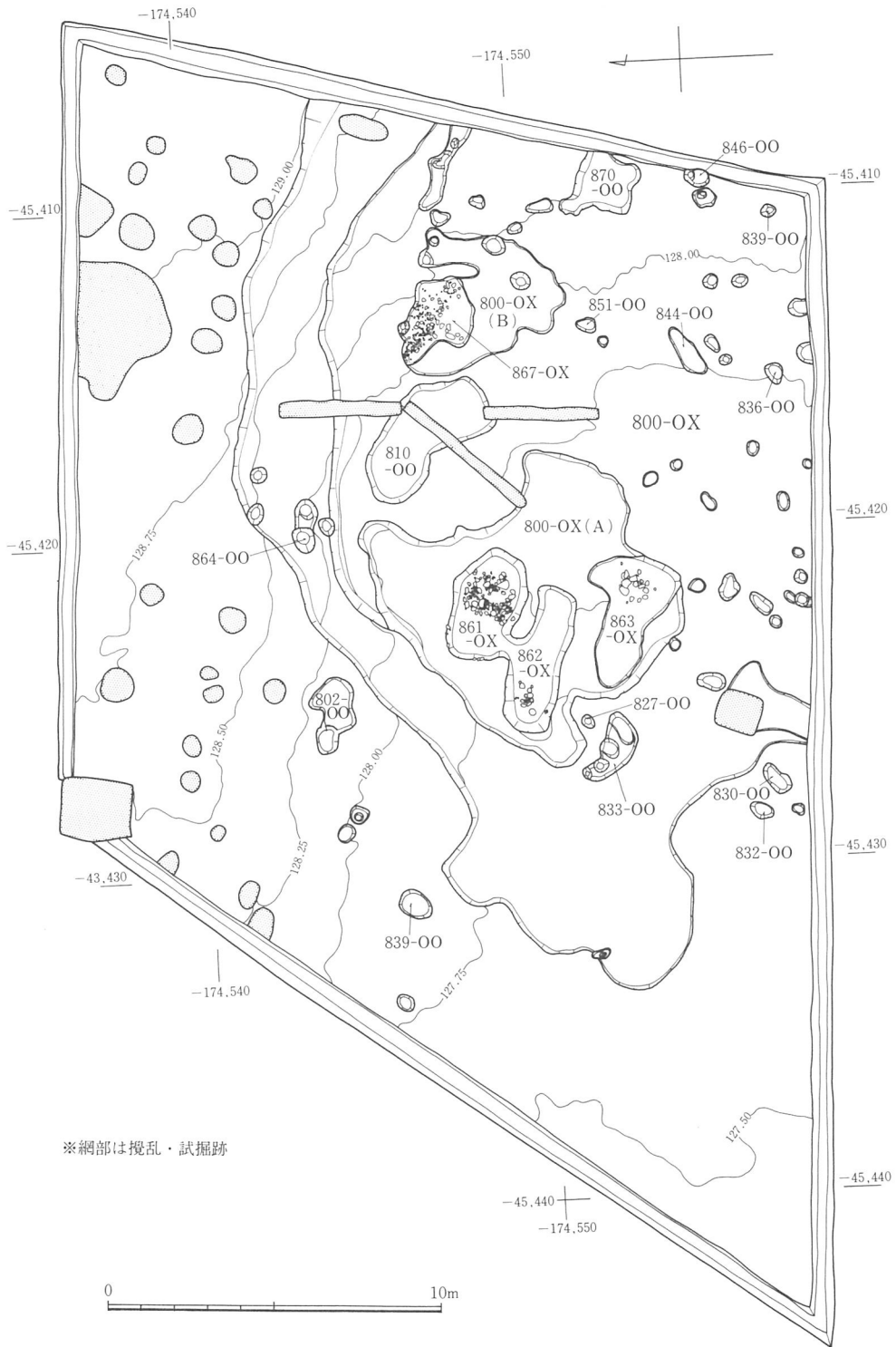
本地区においても、G・H地区同様遺構面を1面しか検出することができなかった。この遺構面は、全調査区を通してみた場合の第2遺構面に相当する。遺構面は北東から南西方向へ下降・傾斜し、最も高いところでT.P.+130.2m、最も低いところでT.P.+127.3mを測る。本地区の西側には、高低差約7mの段丘崖がみられる。また、地区内の北側には植木による攪乱坑が多数存在する。

検出した遺構には、土坑・集石遺構・谷状遺構等がある。これらの遺構は、出土遺物から8世紀後葉、13世紀前葉、14世紀中葉の3時期の遺構に大別できる。以下、遺構番号順に記す。

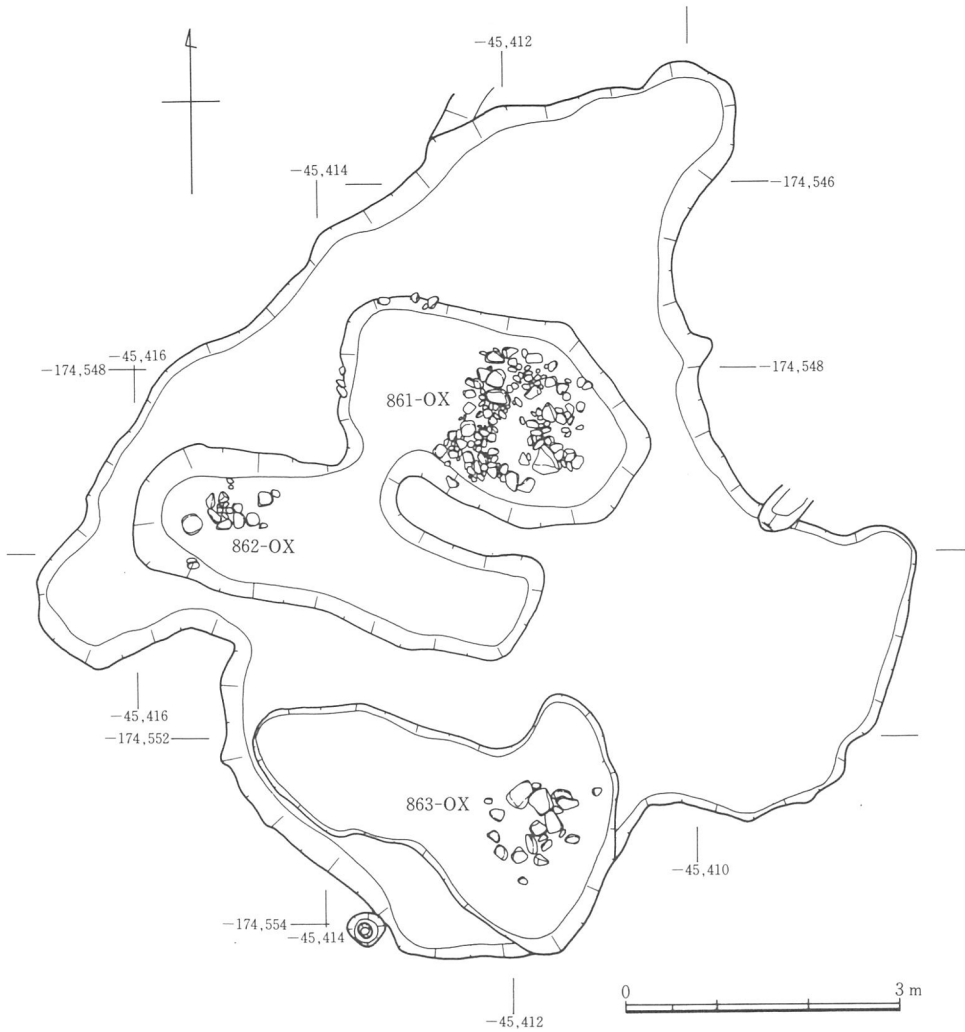
800-OX（第63図） H地区の南西部からI地区のほぼ大半を占める浅谷状遺構である。北東方向から南西方向に徐々に深くなり、南側調査区外に広がる。調査地域で最も深い部分で検出面から約60cmを測る。埋土は基本的に2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルトと2.5Y3/3オリーブ褐色砂質シルトの2層に分層でき、周辺からの流入や廃棄されたと考えられる土器・陶磁器等が多量に出土した。これらは、13世紀後葉から14世紀代のもので、遺物で見ると層位による年代差は認められない。なお、本遺構底面からは、土坑、集石遺構等の多くの遺構が検出された。

800-OX〔A〕（第63・64図）本地区中央部、800-OXの底面で検出した平面不定形の落込み状遺構である。本遺構は、後述する861～863-OXのために人為的に掘削されたものか、単に800-OX内の凹地であるかは不明。南北幅10m、東西幅9m、深さ0.4mを測る。埋土は、上から10Y R4/4褐色砂質シルト、10Y R3/4暗褐色砂質シルト、2.5Y3/1黒褐色砂質シルトの3層に分層でき、14世紀代の瓦器・土師器が出土する。

800-OX〔B〕（第63図）本地区の東側、800-OXの底面で検出した平面不定形の



第63図 I 地区全体図



第64図 800-OX (A) 実測図

落込み状遺構である。本遺構は、後述する867-OXのために人為的に掘削されたものか、単に800-OX内の凹地であるかは不明。長径5m、短径3m、深さ0.2mを測る。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、14世紀代の土器が多量に出土した。

802-OO (第63図) 中央部西寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径2.3m、短径1.2m、深さ0.3mを測り、西側は2段に掘り込まれている。埋土は2.5Y3/2黒褐色砂質シルトと10Y R3/4暗褐色砂質シルトの上、下2層に分層でき、8世紀末～9世紀初頭の土器が出土する。

810-OO (第63図) 本地区の中央部西寄り、800-OXの底面で検出した平面不定形

の土坑である。長径4.5m、短径2.1m、深さ0.2mを測り、底面船底状を呈する。埋土は5 Y R2/1黒褐色粘質シルトで、8世紀末～9世紀初頭の土器が出土する。

827-〇〇（第63図） 中央部西寄り、800-〇Xの底面で検出した平面略楕円形の土坑である。長径45cm、短径30cm、深さ25cmを測り、断面V字形を呈する。埋土は2.7 Y4/3オリブ褐色砂質シルトで、時期が異なる瓦器碗2点が出土した。

830-〇〇（第63図） 南側西寄りで検出した平面略楕円形の土坑である。長径1m、短径0.5m、深さ0.4mを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5 Y3/3暗オリブ褐色砂質シルトで、13世紀前葉の瓦器碗が1点出土した。

832-〇〇（第63図） 南側西寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径75cm、短径45cm、深さ40cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は礫混りの2.5 Y4/4 オリブ褐色砂質シルトで、瓦器・土師器片が出土する。

833-〇〇（第63図） 中央部南西寄り、800-〇Xの底面で検出した平面不定形の土坑である。長径2.3m、短径0.8m、深さ0.2mを測り、底面凹凸が著しい。埋土は2.5 Y4/3オリブ褐色砂質シルトで、瓦器碗・皿とタタキを施した瓦質甕の体部片が出土している。

836-〇〇（第63図） 南側東寄り、800-〇X底面で検出した平面不定形の土坑である。長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は2.5 Y3/3オリブ褐色砂質シルトで、13世紀前葉の土器が出土する。

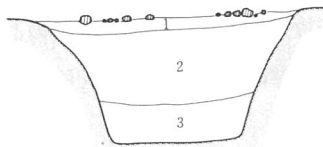
839-〇〇（第63図） 南西端で検出した平面略円形の土坑である。直径0.4m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5 Y3/3暗オリブ褐色砂質シルトで14世紀代の瓦器片が出土する。

844-〇〇（第63図） 南側西寄り、800-〇Xの底面で検出した平面不定形の土坑である。長径1.7m、短径0.6m、深さ0.1mを測り、底面船底状を呈する。埋土は5 Y R4/8赤褐色砂質シルトで、土師器小片が1点出土した。

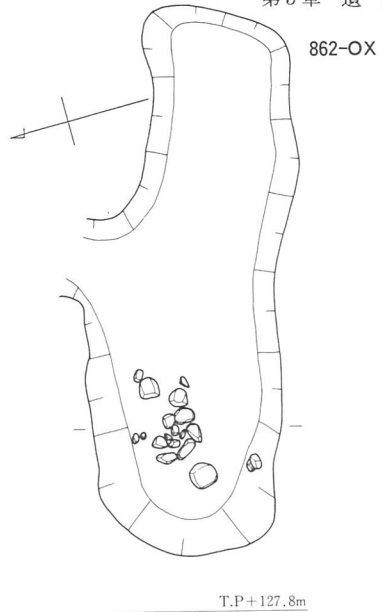
851-〇〇（第63図） 西側南寄り、800-〇Xの底面で検出した平面不定形の土坑である。長径0.7m、短径0.4m、深さ0.1mを測り底面鍋底状を呈する。埋土は10 Y R4/6褐色砂質シルトで、瓦器片が出土した。

859-〇〇（第63図） 西側中央部寄りで検出した平面楕円形の土坑である。長径1.1m、短径0.8m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10 Y R4/6褐色砂質シルトで、8世紀末の須恵器坏蓋片が1点出土した。

861-〇X（第63～65図） 中央部、800-〇X（A）底面で検出した集石遺構である。

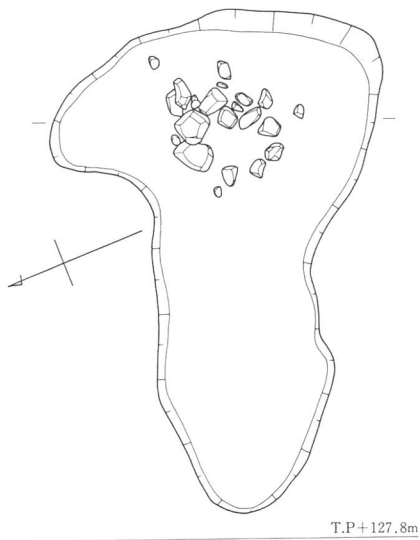


1. 2.5Y4/4(オリーブ褐)砂質シルト
2. 2.5Y3/3(暗オリーブ褐)礫混り砂質シルト
3. N3/0(暗灰)礫混り粗砂

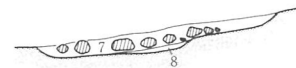
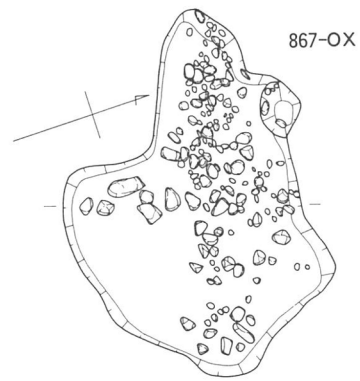


4. 2.5Y4/3(オリーブ褐)砂質シルト
5. 5YR3/2(暗赤褐)微砂

863-OX



6. 2.5Y5/6(黄褐)砂質シルト



7. 2.5Y5/6(黄褐)砂質シルト
8. 10YR3/2(黒褐)微砂



第65図 集石土坑実測図

長径3.4m、短径2.2m、深さ0.2mの平面略長方形の掘方内中央部から東側にかけて、拳大～人頭大の礫石が人為的にならべられた状態で出土した。これらの礫石は一辺1.2mのほぼ正方形の範囲内に置かれており、掘方の南西部は862-O Xとつながっている。正方形の集石下層部分には、直径1.05m、深さ0.9mの円形の土坑が、さらに掘られている。埋土は下層円形土坑も含めて3層に分層でき、多量の14世紀代中葉の土器・陶磁器と鉄釘が出土する。これらの遺物は大半が集石内及びその周辺からの出土であり、円形土坑下層部分からの出土は全くみられなかった。層位による遺物の時期差は認められない。

本遺構の性格としては、集石のしかた及び鉄釘等が出土していることから墓の可能性が考えられる。しかし、円形土坑部分は墓とするには、湧水が著しすぎるため、単に井戸と考えたほうが妥当かもしれない。また、墓とするには、あまりにも遺物の出土量が多く、しかも、完形品が見られないことから、井戸廃絶時に廃棄坑として機能したものと考たい。集石遺構も一見ならべられているものの、周辺の開墾時に出土した礫を廃棄したものと考えべきであろう。

862-O X (第63～65図) 中央部、800-O X (A) 底面で検出した土坑状の集石遺構である。土坑は平面略長方形を呈し、長辺4.4m、短辺1.2～1.4m、深さ0.25mを測り、底面船底状を呈する。埋土は上、下2層に分層でき、中央部北側で861-O Xとつながる。土坑西側には、拳大～人頭大の礫が集石し、14世紀中葉の瓦器・土師器が少量出土する。礫の集石は、周辺部の開墾時に出土した礫を廃棄したものと考えられる。

863-O X (第63～65図) 中央部南寄り、800-O X (A) 底面で検出した土坑状の集石遺構である。土坑は平面不定形を呈し、長径4.1m、短径1.3～2.6m、深さ0.15mを測り、底面船底状を呈する。埋土は1層で、東側には拳大～人頭大の礫が集石し、14世紀中葉の瓦器・土師器片が少量出土する。集石された礫は、周辺部の開墾時に出土した礫を廃棄したものと考えられる。

864-O O (第63図) 中央部北寄りで検出した平面楕円形の土坑である。長径0.8m、短径0.6m、深さ0.3mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/6褐色砂質シルトで、ほぼ完形の土師器小皿が1点出土した。

867-O X (第63・65図) 東側中央部寄り、800-O X (B) の北側底面で検出した土坑状の集石遺構である。土坑は平面不定形を呈し、長径3m、短径1.9m、深さ0.2mを測り、底面は北から南へ下降・傾斜する。埋土は上、下2層に分層でき、拳大～人頭大の礫が廃棄された状態で出土する。これらは周辺部の開墾時に出土した礫を廃棄したものと考え

えられ、14世紀代の土器が多量に含まれていた。

註

- (1) 川崎地質株式会社の分析結果によると火山灰ガラスの含有量は若干多いとされるが、火山灰起源層とは考えられないとする。(分析結果の一部については第5章に掲載しているので参照願いたい。)
- (2) 同上分析結果による。
- (3) (財)大阪府埋蔵文化財協会『福瀬遺跡・仏並遺跡一試掘調査事業報告書一』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査事業報告書第2冊 昭和61年

第4章 遺物

出土遺物には、土器・陶磁器、瓦、木製品、石製品、金属製品、自然遺物等がある。そのうち、土器・陶磁器については、多量に出土していることから、各地区ごとに記述し、その他の遺物については、出土点数が少ないので一括で説明する。

第1節 土器・陶磁器

出土遺物の大半は、土器・陶磁器である。これらは調査区のほぼ全域から出土したものであるが、特にF・H・I地区から出土したものが多く、土器・陶磁器全体の約7割を占める。その大部分は、いわゆる中世の時期に属するもので、他に少量の縄文～古墳時代、奈良～平安時代及び近世以降の土器・陶磁器がある。以下、各地区ごとに記述する。なお、ここでは、いわゆる中近世のものに多く呼称される土師質土器・須恵質土器・瓦質土器もそれぞれ一様に土師器・須恵器・瓦器として取り扱う。

1. A地区（第66図）

本地区出土の土器・陶磁器は極めて少ない。

・100-00出土土器（2）

土師器・陶磁器である。2は比較的硬質の土師器小皿である。口縁部を強くヨコナデしたもので、他の遺物より16世紀代のものであろう。

・包含層出土土器（1）

瓦器・土師器・陶磁器が出土する。1は無文の青磁碗である。口縁部をわずかに外反させるもので15世紀代のものである。

2. B地区（第66～68図）

・01-01出土土器（3・4）

瓦器・土師器・陶磁器が出土する。瓦器は羽釜（3）である。口縁部は内傾して立ち上がり、外面は階段状を呈す。炭素の吸着はうすく、内面には認められない。内面には細かいハケ目調整を施す。土師器は甕（4）である。口縁部は玉縁状を呈し、わずかに外反し

てたちあがる。内外面ヨコナデ調整を施し、体部外面はタタキを施すものである。これら出土土器は16世紀前葉の所産である。

・02-01 出土土器 (5)

瓦器と土師器が出土する。瓦器は甕で、体部にタタキを施したものである。5は土師器の甕であるが、非常に硬質である。口縁部は短く外反し、内外面ヨコナデ調整を施す。体部は内面ハケ目、外面タタキを施す。16世紀前葉のものであろう。

・04-01 出土土器 (6～8)

瓦器・土師器・陶磁器が出土する。これらは概ね16世紀代のものである。6は青磁碗の高台部分である。H地区6085-0S出土の青磁碗(822)と同一個体である。7は信楽と考えられるすり鉢で、見込み部分に斜方向のすり目を施し、さらに周辺部に円形のすり目をもつ。8は土師器の火舎である。口縁部は強いヨコナデ、体部外面の一部にスス付着。

・05-01 出土土器 (9～11)

土師器・陶磁器がある。土師器は三足の火舎(9・10)で調整技法は04-01出土の8と同じである。16世紀代のものであろう。11は唐津系の二彩盤で17世紀代のものと考えられる。

・水田出土土器 (12～15)

第2遺構面の水田面から出土したものである。瓦器・土師器が出土する。掲載したものはすべて推定水田⑫-0Zから出土したものである。瓦器(12)は内面に間隔の荒い暗文が認められ、形態の特徴から14世紀代と考えられる。13～15は土師器の小皿である。口縁部が外反するもの(13)と内湾ぎみに立ち上がるもの(14・15)がある。13は器肉が極めて薄く、丁寧なつくりであり、両者とも口縁部はヨコナデ調整で仕上げる。14世紀代と考えられるが、13は若干古い可能性もある。

・35-00 出土土器 (図版56-1423)

縄文土器である。全体に摩滅が著しいが、晩期に属するものと考えられる。

・36-00 出土土器 (16 図版56-1426～1429・1431・1432)

縄文土器が出土する。全体に摩滅が著しい。16は外反する口縁端部に突起を有する。縄文時代晩期の滋賀里Ⅲ式に属するものであろう。

・包含層出土土器 (17～112)

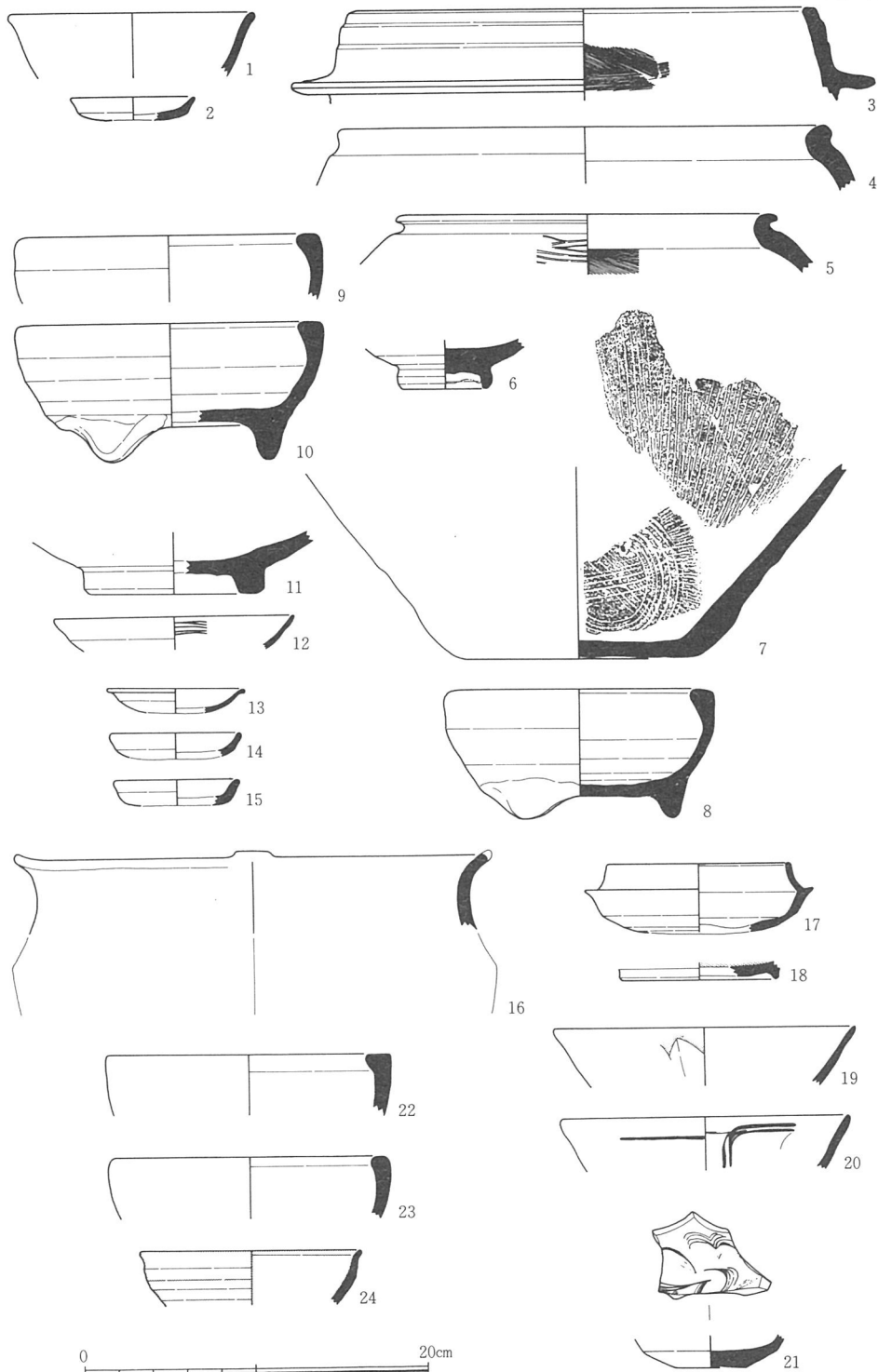
須恵器・黒色土器・土師器・陶磁器が出土する。須恵器には坏・鉢・甕がある。坏(17)は、口縁部が内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。受部はほぼ水平にのびる。口縁

部の内外面は回転ナデ、体部外面は回転ヘラケズリを施す。6世紀前葉のものである。鉢（95～103）は、片口と考えられるもので、大型と小型がある。口縁部を上下に拡張させ、底部はヘラ切りである。98・103の口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。これらはすべて東播系のもので、13～14世紀代のものである。甕（109）は、口縁部を外反させ、端部がわずかに立ち上がるものである。体部には格子状のタタキが施されている。焼成は悪く、一見土師器状を呈する。

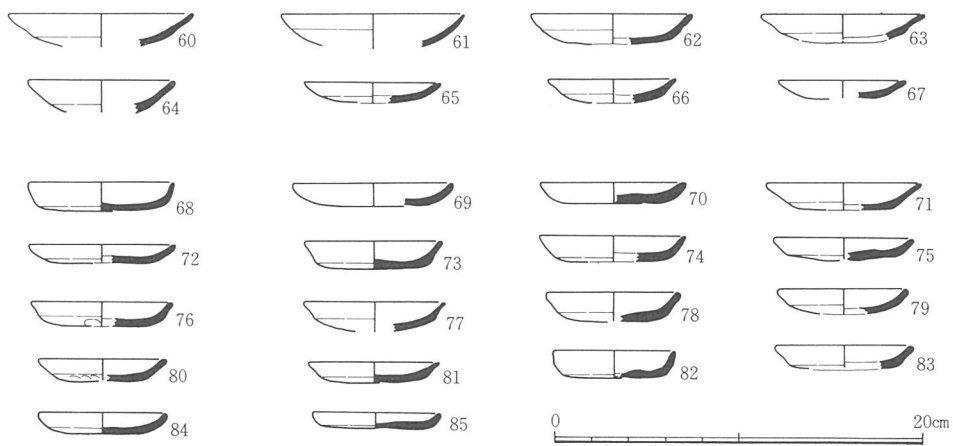
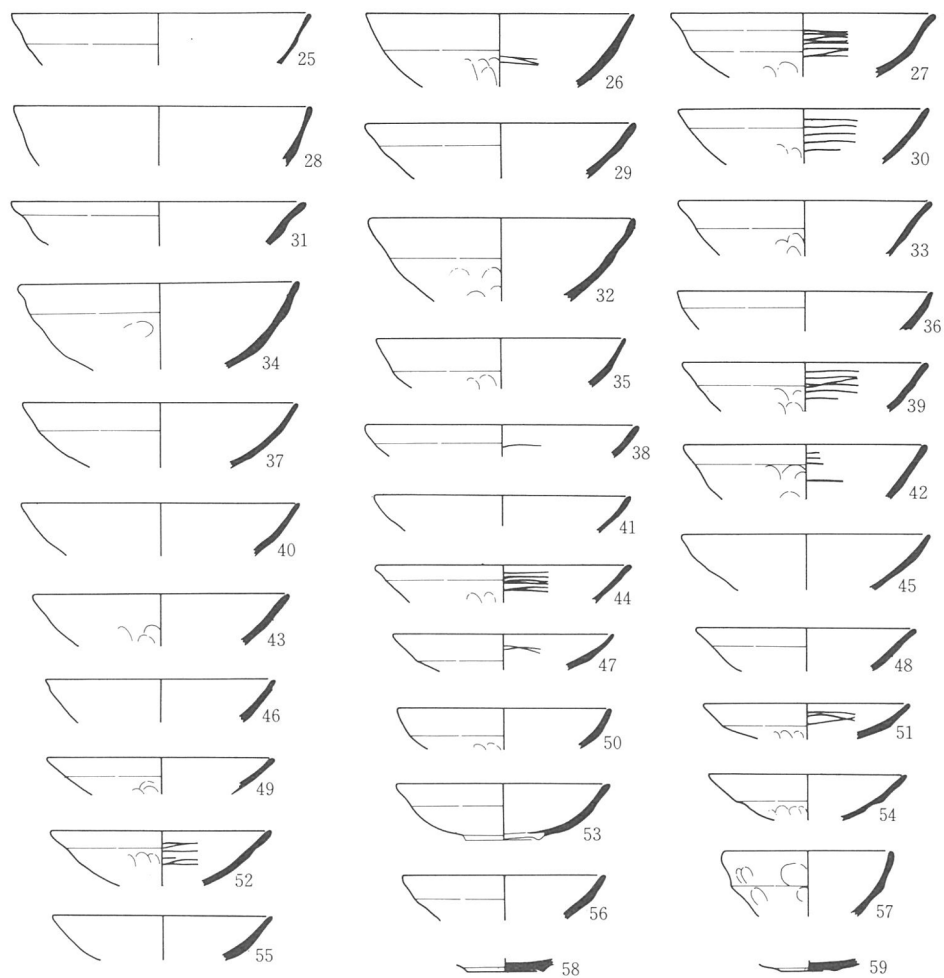
黒色土器（18）は、椀であるが高台部分のみの破片である。内面のみに炭素を吸着させるA類で、10～11世紀代のものである。

瓦器には、椀・皿・鉢・甕・羽釜がある。椀（25～59）は、すべて小破片である。有高台と無高台に大別できる。体部外面は摩耗が著しいため明確ではないが、大半は指押さえで、磨き調整のものは少ない。体部内面は、間隔を荒くヘラ磨き調整を施すものとナデ調整のみのものがある。口縁部外面のナデ調整は幅広に行なう。約半数の瓦器椀は、炭素の吸着が薄く、特に25・34・36・37・41・45・53・56・57は生焼質の土師器状を呈する。49・55には重ね焼きの痕跡が残る。57は口径に比して器高が極めて深く、在地系のものとは考え難い。概ね13～14世紀代のものである。皿（60～67）は口径9～10cm、器高1.5～2cmのもの（60～63）と口径7cm、器高1～2cmのもの（64～67）に大別できる。口縁部のナデ調整は、比較的強いいため外反するものと、軽く施すため直線的にのびるタイプがある。見込みの暗文は認められない。13～14世紀代である。鉢（86・88～93）は片口と考えられるもので、直線的に外上方にのびるもの（86・88～90）と内湾ぎみにのびるもの（91～93）がある。口縁端部は、強いナデによって上下に拡張するものが多いが、91は面取りのみで上下の拡張はみられない。93の口縁端部は特に内湾して立ち上がり、内面は凹線状を呈する。体部外面はヘラケズリ調整を施し、内面のすり目は比較的荒く、89・90にはハケ目調整が施されている。86・93は炭素の吸着がほとんどみられず、86は赤褐色を呈した硬質の土師器質、93は須恵器質を呈する。概ね15世紀代であろう。甕（108）は、口縁端部を丸くおさめて、短く立ち上がるものである。外面には荒いタタキ、内面には荒いハケ目調整を施す。15世紀代である。羽釜（111）は、口縁部が内湾して立ち上がり、外面に段をもつ。鏝は水平にのびるが比較的短い。内外面ともヨコナデ調整を施す。15世紀代である。

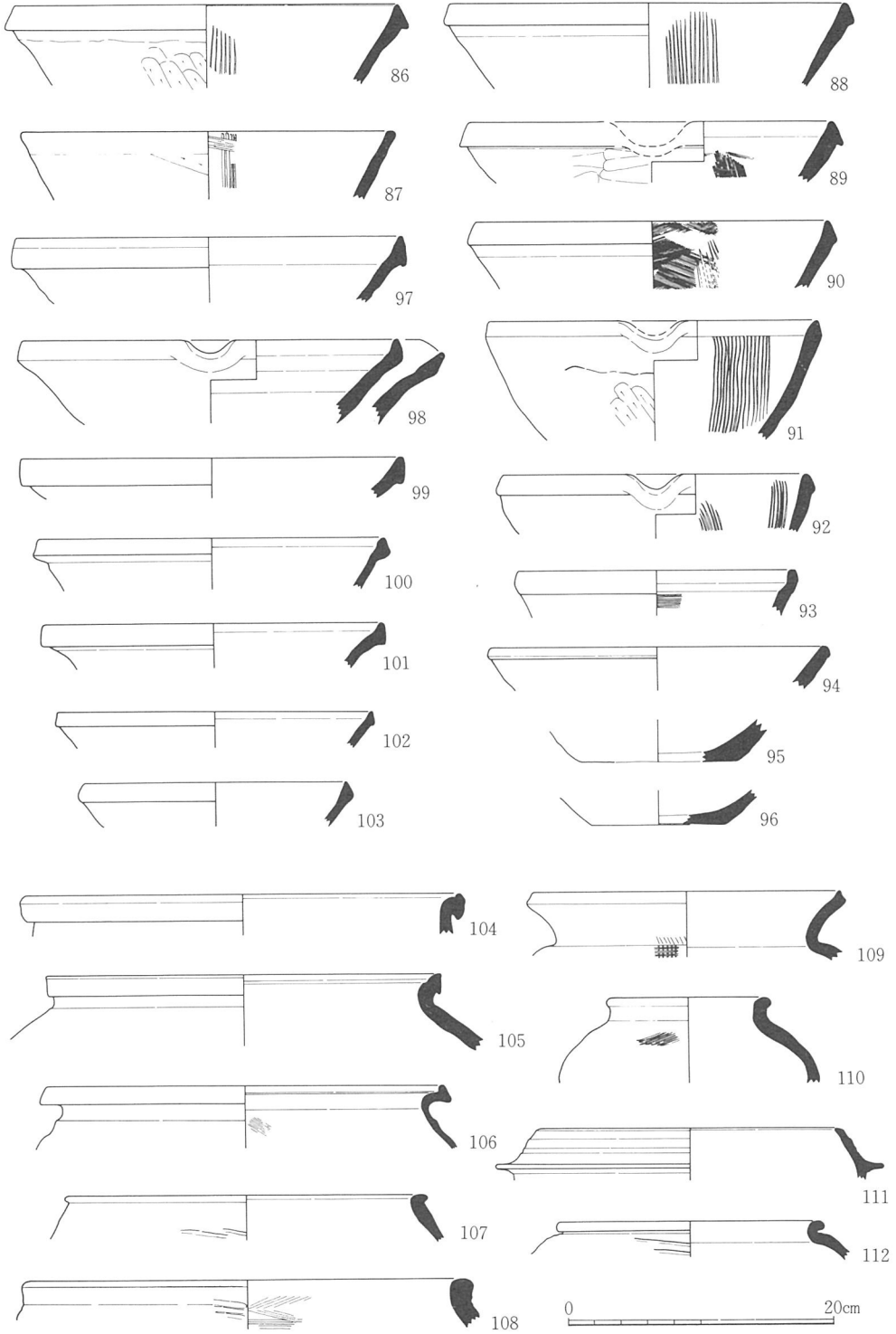
土師器には、小皿・鉢・甕・火舎がある。小皿（68～85）は、口径7～9cm、器高0.7～1.5cm前後を測り、口縁部のナデ調整によって外反するものと内湾するものがある。底部は未調整または指押え調整する。小皿のみでは時期を決めがたいが軟質のものと比較的



第66图 A·B地区出土土器(1)



第67图 B地区出土土器(2)



第68图 B地区出土土器(3)

硬質（68・73・82）のものがあり、前者は概ね13～14世紀代、後者は15～16世紀代と考えられる。また、70は炭素の吸着が認められないため、ここでは土師器としているが、瓦器の可能性も残る。鉢（87）はすり鉢で、直線的に外上方にひらき、口縁端部を丸くおさめる。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ調整を施し、すり目は荒く、口縁部上面まで施されている。口縁部内面にススが付着する。16世紀代のものである。甕（106・107・112）は、口縁部を「く」の字状に屈曲させ端部を内側に折り曲げるもの（106）と無頸に近い状態で内湾し、口縁端部を玉縁状にしたもの（107・112）に大別できる。106は体部内面にハケ目を施す。14世紀後葉の紀伊産の甕である。107・112は16世紀代のもので、体部外面にタタキを施す。火舎（22・23）は内湾する口縁部のみであるが、三足を有するものと考えられる。内外面ヨコナデ調整を施す。16世紀代である。

陶器には、甕・鉢・壺がある。甕（104・105）は常滑系である。口縁部を上下に拡張させ、その形態から14世紀代のものである。鉢（98）は丹波系のすり鉢と考えられ、14世紀前葉～中葉のものであろう。壺（110）は口縁部を玉縁状にした短頸壺で備前系と考えられる。肩部にカキ目が施されている。14世紀代である。磁器には青磁碗・青磁皿・天目茶碗がある。青磁碗（19・20）は、外面に蓮弁を施すもの（19）と内面に飛雲文を施すもの（20）がある。青磁皿（21）は見込み部分に櫛描きによる花文を有する。青磁は共に龍泉窯系で13世紀代のものである。天目茶碗（24）は鉄釉である。16世紀の美濃・瀬戸系である。

3. C 地区（第69～71図）

遺構に伴うもので図示できるものは極めて少ない。

・245-〇〇出土土器（139）

瓦器・土師器がある。図示できたものは瓦器皿（139）1点のみである。体部内面に荒い暗文を施す。13世紀代のものであろう。

・水田出土土器（149・153・166）

ここでいう水田出土土器とは、上層遺構面検出の小溝群出土土器を指す。瓦器・土師器・陶磁器が出土する。149・153は土師器小皿である。口縁部はヨコナデ調整を施すが、特に153はそれが強いいため外反する。さらに全体に丁寧な作りで、器高は深く、外面白色を呈する。前者は㊸-〇Z、後者は㊸-〇Zより出土したものである。166は白磁の小皿である。口縁部が口禿になったもので灰白色の荒い胎土である。口縁部内面にススが付着していることから灯明皿として使用された可能性が高い。13世紀中葉～14世紀中葉である。

・253-O S 出土土器 (図版56-1424・1425・1430)

縄文土器が出土する。全体的に摩耗が著しいが、晩期に属するものと考えられる。

・包含層出土土器 (113~138・140~148・150~165・167・168・185~189・207~219)

弥生土器・瓦器・土師器・黒色土器・須恵器・陶磁器が出土する。弥生土器(115)は甕の底部で、摩耗が著しい。畿内第5様式に属するものである。

瓦器には椀・皿・鉢・甕がある。椀(117~137)は、すべて小破片である。有高台と無高台に大別できる。体部外面調整は指押えで、磨き調整のものは認められない。体部内面は、間隔を荒くへら磨き調整を施すものとナデ調整のみのものがある。口縁部外面のナデ調整は比較的幅広である。高台を有するものは大半が断面三角形を呈するが、118のように断面四角形を呈するものもある。124・127の口縁部には重ね焼の痕跡が残る。概ね13世紀~14世紀代のものである。皿(138・140~142)は、内面に磨きを施すもの(138)と施されないもの(140~142)がある。口縁部はヨコナデにより外反するが、140のように内湾ぎみのものもある。椀同様13~14世紀代のものである。鉢(211~215)は破片であるが、片口と考えられるものである。体部は直線的に外上方にひらくが、内湾ぎみの(211)ものもある。口縁部外面は上下に拡張し稜をもつが、213は稜をもたず丸みを呈する。口縁部はヨコナデ、体部外面はへらケズリ調整を行なう。214の内面には細かいハケ目調整を施す。すり目は比較的荒く、211は口縁端部近くまで認められる。211・215は炭素の吸着がほとんどみられず、土師器状を呈する。14世紀末~15世紀代のものであろう。甕(217)は、口縁部を短く外反させるもので、体部外面に荒いたタキを施す。口縁部はヨコナデ調整を行なう。15世紀前葉のものである。

土師器には皿・鉢・羽釜がある。皿(143~148・150~152・154・155)は、口径5.5cm前後の極小皿(151・152・154)や口径12.7cmの中皿(155)も見られる。口縁部ヨコナデ、底部外面指押え調整を行なう。極小皿は硬質で赤褐色を呈し、中皿は明白色を呈する。概ね小皿は13~14世紀代、極小皿・中皿は16世紀代のものと考えられる。鉢(185・186・216)は破片で明確ではないが、片口を有するものであろう。体部は内湾ぎみに外上方にひらき、口縁部は肥厚して端部を尖りぎみに丸く終わらせる。185の口縁部外面には稜が残る。口縁部はヨコナデ調整を施すが、186はそれが強い内外面に幅広の浅い凹線状をめぐらした形状を呈する。体部内面はハケ目調整をした後、すり目を施す(186)。185・186は比較的硬質で、その形態から16世紀前葉であろう。216はそれよりやや下って16世紀後葉頃のものと考えられる。羽釜(156・157・219)は口縁部を内湾させ、端部を外方に折り

返したものであるが、157・219は丸味をもつ。鏝は鋭く外上方にのびるもの（156）と水平にのびるもの（157）がある。全体的に摩耗が著しいため明瞭ではないが、口縁部はヨコナデ、157の体部外面にはヘラケズリ痕が残る。形態的特徴から156が13世紀代、157・219が14世紀代と考えられる。

黒色土器（116）は、碗の高台部分である。A類に属するものであるが、摩滅のため内面の炭素はすでに見られず土師器状を呈する。10～11世紀前葉のものである。

須恵器には坏・鉢・甕がある。坏（113・114）は5世紀後葉～6世紀前葉の古墳時代のものである。口縁部は内傾して立ち上がり、端部を尖りぎみに終わらず（113）。受部は鋭く外上方にのびる。114は全体的に器肉が薄い。口縁部及び体部内面は回転ナデ、体部外面は回転ヘラケズリを施す。鉢（187～189・207～210）は、すべて東播系の片口と考えられるすり鉢で、大型と小型に大別できる。口縁部は端部が上方に立ち上がり、断面三角形を呈したもので、その形状から13世紀代のもと考えられる。口縁部外面すべてに重ね焼の痕跡が残る。甕（218）は、口縁部を肥厚させて、端部を外方に折り返したものである。体部外面に荒いタタキを施す。瓦器の可能性も考えられるが、硬質で白灰色を呈することから、ここでは須恵器とした。15世紀代のものである。

陶磁器には青磁碗・白磁碗・白磁皿・天目茶碗がある。青磁碗（158～163）はすべて龍泉窯系のものである。158は体部は内湾し、外面に雷文をもつ。159は無文で、灰緑色を呈する。口縁部は外反し、体部内面下位に沈線を施す。160の体部は内湾ぎみに立ち上がり、外面に蓮弁をもつ。161・163は口縁部がわずかに外反するもので、体部外面に鎬蓮弁を施す。163は黄緑色を呈する。162は外面に蓮弁を削り出し、さらにその上から櫛目を縦に入れる。内面には蕉の葉文を施す。これらの青磁碗は、161・162が13世紀代、163が13世紀末～14世紀前葉、160が14世紀代、158・159が14世紀末～15世紀前葉のものである。白磁碗（165）は、口縁部が玉縁状を呈したもので、12世紀代の所産である。白磁皿（164）は底部のみである。見込みに草花文様を施したもので13世紀代と考えられる。天目茶碗（167・168）は、瀬戸・美濃系の鉄釉を施したものである。16～17世紀代のものである。

4. D 地区（第70・71図）

C地区同様遺構に伴うものは極めて少ない。

・311-〇〇出土土器(169)

本遺構は、近世以降のものであるが、混入と考えられる瓦器碗が1点出土する（169）。

内面に間隔の荒いヘラ磨き調整を施し、底部の形状は不明であるが、14世紀代のものと考えられる。

・包含層出土土器(190～193・225～228)

須恵器・土師器・瓦器が出土している。出土量は他の地区に比して少ない。須恵器には坏と鉢がある。坏(190)は古墳時代のもので、口縁部は内傾から外反して立ち上がり、端部は凹線状をなす。受部は比較的短く外反し、端部を尖らす。器肉は薄い。口縁部及び体部内面回転ナデ、体部外面回転ヘラケズリ調整を施す。5世紀末～6世紀初頭のものである。鉢(225～227)はすべて東播系の片口すり鉢である。口縁部は、断面三角形に近いもの(225)、わずかに上下に拡張するもの(227)、上下に拡張し端部を丸くおさめるもの(226)に大別でき、その形状からそれぞれ13世紀前葉、13世紀後葉、14世紀前葉と時期差が異なる。口縁部外面に重ね焼の痕跡が残る。土師器は小皿(193)である。全体的に白色を呈し、内面にスガが付着する。口縁部ヨコナデ、底部外面未調整である。瓦器には椀・火鉢がある。椀(191)は炭素の付着が全く認められず、土師器状を呈している。形態から14世紀代のものであろう。192は小椀で有高台の可能性がある。時期は明確にしづらいが、13世紀代のものであろうか。火鉢(228)は直口する口縁部外面に2条の断面三角形の突帯をめぐらし、突帯と突帯の間にスタンプ文を施す。15世紀前葉のものである。

5. E 地区(第70・71図)

・435-〇〇出土土器(171～184)

黒色土器・土師器・須恵器が出土する。黒色土器は椀・鉢がある。椀(172～175)は、内面と口縁部外面に炭素が吸着するA類(172～174)と内外面黒色化するB類(175)がある。A類の椀の口縁端部には軽く沈線を施す。口縁部のナデ調整によって、内面が凹むもの(174)もある。口縁部の磨き調整は、間隔を荒く施すもの(172)があり、外面には削り調整を行なう。見込みの磨き調整は、間隔を荒くジグザグに施す。B類は外面は削り調整した後、荒く磨く。鉢(183)は内面と口縁部の外面中位まで黒色化するA類で、外面は削り調整の後磨き調整し、内面は間隔を荒く、軽く磨き調整する。口縁端部には軽く1条の沈線を施す。高台をもつ。土師器は皿・羽釜・甕がある。皿は高台をもつもの(176)ともたないもの(177～182)がある。技法は底部指押さえ、口縁部はナデ調整をする。口縁部のナデ調整の仕方と底部の指押さえの強弱によって、器高、口縁部の形態に違いができる。口縁部のナデ調整を軽く幅狭く施すため、底部と口縁部の境界が不明確で平坦な

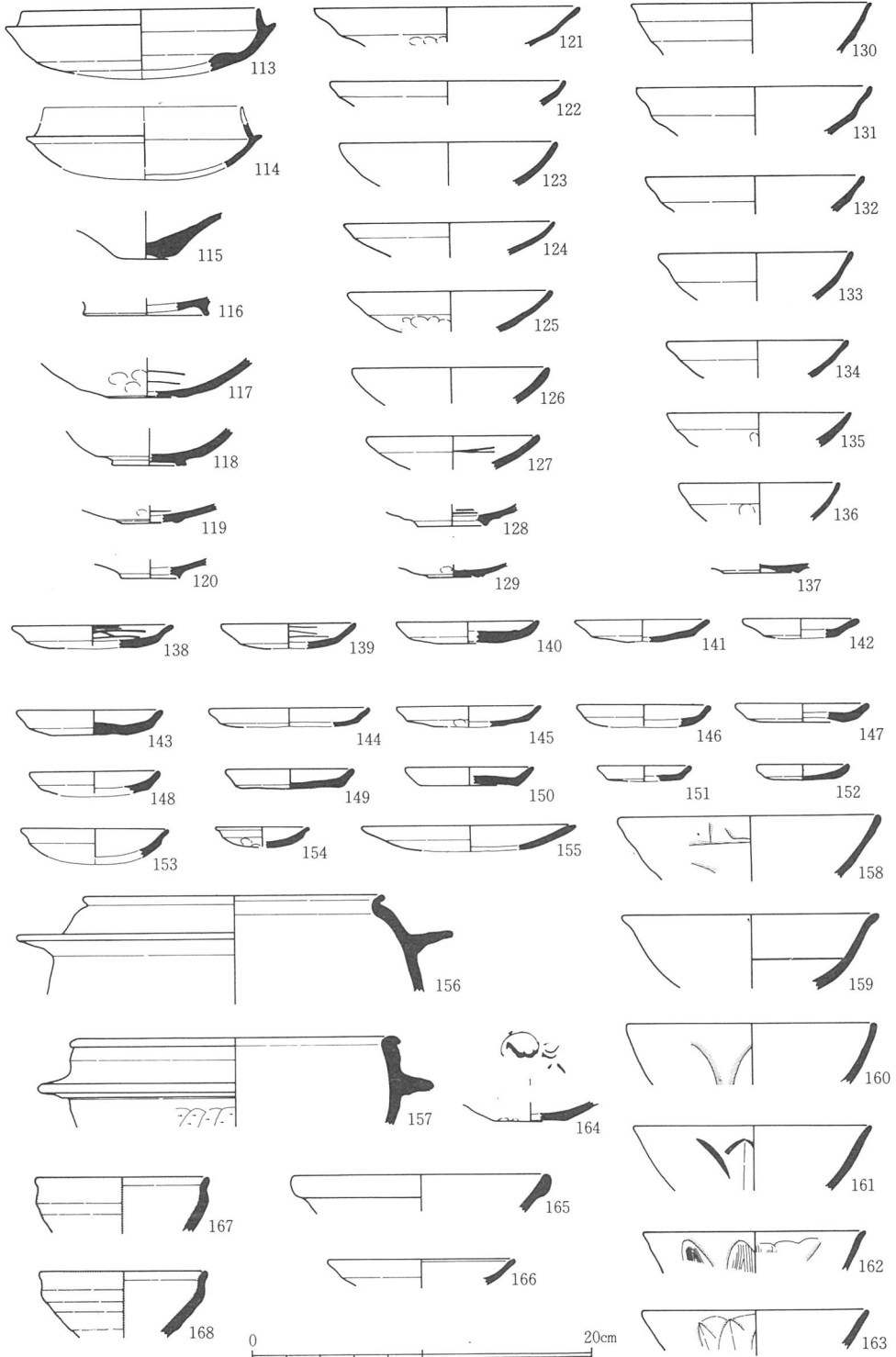
器高の低いもの（176～178）、口縁部のナデ調整をきつく施すため、底部と口縁部の境界は明瞭で屈曲するもの（179～182）がある。口縁端部には軽い沈線を施すもの（179）がある。181は瓦器出現以降の土師器の皿に形態がよく似る。砂粒が多く見られる。羽釜（171）は体部から口縁部にかけては直立し、口縁端部はわずかに内湾する。体部上半には鐙を水平に付ける。砂粒の混入が多い。甕（184）は球形の体部に「く」の字状に短く外反する口縁部をもつ。須恵器は甕の小破片である。時期については黒色土器のA・B類が共伴し、土師器の形態も瓦器出現以降のものによく似ており、また羽釜が出現していること等を根拠として、11世紀前葉から中葉にかけての時期と考えられる。

・水田出土土器（170）

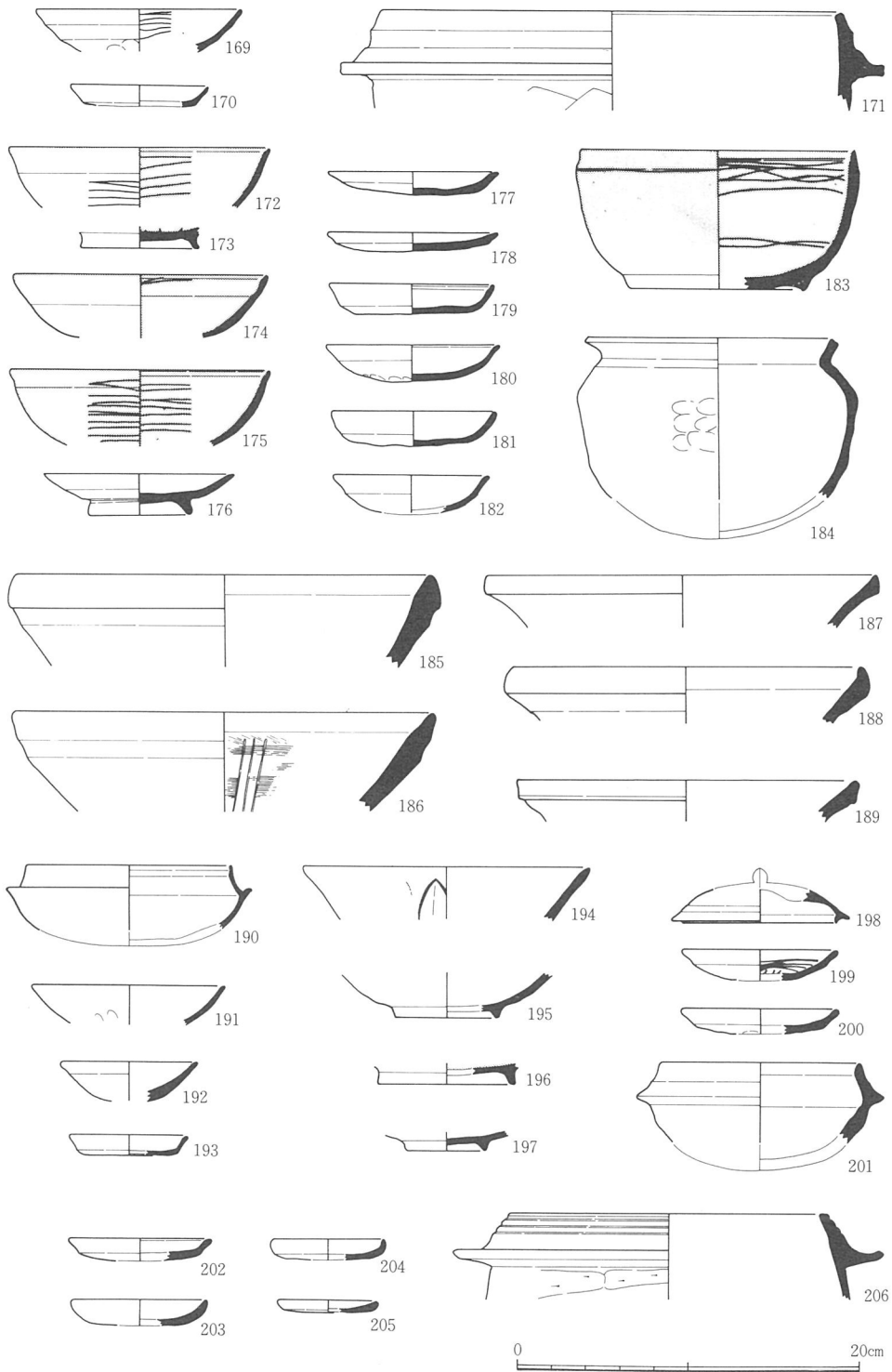
瓦器・土師器が出土する。すべて小片である。170は土師器小皿で、㊤-O Zから出土したものである。口縁部をナデ調整、底部は指押さえを行う。14世紀代である。

・包含層出土土器（194～206・220～224）

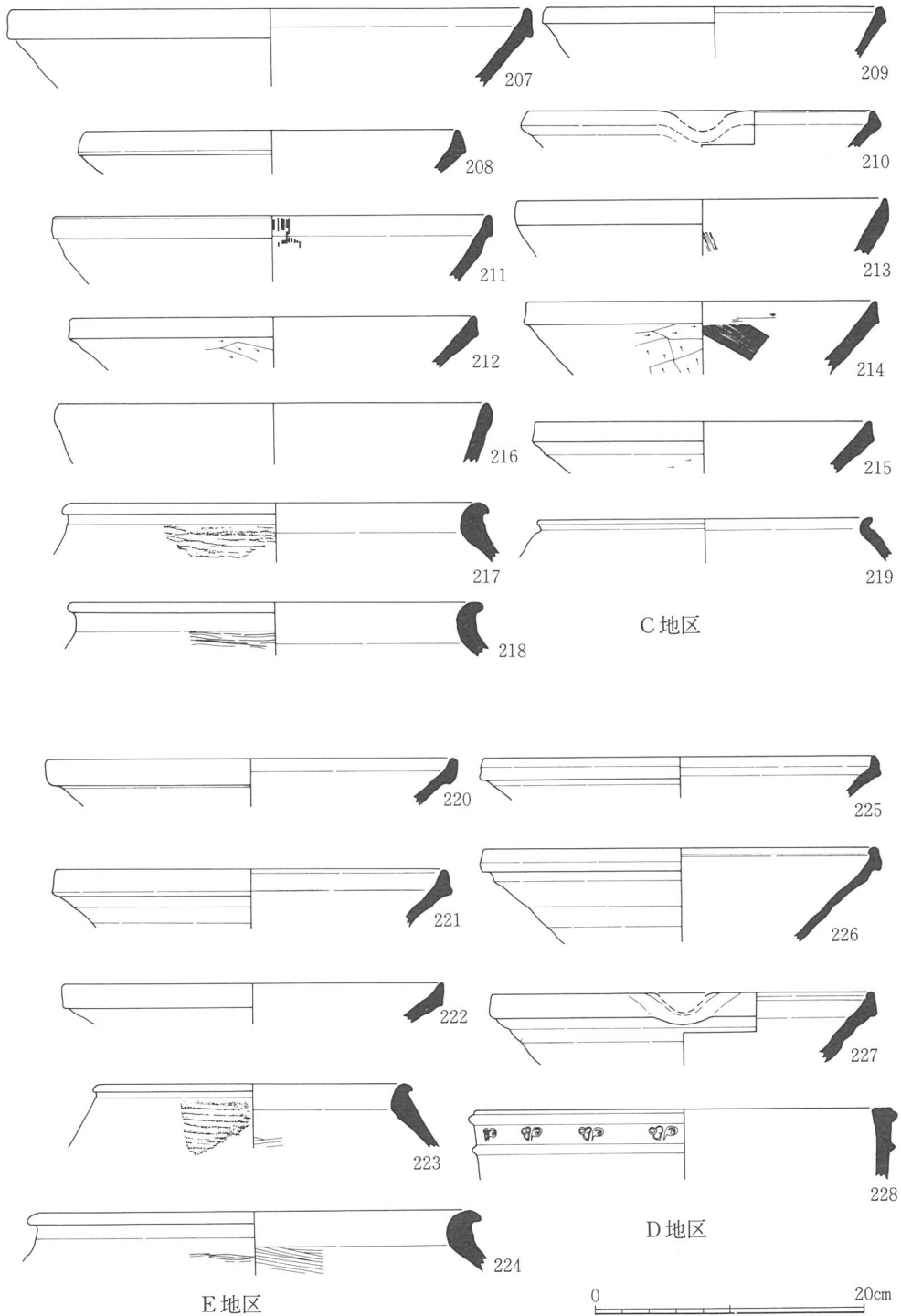
瓦器・土師器・黒色土器・須恵器・陶磁器が出土する。瓦器には椀・皿・羽釜・甕・鉢がある。椀（195・197）は高台部分で、断面三角形を呈する。12～13世紀代のものである。皿（199・200）は内面に荒いヘラミガキ調整を施すもの（199）とナデ調整のみのもの（200）がある。前者は13世紀代、後者は14世紀代であろう。羽釜（206）は口縁部が内傾し、外面に段をもつ。体部外面ヘラケズリ、他はナデ調整を施す。15世紀後葉のものである。甕（223・224）は口縁部が肥厚し、端部を外側に折り返す。体部外面タタキ、内面ハケ目調整を施す。15世紀代のものである。鉢（222）は破片であるが、片口のすり鉢である。2次焼成のため炭素の吸着は全くみられず、土師器状を呈する。15世紀代である。土師器には皿・羽釜がある。皿（202～205）は小皿である。口縁部が内湾するもの（202）と外反するもの（203～205）があり、205は特に小さい。羽釜（201）は、いわゆるミニチュアで香炉と考えられる。口縁部は内傾して立ち上がり、鐙は短く全体的に鈍い造作である。土師器として記述しているが、2次焼成によって炭素の吸着がとんでいる可能性もある。16世紀代のものと考えられる。黒色土器（196）は椀の高台部分である。内面に炭素を吸着させたA類で、10～11世紀代のものである。須恵器には坏蓋・鉢がある。坏蓋（198）は破片であるが、かえりを有し、宝珠つまみをもつものであろう。焼成はあまりよくなく赤灰色を呈する。形態から7世紀前葉である。鉢（220・222）は東播系のすり鉢である。口縁部は断面三角形を呈し、外面に重ね焼きの痕跡を残す。220は内面に自然釉が付着する。13世紀中葉のものである。陶磁器には青磁椀（194）がある。体部は外上方に直線的にひ



第69図 C地区出土土器(1)



第70图 C. D. E地区出土土器(2)



第71图 C. D. E地区出土土器(3)

らき、口縁端部を尖りぎみに終わらす。体部外面には鎬蓮弁を施す。龍泉窯系で13世紀代のものである。

6. F 地区 (第72～86図)

本地区からは多量の土器・陶磁器が出土した。全出土量の約4分の1は本地区から出土したもので、大半は中・近世の時期に属する。

・522-OY出土土器 (531～537・572～586・646・654)

陶磁器・土師器・瓦器が出土する。陶磁器には椀・壺がある。椀(532～536)は龍泉窯系青磁・唐津系・波佐見系・瀬戸美濃系のものが混在する。龍泉窯系青磁(535・536)は、体部外面に簡略化した波状の雷文帯を施すもの(535)と細線の線描蓮弁文を持つもの(536)があり、特に前者のものは小型である。16世紀前葉である。唐津系(532)は平茶椀で、口縁部が外反した朝顔形を呈する。見込みには胎土目が認められる。17世紀代である。波佐見系(533)は染付である。2次焼成を受けており、内面見込みに重ね焼きの痕跡が残る。17世紀代である。瀬戸・美濃系(534)は、鉄釉を施した天目茶椀である。16世紀代であろう。壺(531)は唐津系である。全体的に厚手に成形され、胴張りの力強い曲線を呈する。高台内の削込みは浅い。釉は白濁色を呈し、高台部分までながれている。17世紀前葉である。

土師器には鍋・鉢・甕・蓋・火舎がある。鍋(572・573)は口縁部を屈曲させて断面三角形を呈する。極めて丁寧な作りで、体部外面へラ磨き、口縁部及び体部内面ナデ調整を施す。堺環濠都市遺跡から稀に出土するのみで、類似品は少ない。16世紀代のものであろう。鉢(575・576・579・580)はすべて片口と考えられるものである。体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。口縁部はナデ、体部外面はヘラケズリを施すものが多いが、ハケ目調整のもの(575)もみられる。575・579・580には巻上げ痕が残る、579の口縁部内面にはススが付着する。概ね16世紀代である。甕(654)は大型品である。口縁部は徐々に厚くなり、端部は平坦面をもつ。体部外面は荒いタタキの後ナデ調整、内面は荒いハケ目調整を施す。16世紀後葉～17世紀前葉のものである。蓋(578)は天井部が水平のものである。口縁部及び内面は強いナデ調整を行なう。16世紀代である。火舎(577)は高台部外面接合部には刺突状の円孔を穿つ。全体的に丁寧な作りで、極めて硬質である。17世紀前葉頃のものと考えられる。

瓦器には皿・鉢・甕・火舎がある。皿(537)は小皿で、内面に荒いハケ目を施したも

のである。堺環濠都市遺跡の下面部分でよく出土するもので、15世紀後葉のものである。鉢（581～584）は破片であるが、片口のすり鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に外方にひらき、端部は断面三角形を呈する。体部外面はヘラケズリ調整を施すが、ハケ目調整を行なうもの（583）もある。すり目は細かいもの（583・584）と荒いもの（582）があり、荒いものはすり目を施す前にハケ目調整を行なう。581は2次焼成を受けているため炭素の吸着はみられない。甕（585・586）は口縁部が短かく外反するものである。体部外面には荒いタタキ、口縁部はヨコナデ、体部内面はナデ調整のもの（585）とハケ目調整のもの（586）がある。585は炭素の吸着がほとんどみられず、須恵質を呈する。15世紀代である。火舎（574）は口縁部がわずかに外反する。内外面ナデ調整である。15世紀代のもと考えられる。

・501－O S 出土土器(488・624・625)

瓦器・土師器・陶磁器が出土する。瓦器（624）は羽釜である。口縁部は内傾し、外面は階段状を呈する。鏝は下方にのびる。全体にナデ調整を施すが、特に内面はそれが強いいため稜線状を呈する。土師器（625）は破片であるが片口のすり鉢である。体部外面に巻き上げ痕が残る。陶磁器（488）は美濃・瀬戸系の天目茶碗である。鉄釉を施す。これらは概ね16世紀代である。

・506－O S 出土土器(490)

陶磁器・土師器が出土する。490は伊万里系の浅い白磁碗である。18世紀代であろう。

・533－O S (500～514)

瓦器・土師器・陶器が出土する。瓦器（500～503）はすべて無高台の碗である。内面に間隔の荒いヘラ磨き調整を施し、外面指押えを行なう。器高が比較的深いものと浅いものがある。14世紀後葉である。土師器（504～514）はすべて小皿である。口径7～8.5cm、器高1.2～1.6cmを測る。口縁部はナデ調整のため外反し、内湾するものは見られない。瓦器碗同様14世紀後葉のものであろう。

・502－O O 出土土器(517・518・631・632)

陶磁器・土師器が出土する。図示できたものは陶磁器のみである。517は波佐見系の碗である。518・631・632は堺すり鉢である。口縁端部は2段に屈曲し、外面に2条の凹線をめぐらす。すり目は荒い。518は小型のもので、631・632は同一個体の可能性がある。これらの陶磁器類は18世紀代のものである。

・503－O O 出土土器(482～486)

瓦器碗のみが出土する。これらはすべて無高台のものである。内面に間隔の荒いヘラ磨き調整を施す。見込みの暗文は認められない。口縁部はヨコナデ、体部外面指押え調整を行なう。14世紀後葉である。

・519-00出土土器 (495)

土師器が出土する。495は小皿である。口縁部ヨコナデ調整を施す。14世紀代と考えられる。

・515-01出土土器 (487)

土師器・陶磁器が出土する。陶磁器(487)は瀬戸、美濃系の天目茶碗である。鉄釉のもので2次焼成を受ける。16世紀代である。

・524-0K出土土器 (491~493・622)

土師器・陶磁器と混入と考えられる瓦器が出土する。土師器は皿と炮烙がある。493は小皿である。明白色を呈し、内外面にススが付着する。ナデ調整である。622は炮烙である。ナデ調整を施すもので、17世紀代のものである。陶磁器(491)は信楽系と考えられる皿である。内面のみに釉を施し、見込み部分に重ね焼きに使用するトチンの痕跡が残る。土師器・陶磁器は18世紀代のものである。瓦器(492)は碗で、内面に間隔の荒いヘラ磨き調整を施す。14世紀後葉のものである。

・527-0X出土土器 (498・499)

土師器・陶磁器が出土する。土師器(498)は小皿である。白色を呈し、口縁部及び内面ナデ、底部外面指押え調整を施す。陶磁器(499)は唐津系碗の高台部分である。これらは18世紀代である。

・531-0X出土遺物 (229~472)

本遺構からは多量の土器・陶磁器が出土した。これらは13~18世紀前葉のものであるが遺構で説明したように層位的な調査が不可能であった。以下では、器種単位に述べる。

瓦器・土師器・須恵器・陶磁器が出土する。

瓦器は碗・皿・羽釜・すり鉢・甕・井筒・火舎がある。碗(229~277)は最も古い時期は13世紀前葉段階のもの(229)であり、14世紀末段階まで存在する。量的には14世紀後葉代のもが多い。高台は低く断面三角形・台形を呈するものから存在しないものまである。内面の磨き調整は、間隔を荒く見込みと側壁の区別なく施すものが主流をしめる。皿(278~281)は内面に磨き調整を施すものもあるが、ほとんどのものは磨き調整がない。羽釜(380~394)は、わずかに内湾する口縁部をもち、体部上半には鏝をつけ、口縁部の外面

には段を有するもの(380~387)と直立する口縁部を有し体部上半には鏝をつけ、口縁部の外面には段を有さないもの(388~394)がある。共に体部内面にヨコ方向や斜め方向のハケ目調整を行なう。体部内面の下半は削り調整を施し、口縁部の内外面はナデ調整を行なう。口縁部の外面に段を有するものは15世紀代で、段のないものは16世紀後葉のものであろう。すり鉢(353~365・369・370)の口縁部形態は、断面三角形を呈する。外面は削り調整であり、口縁部の直下まで施し、内面はハケ調整ののち櫛目をいれる。口縁部の形態からみて15世紀前葉から中葉の時期にかけてであろう。甕(401~415)は口縁部の破片が主である。口縁部と体部の境界が明確なものと不明確なものがあり、時期的な差であろう。口縁端部は丸く収める。外面はタタキ、内面はナデ調整を行なう。15世紀代の遺物であろう。井筒(436)は体部から口縁部にかけては直立し、口縁端部外面には鏝をつける。内外面はナデ調整をする。15世紀代である。火舎(435)は球形の体部に口縁端部を直立させる。外面を磨き調整し、内面は横方向の荒いハケ調整を施す。

土師器は皿・羽釜・すり鉢・甕・炮烙・火舎・井筒・蓋がある。皿(282~337)の色調は淡赤灰色・白色・淡黄灰色・暗黄灰色・暗灰色系がある。量的には淡赤灰色が多い。形態は平坦な底部や丸味を帯びた底部に内湾、あるいは外反する口縁部をつけるものである。口径に大小がある。少量の13世紀代の遺物とは別に14世紀代の遺物が主流を占める。304の底部は糸切りやヘラ切り調整が施されていないにもかかわらず平坦である。294は器壁が厚く、平坦な底部に直立する口縁部をつける。内面にはハケ調整を施す。291は白色系の土師器で水簸されている。15世紀以降の遺物であろう。羽釜(344・372~378・395・396)は内湾する体部に水平に伸びる鏝を付け、口縁端部は折り曲げるものと直立する体部に水平に伸びる鏝を付け、口縁端部に面をもつものがある。396は砂粒の混入が多く、器壁も厚い。前者は14世紀後葉の遺物で、後者は17世紀前葉段階の遺物である。344はミニチュアで、球形の体部に内湾する口縁部をつけ、体部には水平に鏝をつける。内外面ナデ調整をする。16世紀中葉段階の遺物で香炉に使用したものであろう。甕(416~431)は口縁部と底部の破片である。口縁部の断面形態は台形を呈するものと外反する口縁がある。外面は横方向のタタキ、内面は横方向のハケ調整をおこなう。416~419は焼成の状態により土師器としたが、本来は瓦質であろう。時期は15世紀代であろう。420~425は17世紀代である。底部の破片(426~431)は平坦な底部である。外面はタタキ、内面は横方向のハケ調整をする。すり鉢(371)は口縁部直下を強く横方向にナデ調整するため口縁部の断面形態は丸い。16世紀代の遺物である。井筒(437)は直立する体部をもち、口縁端部外面に

は短い鏝をつける。内面ハケ調整、外面ナデ調整する。土師器の焼成のため16世紀代のものか。火舎（338～340・432～434）は、直立する口縁部で端部は肥厚させるもの（338）、わずかに内湾する口縁部をもつもの（339）、上方に内湾する口縁部を付け、底部には3足をつけるもの（340）、直立する体部をもつもの（432～434）に大別できる。さらに直立するものは、口縁部に文様を施すものと無文のものがある。338は18世紀代で、339・340は16世紀代と考えられる。338は外面を磨き調整し、内面はナデ調整する。339は砂粒の混入が多い。340はナデ調整する。432・433は蕨文を間隔をあけ施す。434は無文である。外面は丁寧な磨き調整を施す。内面はナデ調整である。14世紀から15世紀代の遺物であろう。炮烙（342・343）は、1孔を穿った把手をもち、器壁は厚手（342）と薄手（343）がある。共に外面には煤が付着しており使用痕がある。343は体部外面にタタキ痕があり、のちナデ調整する。蓋（341）は内外面黒色を呈し、内面は磨き調整し、外面は横方向のナデ調整で仕上げる。16世紀代か。

須恵器は鉢・甕がある。鉢（345～351・366～368）は、胎土焼成からみて、351以外は東播系のものである。断面形状は比較的三角形に近いもの（345）から丸い口縁部のものまでである。345の口縁部には重ね焼きの痕跡が存在しない。13世紀から14世紀にかけての時期であろう。351は東播系のもので胎土形態がちがいで、口縁部は丸く仕上げる。白色系を呈し、産地は不明である。甕（397～400）は焼成の悪いものがおおい。球形の体部に外反する口縁部で、口縁端部は面をもつ。外面にはタタキを横方向と縦方向に行なう。砂粒を含む。時期は13世紀～14世紀代にかけてであろう。

陶磁器は、碗・皿・盤・甕がある。碗（445～470）は、波佐見系（445～455）・唐津系（456～459）・瀬戸美濃系（460）・青磁（463～470）がある。波佐見系・唐津系・瀬戸美濃系は17～18世紀代であろう。青磁は、外面に鎬蓮弁を施すもの（464）と無文がある。464・470は13世紀代、467は14世紀代、462・463・465は15世紀代、468・469は16世紀代のものである。皿（461）は青花の端反皿で16世紀である。盤（471・472）は、波佐見系青磁碗（471）と赤絵盤（472）がある。471は輪花で、高台部には砂目がある。割口には、漆による接合痕がみられる。17世紀代の遺物である。472は16世紀中葉のものであろう。甕（438～442）は、口縁部を屈曲させ端部を上下に拡張した形態で、内外面はナデ調整を行うもの（438～441）と外反する口縁部をもち、口縁部の内面には自然釉がかかるもの（442）がある。前者は常滑系で、時期は14世紀代であろう。後者は丹波系の可能性をもち、時期は同じく14世紀代であろう。壺か甕か不明であるが底部の破片がある（443・444）。

・535-OX出土土器(489)

陶磁器が出土する。489は波佐見系の椀である。18世紀代のものである。

・546-OX出土土器(657)

埋甕、おそらく糞尿溜に使用されたと考えられる土師器の甕である。口縁端部は玉縁状に肥厚する。体部の張りは比較的弱く、底部はほぼ水平である。口縁部はヨコナデ、体部外面荒いタタキ、体部内面荒いハケ目調整を施す。16世紀代である。

・ピット出土土器(480・481・494・496・515・516)

明らかな建物に伴うピット(柱穴)からの出土遺物はないが、いくつかのピットから少量の土師器・瓦器が出土する。

520-OP出土土器(481)

瓦器椀である。内面に荒いヘラ磨きを施す。底部形状は不明であるが、14世紀代のものであろう。

532-OP出土土器(494)

土師器小皿である。底部外面未調整、他の部分はナデ調整を施す。外面にススが付着する。共伴した瓦器椀から14世紀代である。

534-OP出土土器(480)

瓦器椀である。摩耗が著しいが内面に暗文の痕跡が認められる。口縁部ヨコナデ、体部外面指押え調整を行なう。底部の形態は不明であるが、14世紀代のものであろう。

537-OP出土土器(497)

土師器の小皿である。口縁部及び内面はナデ、底部外面指押え調整を行なう。白色を呈し、全体に小ぶりである。16世紀代の可能性がある。

548-OP出土土器(496)

土師器小皿である。口縁部は直線的に外上方にのびる。摩耗が著しいが、口縁部及び内面ナデ、底面指押え調整を施す。16世紀前後のものであろう。

549-OP出土土器(515・516)

瓦器椀である。内面荒いヘラ磨き、口縁部ナデ、体部外面指押え調整を施す。底部に高台がつくもので、13世紀代のものである。

・500-OZ出土土器(473~479・620・621・623・626~630・645)

土師器・瓦器・陶磁器が出土する。土師器には皿・炮烙・火舎・甕がある。皿(479)は小皿である。器肉は薄く、比較的硬質である。口縁部は強いナデ、底部外面指押え調整

を施す。16世紀代であろう。炮烙（620・621）は体部と底部の境が丸味をもつもの（620）と稜を呈するもの（621）がある。全体にナデ調整を施す。17世紀代のものである。火舎（629・630）は大型（629）と小型（630）がある。629は体部から口縁部にかけて直線的に内傾し、外面に2条の突帯をめぐらす。突帯間には「*」の連続スタンプ文を施す。ナデ調整を行なう。630は口縁端部が内側に肥厚・内湾するものである。共に16世紀代である。甕（645）は直口を呈し、端部は肥厚する。胎土は粗く、外面の摩耗は著しいがタタキが施されていたようである。内面は荒いハケ目調整を施す。18世紀前葉のものである。

瓦器には羽釜・鉢がある。羽釜（623）は口縁部が内傾し、外面階段状を呈する。鏝はほぼ水平にのびる。ナデ調整を施す。16世紀代である。鉢（626～628）は、すり鉢で片口と考えられるものである。口縁端部は断面三角形を呈する。体部外面ヘラケズリ、他はナデ調整を施す。626・628は2次焼成を受けている。15世紀代である。陶磁器は、すべて碗である。473～475は唐津系、476・478は波佐見系である。これらは18世紀前葉のものである。477は青磁碗の高台部分である。見込みに花文が印刻されている。16世紀代である。

・529－O Z 出土土器（523～530・587～600・647～652・655）

瓦器・土師器・陶磁器が出土する。瓦器には皿・羽釜・鉢・甕・火舎がある。皿（527・528）は小皿で、内面にハケ目状の強いナデ調整を施したもので、いわゆる本来の瓦器皿とは異なる。堺環濠都市遺跡で類似品が出土する。15世紀代である。羽釜（587）は口縁部が内傾し、外面階段状を呈する。鏝は比較的厚く、水平方向に短くのびる。口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ハケ目調整を施す。15世紀代である。鉢（588～596）は片口と考えられるすり鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に外上方にひらき、口縁部断面三角形を呈する。体部外面ヘラケズリ、内面はハケ目調整の後すり目を施す。体部に巻き上げ痕が残るもの（588・591・593）がある。概ね15世紀代である。甕（647～651）は肩部が張り、口縁端部が外方に肥厚し折り返されたもの（647～650）と短く外反し、端部に面をもつもの（651）とがある。体部外面には荒いタタキを施し、体部内面はナデ調整のもの（647・650・651）とハケ目調整のもの（649）、ナデ調整後ハケ目調整を施すもの（648）がある。口縁部は共にヨコナデ調整である。647～650は概ね15世紀代、651は14世紀代である。火舎（599）は体部が内湾し、短く立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は平坦である。全体にナデ調整を施し、体部外面に菊花の連続スタンプ文をつける。15世紀代である。

土師器には皿・鉢・甕・火舎がある。皿（526・529・530）は口径5～6 cmの小皿（529・

530)と口径10cmの椀状のもの(526)がある。内外面ヨコナデ、底部外面指押え調整を施す。16世紀代と考えられる。鉢(597・598)は片口と考えられるすり鉢である。口縁端部を丸くおさめるが、597は外方に肥厚する。体部外面ヘラケズリ、内面ハケ目調整の後に5本1単位のすり目を施す。16世紀代である。甕(652・655)は口縁部が短く外方に折れまがるもの(652)と垂直に立ち上がり端部方向に徐々に肥厚し平坦面をもつもの(655)がある。体部外面タタキ、体部内面ハケ目調整を施す。652は硬質で瓦質の可能性があるが、ここでは炭素吸着が全く認められないことから土師器とした。652は15世紀末、655は17世紀後葉のものであろう。火舎(600)は体部が内湾し、口縁端部が内傾した面をもつものである。底部は欠失しているが、三足が付くものと思われる。体部外面ヘラケズリ、内面ハケ目調整を施す。口縁部内面にススが付着する。16世紀代である。

陶磁器には椀・皿・盤がある。椀(523)は龍泉窯系青磁の高台部分である。15世紀代である。皿(524)は美濃・瀬戸系のソギ菊皿で、16世紀代である。盤(525)は波佐見系で17世紀代である。

・水田出土土器(520～522)

ここでいう水田出土土器とは、西側第2遺構面検出の小溝群出土土器を指す。瓦器・土師器が出土する。図示したものは㊸-0Zから出土したものである。瓦器には椀・皿がある。椀(520)は内面に荒いヘラ磨き、体部外面指押え調整を施す。無高台と考えられる。皿(521)は小皿で、ナデのみでヘラ磨き調整はすでにみられない。椀・皿とも14世紀後葉のものであろう。土師器(522)は小皿である。口縁部ナデ調整を施す。14世紀代のものであろう。

・整地土出土土器(519・633～644・653)

ここでいう整地土とは、本地区西側地域の第2遺構面直上に見られるもので、第3層(包含層)出土土器とは明らかに異なるものである。瓦器・土師器・須恵器が出土する。瓦器には椀・鉢・羽釜がある。椀(519)は内面に荒いヘラ磨きを施し、体部外面指押え調整を行なう。口径からして13世紀代のものであろう。鉢(638・639)は片口のすり鉢と考えられる。口縁部は断面三角形を呈する。外面ヘラケズリ調整を施す。15世紀代である。羽釜(644)は口縁部が内湾し、外面階段状を呈する。罫は水平にのびる。口縁部及び体部内面ナデ、体部外面ヘラケズリ調整を施す。15世紀代である。

土師器には鉢・甕・火舎がある。鉢(633～636・640・641)は片口と考えられるすり鉢である。口縁端部は丸くおさめるが、636・641は外方に肥厚する。633は口縁部の断面形

状が三角形を呈していることから瓦器の可能性が考えられるが、ここでは炭素が吸着せず、軟質であることから土師器としている。640の外表面及び口縁部内面は強いナデ調整により凹状を呈し、巻き上げ痕が残る。他の外表面は軽いヘラケズリ調整を施す。635・636・641は内面ハケ目調整を施し、641には5本1単位のすり目をもつ。概ね16世紀代と思われるが、633は15世紀後葉に属するものであろう。甕（653）は口縁部がほぼ垂直で、端部は肥厚し、平坦な面をもつ。体部外表面タタキ、内面ハケ目調整を施す。18世紀代である。火舎（642・643）は、口縁部が内傾するもの（642）と内湾して端部が肥厚するもの（643）がある。643は三足が付く。全体にナデ調整を施すが、特に642の外表面位は強いナデのため凹線をめぐらしたような状態を呈する。共に口縁部にススが付着する。16世紀代である。

須恵器には鉢（637）がある。東播系の片口のすり鉢である。口縁部に重ね焼きの痕跡を残し、上下に拡張することから14世紀代である。

・包含層出土土器（538～571・601～619・656・658～664）

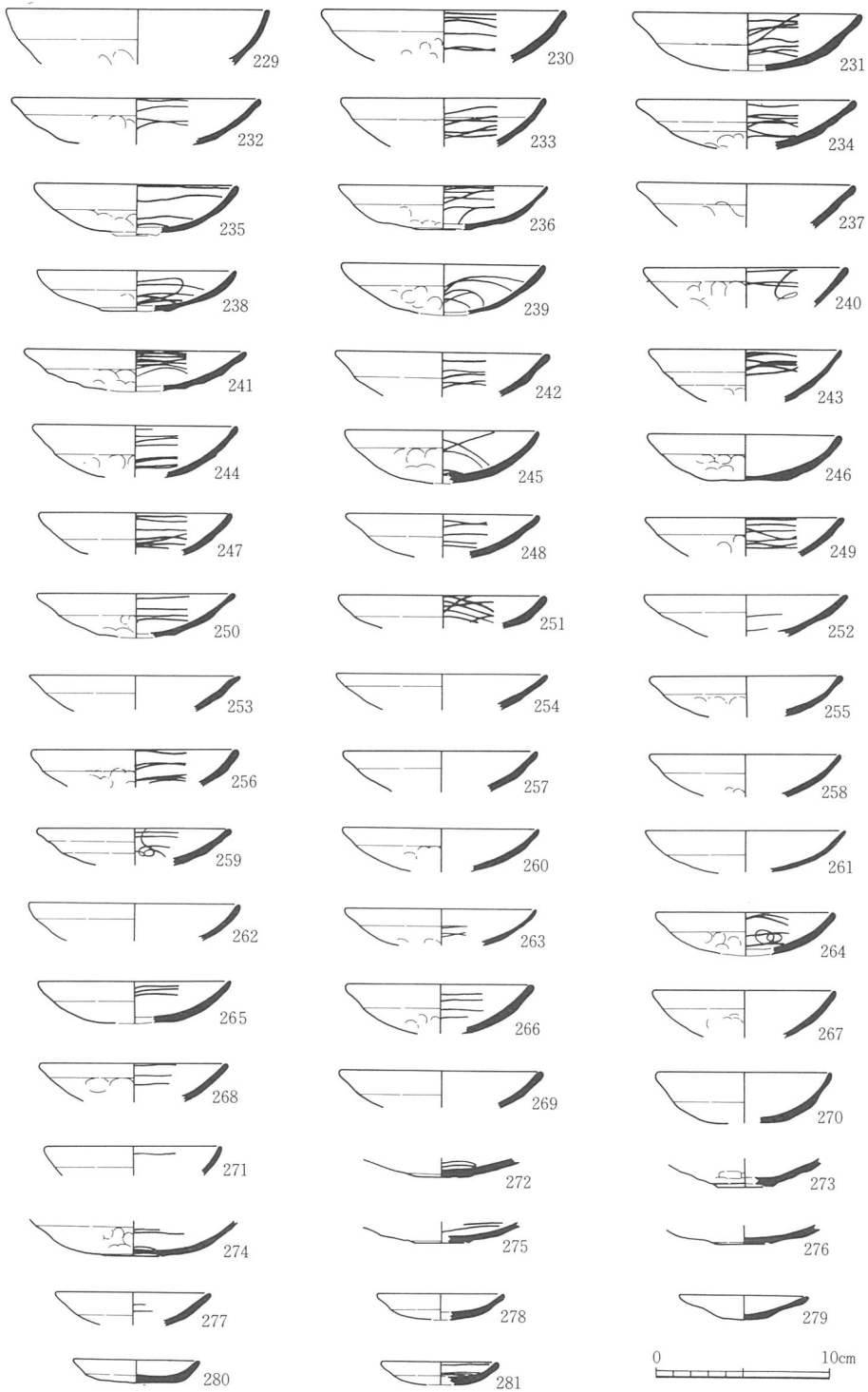
瓦器・土師器・須恵器・陶磁器が出土する。瓦器には椀・鉢・甕・羽釜がある。椀（542・544～546）は摩耗が著しいため内面の磨き調整は不明。体部外表面には指押え調整を施す。口径等から544・545は14世紀代、546は高台の形態から13世紀代のものであろう。542は炭素の吸着がなく土師器に近い。復原口径が若干大きい可能性があるが、14世紀中葉～後葉のものである。鉢（543・616・617）は椀を大きくした片口と考えられるもの（543）とすり鉢（616・617）がある。543は摩耗が著しいため細部の調整は不明。外表面に指押え痕が残る。13世紀前葉のものであろう。すり鉢は、炭素の吸着が薄い。口縁端部は、断面三角形を呈し外表面に明確な稜をもつもの（616）と丸味をもつもの（617）がある。外表面ヘラケズリ調整を施す。15世紀代である。甕（658～661）は口縁部が大きく外反するもの（658）、外反して端部が上下にわずかに拡張して面をもつもの（659）、垂直に立ち上がり端部が玉縁状に肥厚するもの（660）、無頸で肩部が張り口縁部が玉縁状に肥厚するもの（661）がある。体部外表面はタタキを施し、内表面はナデ調整を施すものが多いが、661はハケ目調整を施す。660は硬質で炭素の吸着が全く認められず、須恵器に近い。658・659は14世紀後葉～15世紀前葉と考えられるもので、どちらかといえば658のほうが、若干古いであろう。660は15世紀前葉、661は15世紀後葉に比定できる。羽釜（601～604）は口縁部外表面に段を有するもの（603・604）と無段のもの（601・602）がある。前者は大型（604）と小型（603）がある。大型は口縁部が内傾し、水平の鐙をもつ。小型は口縁部が内湾し、外上方にのびる鐙をもつ。口縁部はヨコナデ、体部外表面ヘラケズリ調整を施し、603の内表面にはハケ目

調整痕が残る。603は15世紀代、604は15世紀後葉～16世紀前葉のものである。後者（無段口縁）は、口縁部が垂直に立ち上がり端部が内側に肥厚するもの（601）と内湾し端部が内傾した面をもつもの（602）がある。鏝の方向は601が下方、602が上方に向く。口縁部外面及び鏝はヨコナデ、体部外面ヘラケズリ調整を施し、内面はナデ調整（601）とハケ目調整（602）がある。16世紀代である。

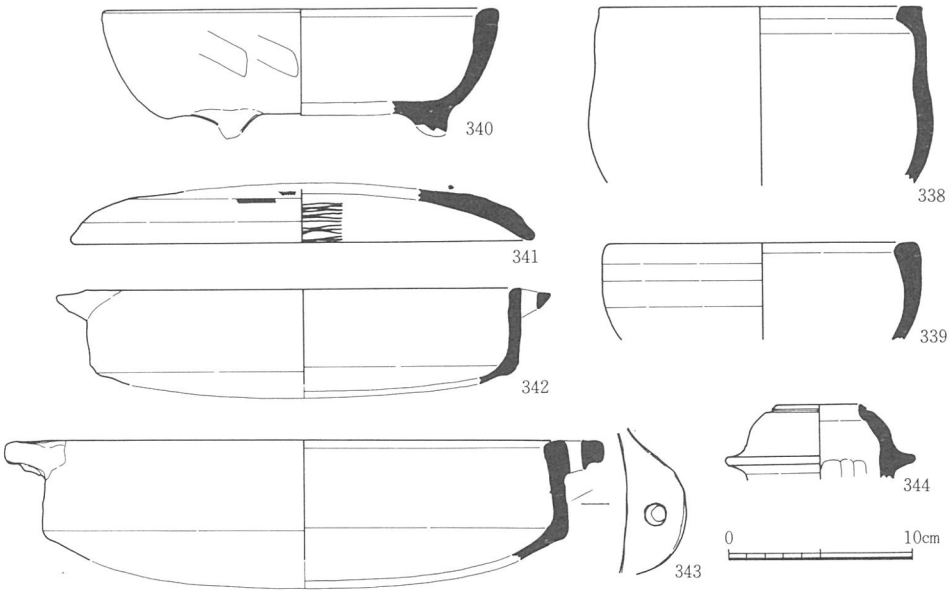
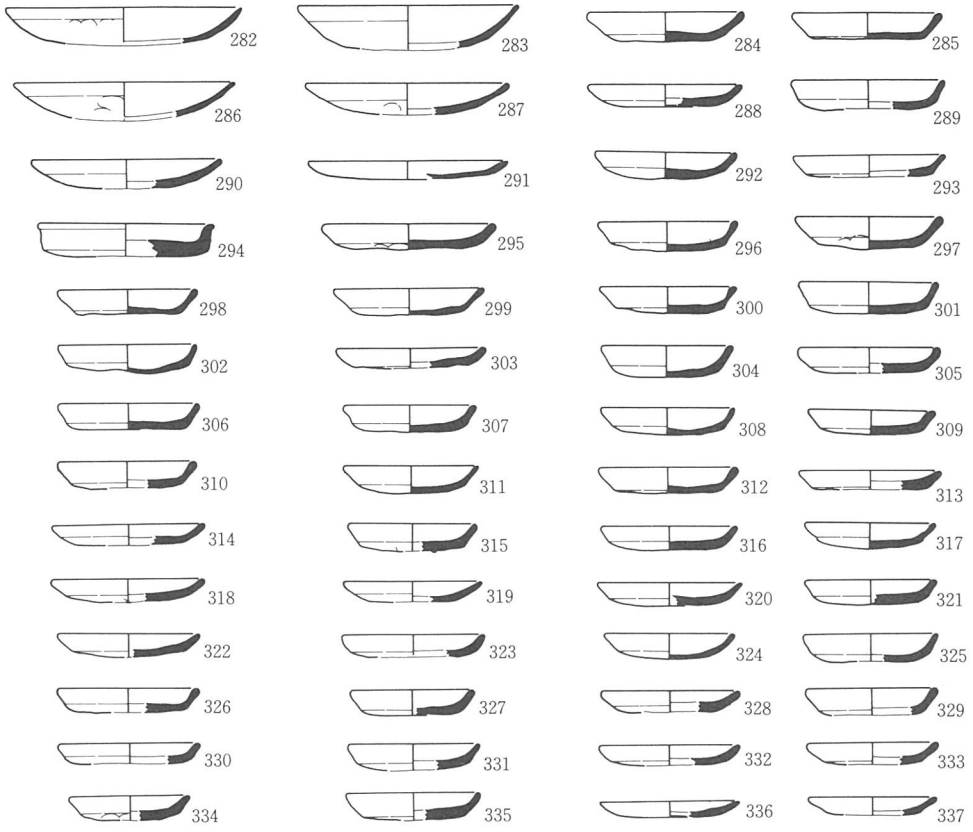
土師器には皿・甕・火舎・炮烙がある。皿（547～561）は小皿である。口径6～10cm前後、器高1～2cm前後を測る。基本的に口縁部はナデ、底部外面指押え調整を施す。口縁部はナデ調整の差異によって外反するものと内湾するものがある。547はその形状から瓦器出現前後の時期に伴うものであろう。548～551は軟質で白色を呈する。549の口縁部にはススが付着する。16世紀以降のものと考えられる。561は極小で内面に強いハケ目状のナデ調整を施す。15世紀代である。他は概ね13～14世紀代であろう。甕（656・662）は口縁部がわずかに内傾し、端部は肥厚して平坦な面をもつ。口縁部ナデ、体部外面タタキ、体部内面ハケ目調整を施す。口縁部の形態から17～18世紀代のものであろう。火舎（605～611）は体部が垂直に立ち上がるもの（605）、内湾ぎみに外方にのびるもの（606・607）、内湾するもの（608～610）に大別できる。内湾ぎみに外方にのびるものは比較的大きく、口縁端部は内側に折り返した状態を呈する。その口縁端部は内側に肥厚し、丸味をもつ。605の底部は明らかではないが、他は三足が付く。ナデ調整を基調とする。概ね16世紀代であろう。炮烙（618・619）は把手を付けたものである。外面にススが付着する。619の把手には2円孔を穿っているが、618の円孔は途中で止まり、貫通していない。16世紀代であろう。

須恵器には坏・皿・鉢がある。坏（539・540）は有高台である。全体にナデ調整を施す。軟質で灰白色を呈する。8世紀後葉から9世紀初頭の時期のものである。皿（538）は大皿である。口縁端部から内面はナデ、体部外面及び底部外面ヘラケズリ調整を施す。8世紀末～9世紀初頭のものである。鉢（541・612～615）は、いわゆる鉄鉢形のもの（541）と東播系のすり鉢（612～615）がある。前者は通有のものより小型で、体部外面に擬凹線をめぐらす。全体にナデ調整を施す。8世紀末～9世紀初頭の時期である。後者は口縁部が断面三角形を呈し、外面には重ね焼きの痕跡が残る。ナデ調整を施すが、613の内面にはハケ目状の強いナデ調整が残る。13世紀後葉のものである。

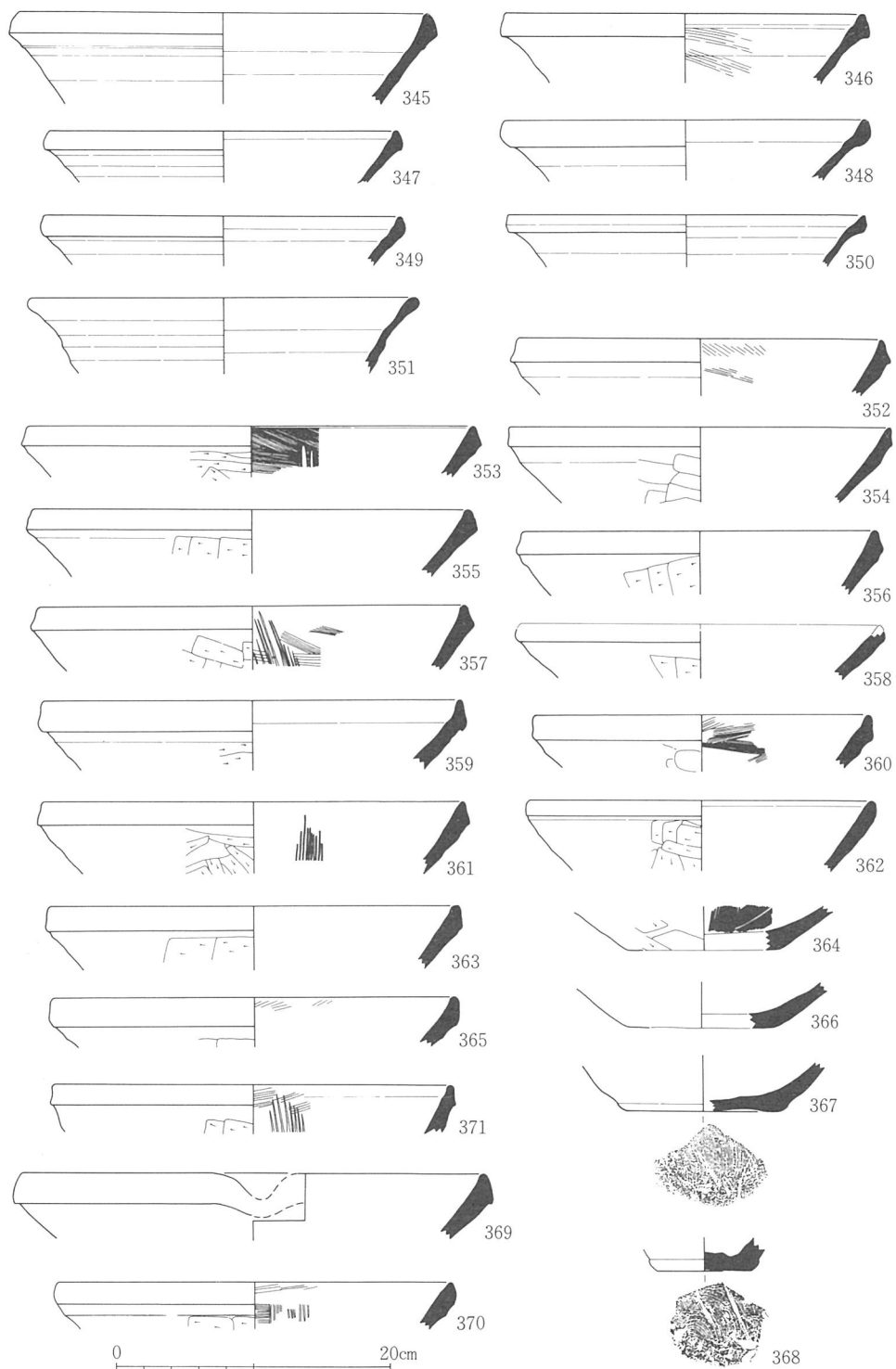
陶磁器には椀・皿・壺がある。椀（562～567）は青磁と天目茶椀がある。青磁（562～566）はすべて龍泉窯系である。外面に鎬蓮弁をもつもの（562）、無文のもの（563）、線描連弁



第72图 F地区出土土器(1)



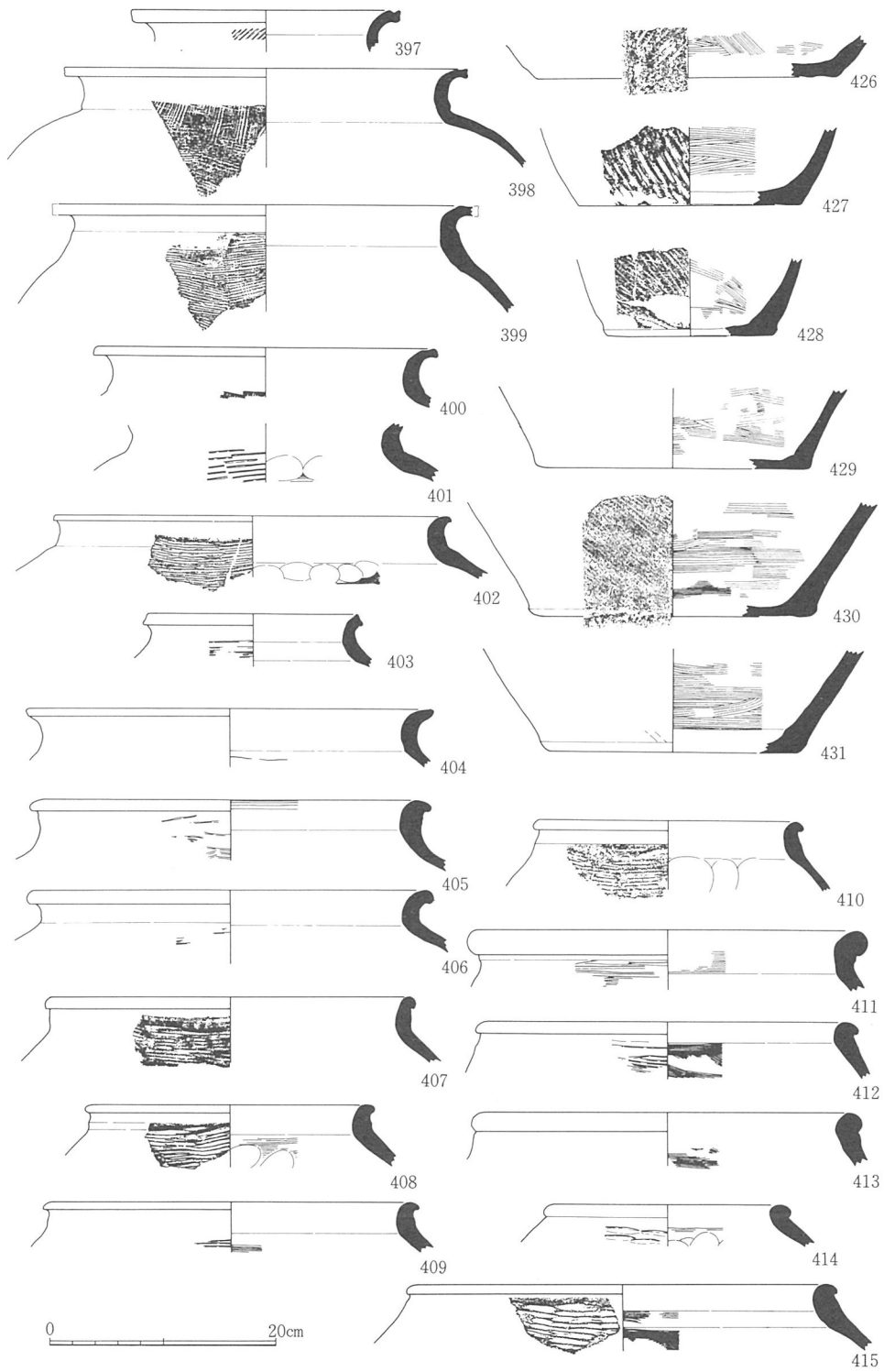
第73图 F地区出土土器(2)



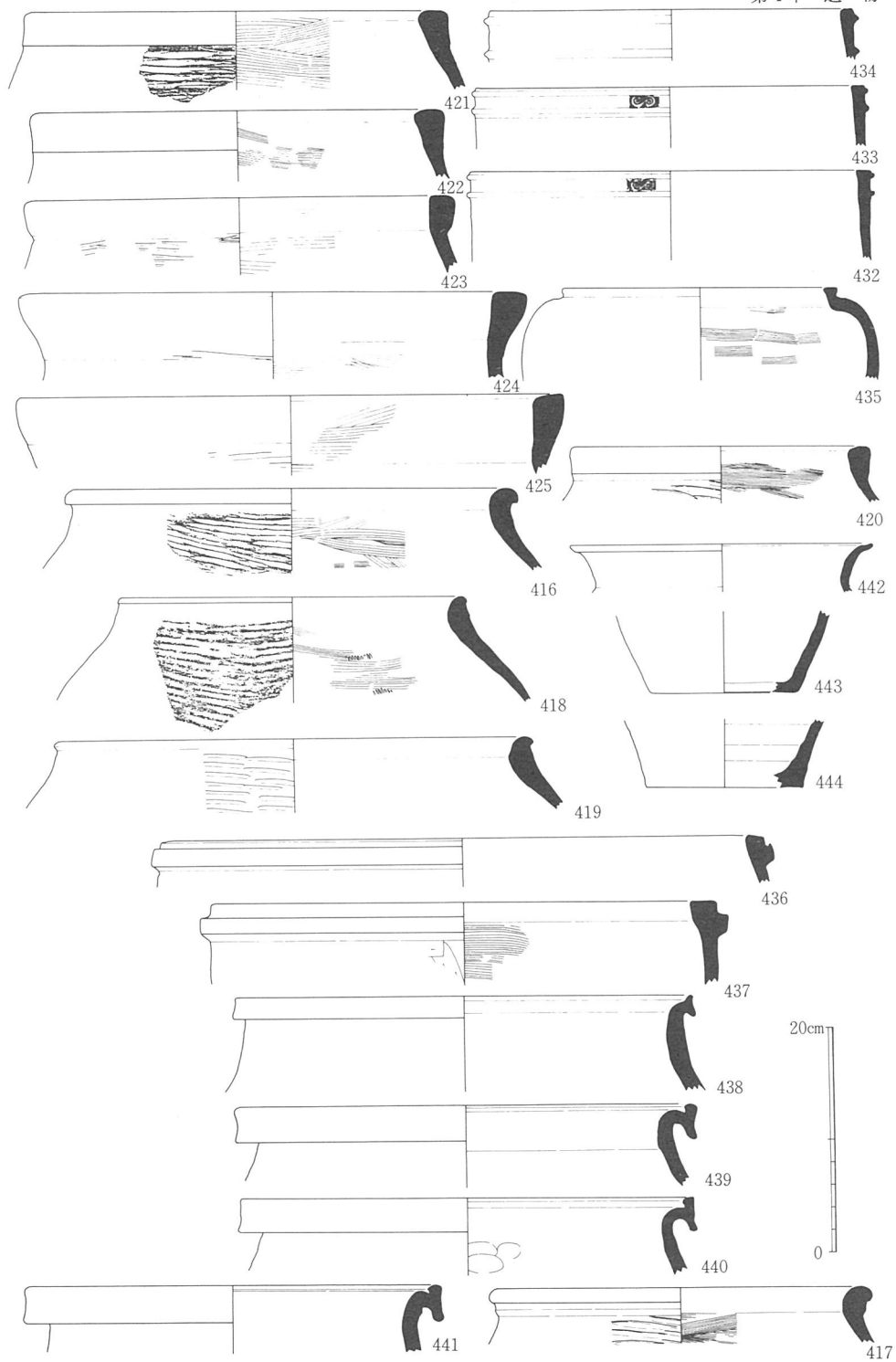
第74图 F地区出土土器(3)



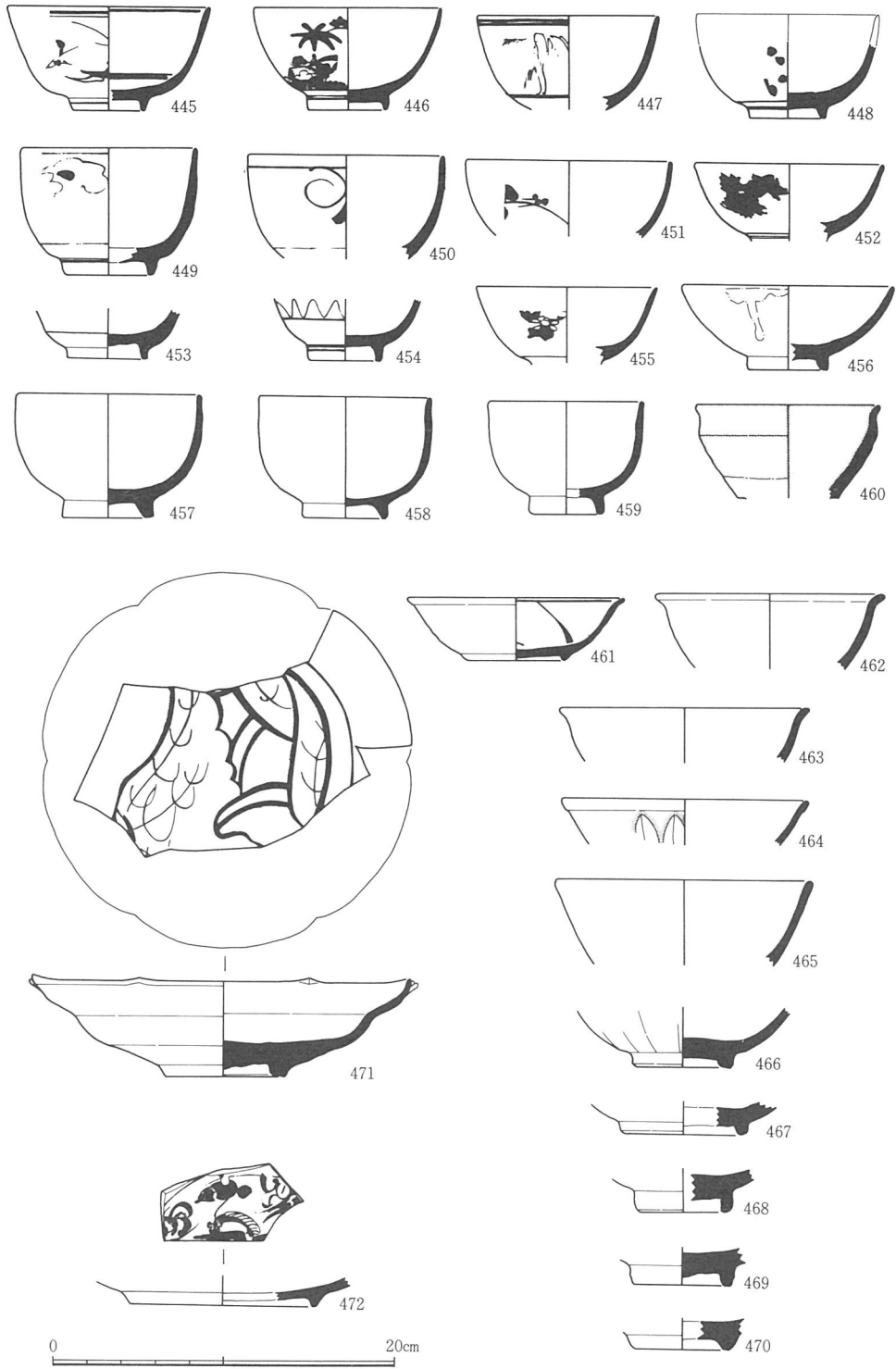
第75图 F地区出土土器(4)



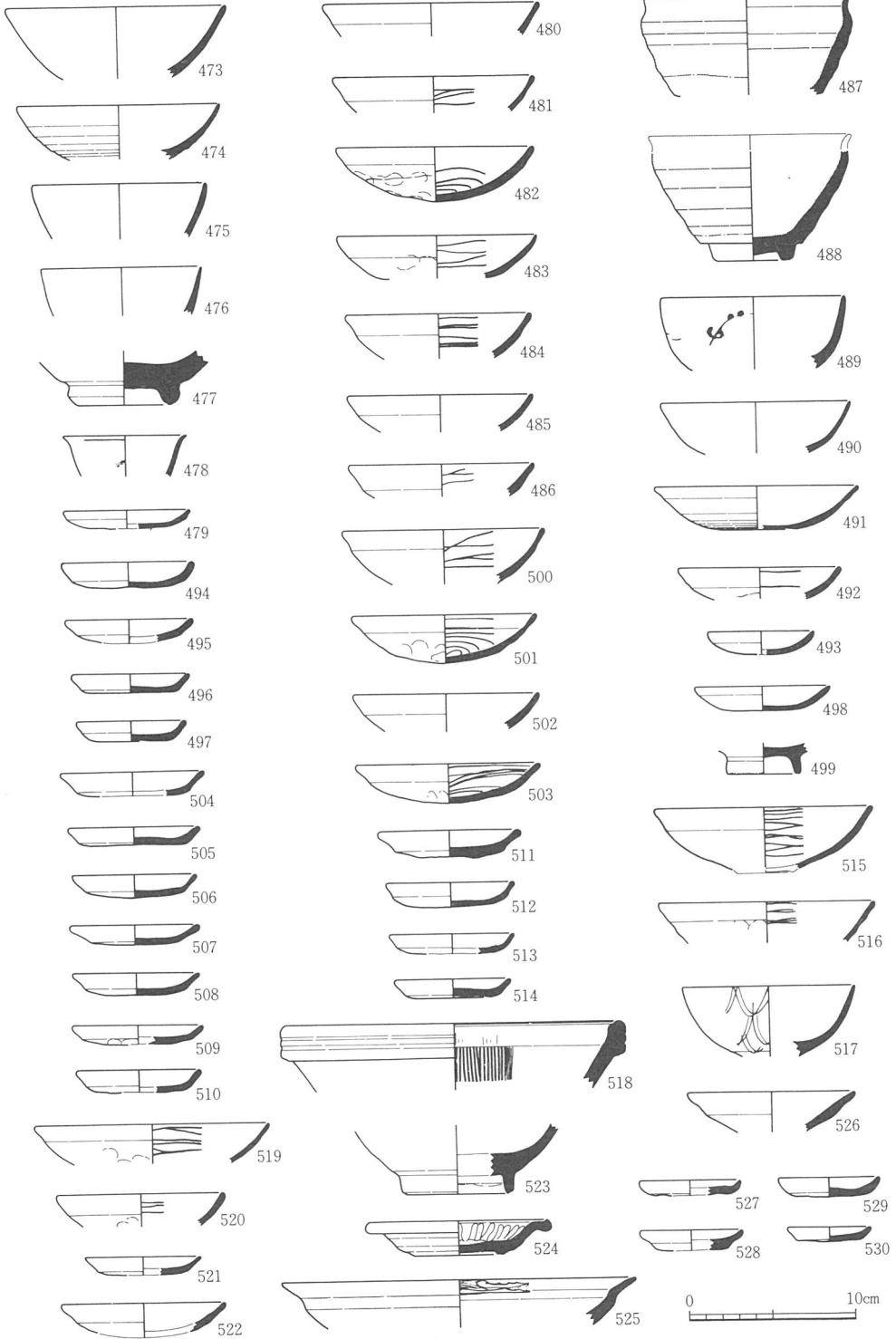
第76图 F地区出土土器(5)



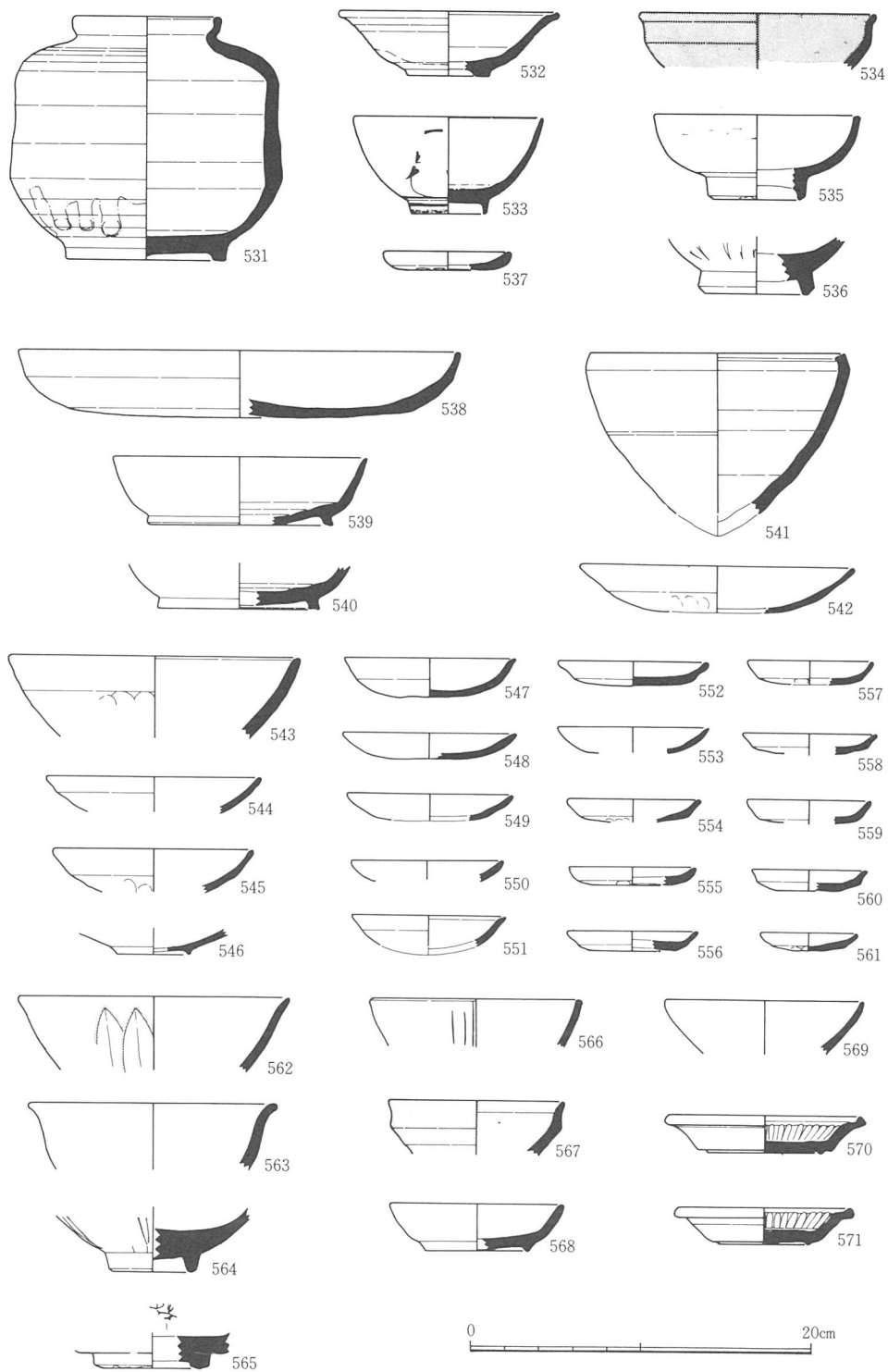
第77图 F地区出土土器(6)



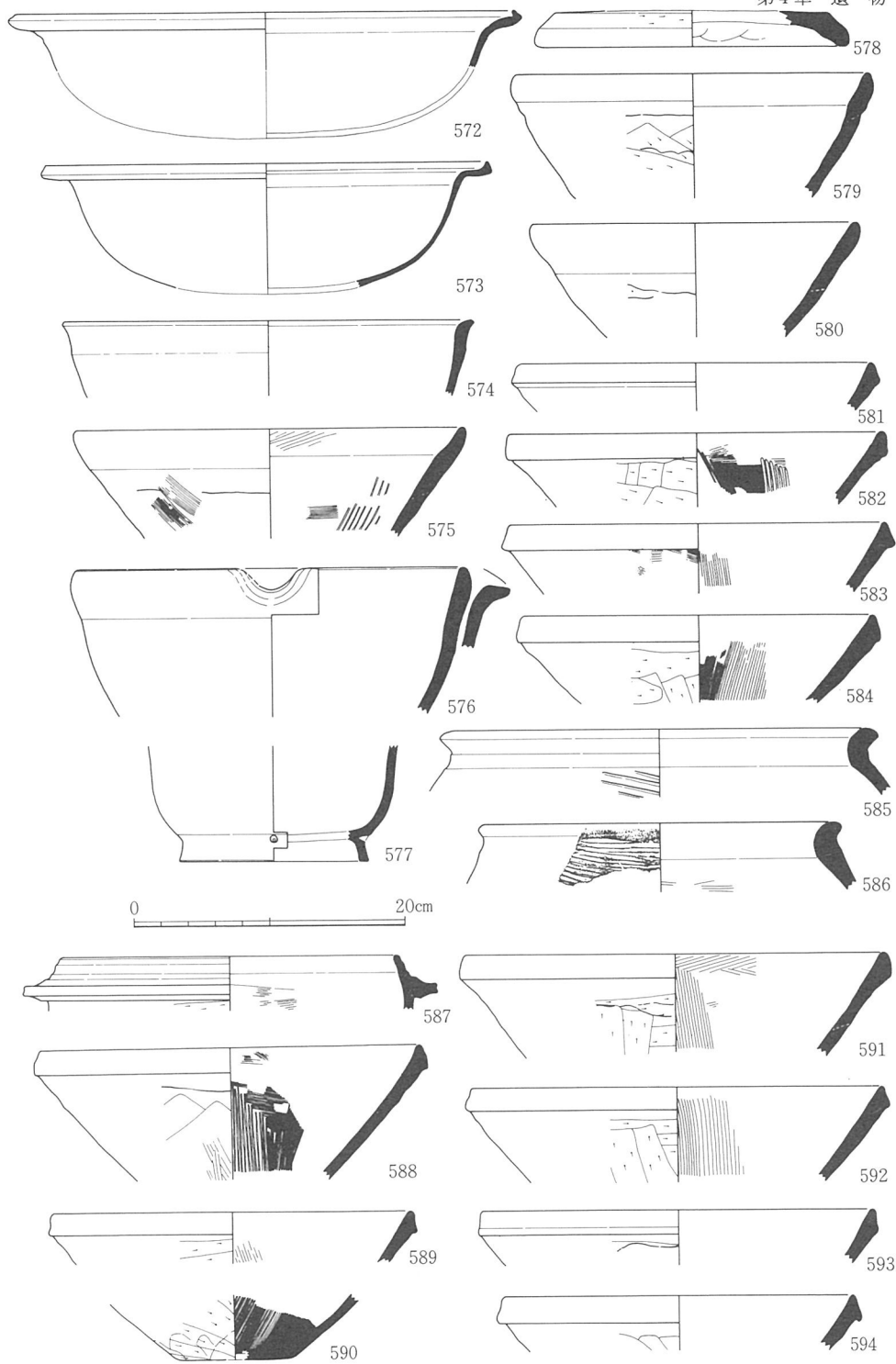
第78图 F地区出土土器(7)



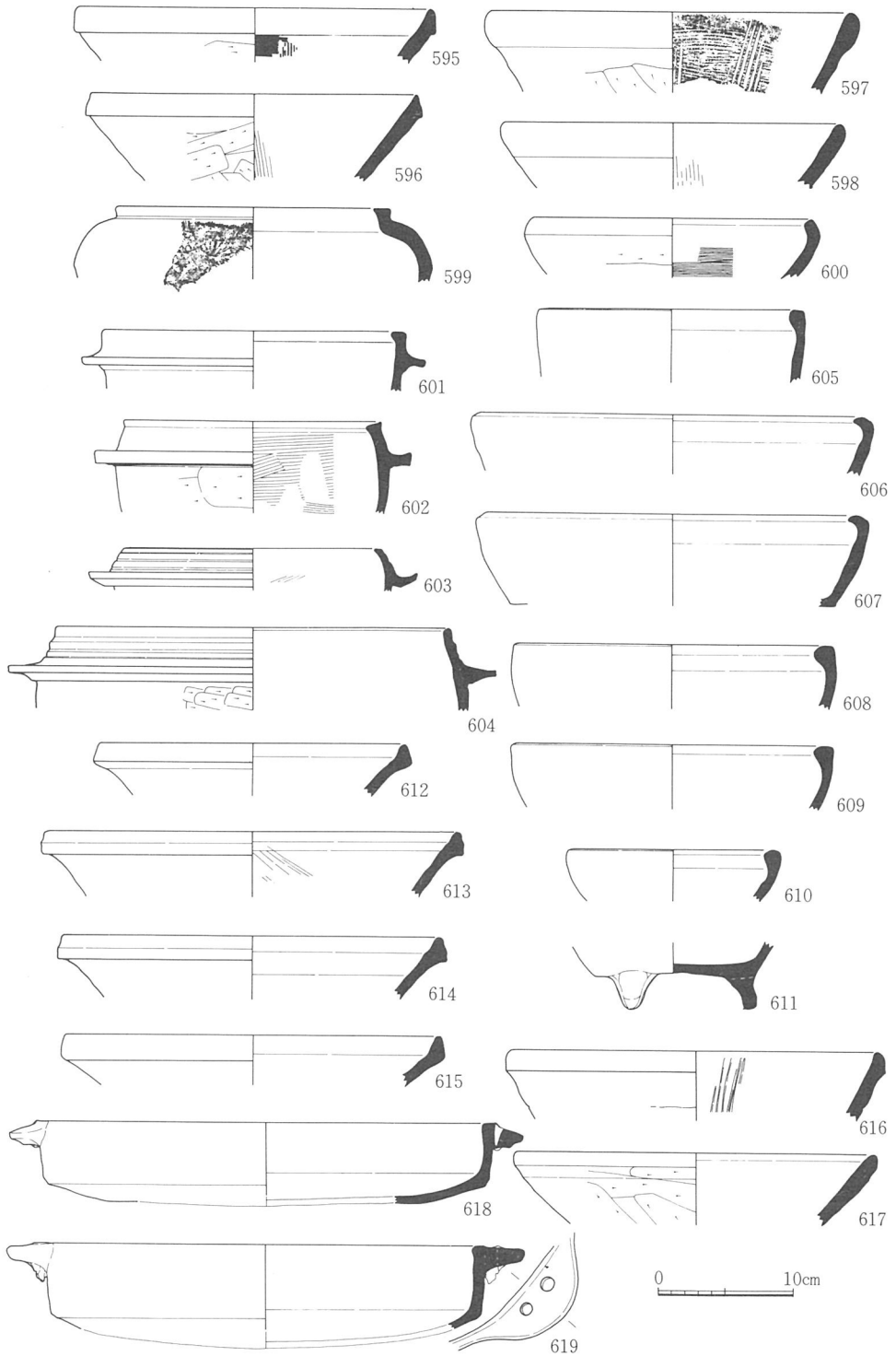
第79图 F地区出土土器(8)



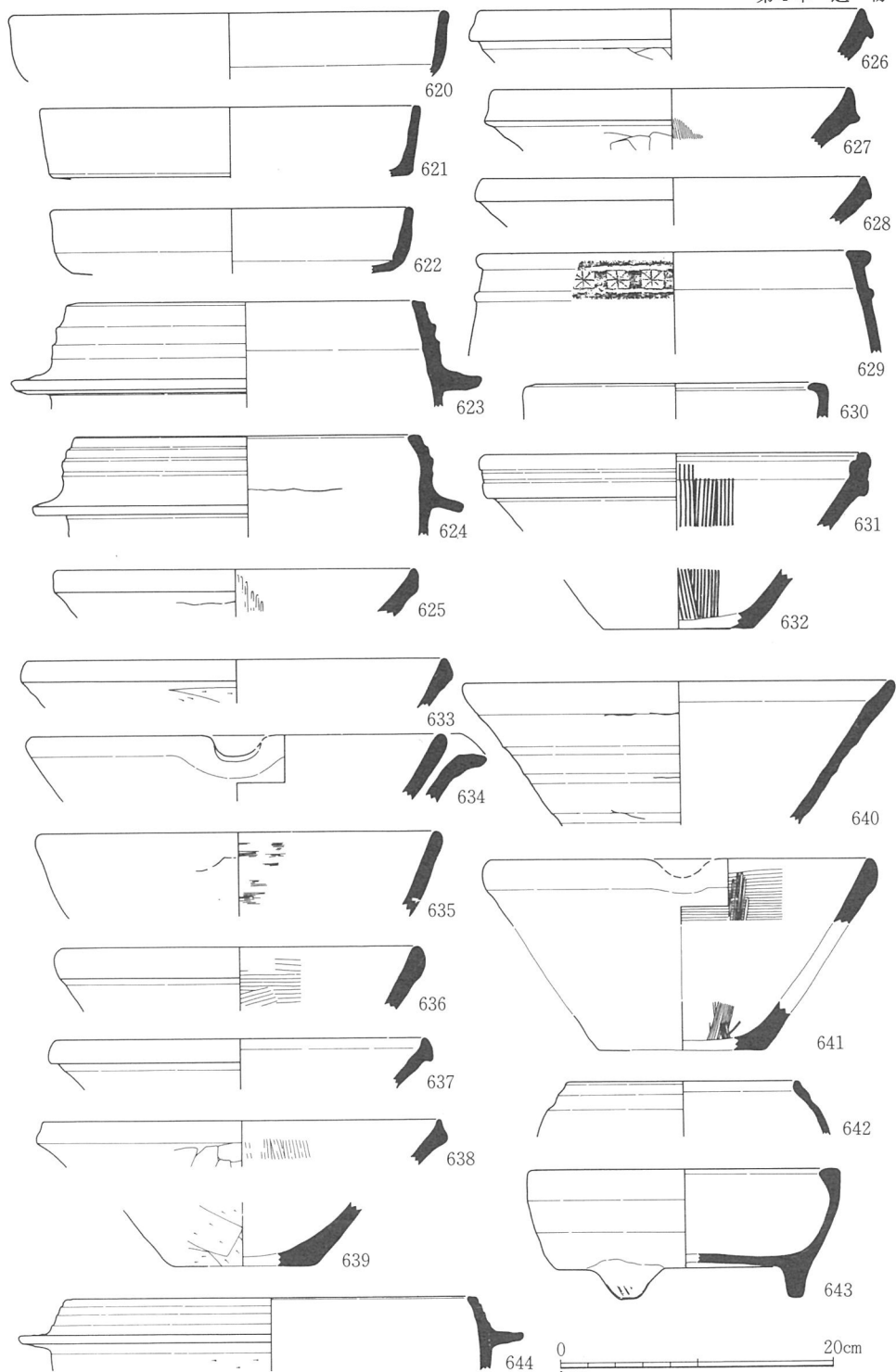
第80图 F地区出土土器(9)



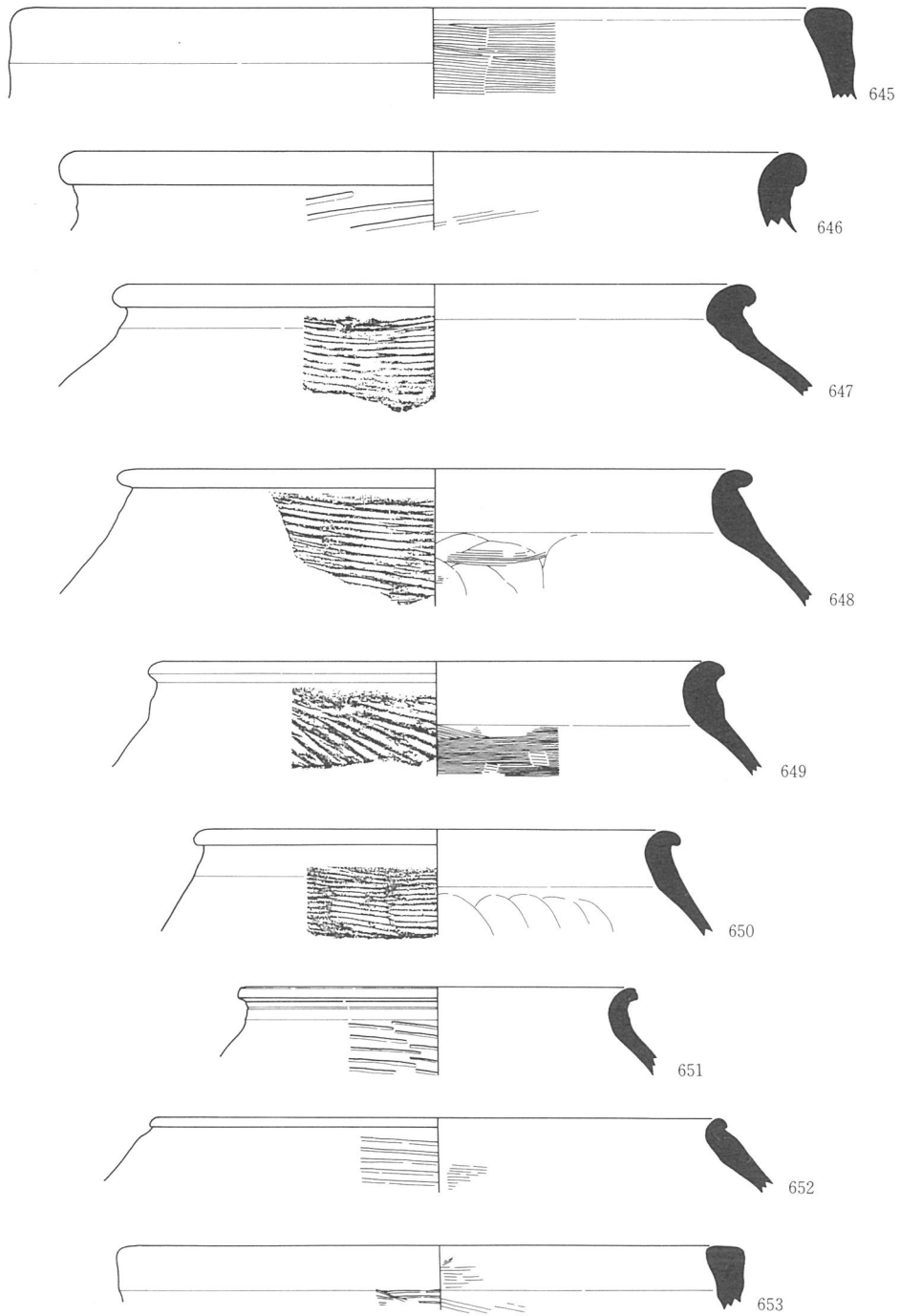
第81图 F地区出土土器(10)



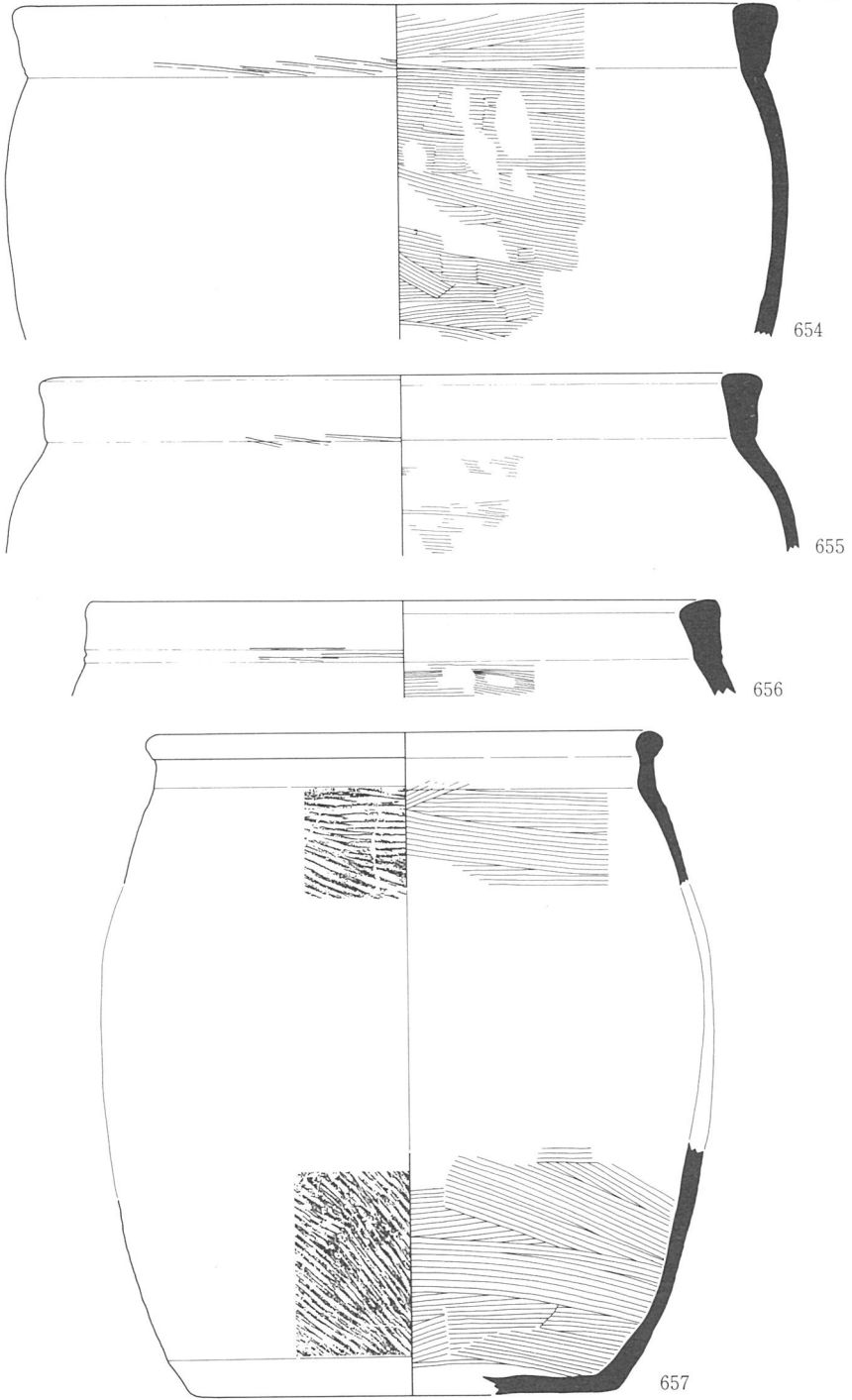
第82图 F地区出土土器(11)



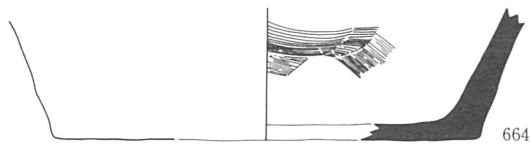
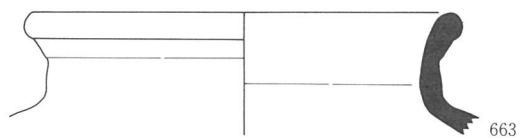
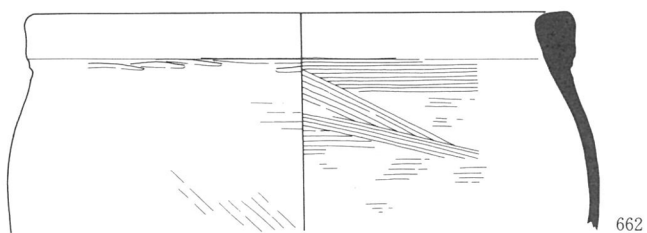
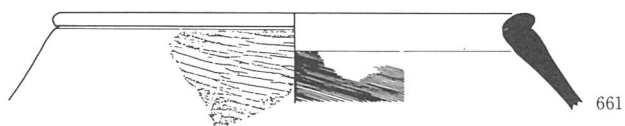
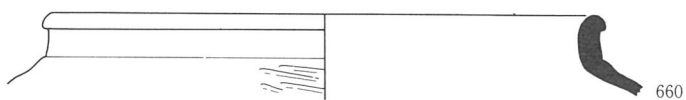
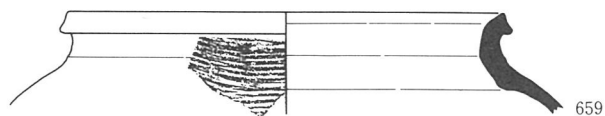
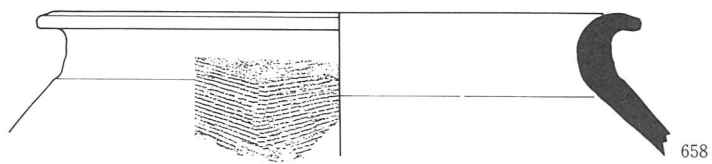
第83図 F地区出土土器 (12)



第84图 F地区出土土器 (13)



第85图 F地区出土土器(14)



第86图 F地区出土土器(15)

文をもつもの（564・566）がある。時期はそれぞれ13世紀、15世紀、16世紀代考えられる。565は高台部分のみであるが、見込みに花文が印刻されている。天目茶碗（567）は鉄釉の瀬戸・美濃系である。16世紀代のものであろう。皿（568～571）は瀬戸・美濃系（568・570・571）と唐津系（569）がある。前者の568は高台を削り出したものである。570・571はソギ菊皿で、共に16世紀代である。後者（唐津系）は器高の深いもので、17世紀代か。壺（663・664）は備前系である。口縁部はゆるやかに外反し、端部を玉縁状に丸める。底部は水平で、ハケ目調整痕が残る。14世紀代のものである。

7. G地区（第87図）

・水田出土土器（665）

推定水田㊸-〇Zから出土する。出土量は極端に少ない。瓦器・土師器がある。土師器は小皿である。瓦器は皿（665）である。口縁部は強いナデ調整を行なう。13世紀代の遺物であろう。

・包含層出土土器（666～672）

黒色土器・瓦器・土師器・須恵器が出土する。量的には少なく、小破片が主である。黒色土器は碗（668）で、内面黒色を呈するA類である。断面三角形の高台を有す。高台の形状からして10世紀後葉から11世紀中葉にかけての時期と思われる。瓦器は、碗・皿がある。皿（666・667）は、小破片である。口径は9.5cmと12cmがある。666の口縁部の内外面はナデ調整する。13世紀代とおもわれる。667は、炭素の吸着が悪い。内面は細かい縦方向のハケ調整を施す。14世紀後葉の時期のものであろう。須恵器には、すり鉢（671）がある。口縁部には重ね焼きの痕跡がある。時期は口縁部の形状からして14世紀代であろう。土師器は、皿・羽釜がある。皿（669・670）は、小破片で、復原口径7～8cm、器高1.8～2cmである。口縁部はナデ調整をする。時期は口径からみて14世紀代と想定される。羽釜（672）は、口縁部の小破片で、口縁部を玉縁状にする。硬質の焼成である。時期は14世紀代である。

8. H地区（第87～95図）

・6200-〇B出土土器（673～687）

6200-〇Bを構成する柱穴は約30個存在するが、その内遺物が出土したのは、6152-〇P（673・675・680・681・685）、6087-〇P（674・676・679・683.684・686）、6078-〇

P (677・682)、6106-O P (678) である。

瓦器・土師器が出土する。瓦器は椀 (673~681)・皿 (682) がある。椀は、底部が平坦で、体部から口縁部にかけては内湾しながらのびる。高台は低く、断面三角形を呈する。体部外面は、指押えて既に磨き調整はない。内面側壁の磨き調整は、間隔を荒くへら磨き調整を施す。磨きの幅は、太い 5 mm (673) から 1 mm (679) がある。口縁部外面のナデ調整は幅広く行なうが、極端に狭くかつ強く行うため、口縁部が外反するもの (676) がある。見込み暗文は平行線である (676)。皿 (682) は小皿で、口径 8 cm・器高 1.6 cm を測る。底部の押さえは弱く、また口縁部のナデ調整が弱いため、形態は丸みを帯びた底部から直線的に口縁部にいたる。内外面はナデ調整を行い、見込みには一条の暗文が残存する。土師器は、大皿 (683~685) と小皿 (686・687) がある。大皿は、高台をもつもの (683) ともたないもの (684・685) がある。高台をもつもの (683) は、口径 16.3 cm・器高 5 cm を測る。高台は「八」の字状にひらいて付けられ、器高は高い。口縁部は幅広くナデ調整する。皿 (684・685) は小破片で、復原口径 12.4~15 cm、器高 2.2 cm 前後を測る。684 は、口縁端部を僅かに内湾させ、端部は鋭く尖らせる。皿としたが、蓋になるかもしれない。蓋であれば、この時期類例をみない。小皿 (686・687) は小破片で、口縁部をナデ調整する。復原口径 7.8 cm・器高 1 cm を測る。瓦器椀や土師器皿の口径等を根拠にして、13 世紀の第 II 四半期の遺物と考えられる。

・ 6300-O B 出土土器 (688~690)

6300-O B を構成する柱穴からの遺物出土量は極端に少なく、6083-O P (688・689)、6090-O P (690) がある。

瓦器・土師器が出土する。瓦器は椀 (688・689) である。共に小破片である。高台は断面三角形を呈する。見込みの暗文は存在するが、文様については不明である。暗文は太く、3 mm 前後を測る。土師器は、小皿 (690) である。口径 9 cm、器高 1.4 cm を測る。口縁部をナデ調整する。底部の処理技法は軽くナデ調整で仕上げる。瓦器・土師器の時期は、瓦器は小破片のため明確にはしがたいが、高台の形状・見込みの調整等により、また土師器皿は口径が 9 cm あること等を根拠にして、13 世紀前半代と考えられる。

・ 6009-O O 出土土器 (708)

瓦器・土師器が出土する。土師器は皿である。瓦器には椀・皿がある。椀 (708) は小破片で摩滅が激しい。口径からして 13 世紀代と想定される。

・ 6015-O O 出土土器 (710)

瓦器・土師器が出土する。土師器は、小破片のため器種不明である。瓦器は椀である。椀（710）は口縁部をナデ調整する。口径からして13世紀代であろう。

・6027－〇〇出土土器（863）

土師器が出土する。1点のみである。球形の体部に「く」の字形に屈曲する口縁部を付ける。体部内面は縦方向と横方向のヘラ削りを行ない、口縁部はナデ調整を施す。器表面の摩滅が著しい。6世紀代のものであろう。

・6031－〇〇出土土器（764～785）

瓦器・土師器・陶器が出土する。瓦器は椀・皿・鉢がある。椀（764～773）は、内湾する体部に断面台形（771）と三角形（773）の高台を付ける。内面の磨き調整は間隔を荒く施す。幅は細く2mm前後である。外面には磨き調整はない。見込みの暗文は斜格子（771）や平行線を施す。口縁部のナデ調整は、幅広く1回施すもの（764～767・770）や2回に分けて実施するもの（768・769）がある。焼成は悪い。皿（774～780）は、丸味を帯びた底部に直線的に伸びる口縁部を付ける。口縁部と底部の境界は、口縁部のナデ調整を軽く施すため不明瞭である。底部の仕上げは比較的丁寧である。鉢（784）は片口で、復原口径については小破片のため不明瞭である。内外面の調整はナデ調整と思われる。土師器は大皿・小皿・羽釜がある。大皿（781）は、口縁部をナデ調整によって内湾気味に仕上げる。2次焼成を受けている。小皿（782）は、口径8.2cm、器高1.2cmを測り、浅い。底部の指押え調整は荒く施し、口縁部のナデ調整は強く施すため口縁部と底部の境界は明瞭である。口縁部のナデ調整は2回に分けて行なうため、口縁端部は僅かに内湾気味となる。形態からみて時期的にはやや古いものか。羽釜（783）は口縁端部を折り曲げる和泉地方に通有のもので体部には水平方向に鏝をもつ。陶器（785）は、甕の体部破片で外面にはスタンプ文様の叩きをもつ。内面は横方向のナデ調整を施す。粘土のつなぎ目が内面にはみられる。胎土からみて常滑系である。12世紀末から13世紀初頭の時期と考えられる。

・6034－〇〇出土土器（742～763）

瓦器・土師器・須恵器が出土する。瓦器は椀・皿がある。椀（742～759）は、断面三角形の高台を付け、体部から口縁部にかけては僅かに内湾する。口縁端部は丸い。側壁の磨き調整は、間隔を荒く施し、磨き調整の幅も太いものや細いものがある。見込みの暗文は、平行線（742）や斜格子（755）がある。炭素の付着の悪いものが多い。皿（761～763）は椀に比較して量的には極端に少ない。口縁部のナデ調整が強いため、体部と口縁部の境界は明確である。底部の仕上げは荒く指押えで仕上げる。土師器は大皿・小皿がある。数量

的には少なく小破片が多い。13世紀前半代の時期と考えられる。

・6044－〇〇出土土器（715～741）

瓦器・土師器が出土する。瓦器は椀・皿がある。椀（715～737）は、口径15～16cmを測る。体部から口縁部にかけては僅かに内湾しながらのびる。高台の断面形状は三角形を呈する。側壁の磨き調整は間隔を荒く、磨きの幅を太く施す。外面の磨き調整は存在しない。見込みの暗文は、平行線（734）や斜格子（730）がある。見込みの高台の貼りついた跡が存在するもの（733）がある。炭素の吸着の悪いものが相当数存在する。皿（738・739）は、口縁部のナデ調整をおこなうが、口縁部と体部の境界にナデ原体の痕跡が存在したものの（739）がある。土師器は大皿・小皿がある。大皿に高台をつけたものと通有の高台のないものがある。口径は15cm前後である。高台の付けたもの（740）は皿部分を欠く。ナデ調整を行なう。小皿（741）は口径8cm、器高1.3cmを測り、口縁部はナデ調整で仕上げる。13世紀の第II四半期の遺物であろう。

・6045－〇〇出土土器（807）

須恵器が出土する。口縁部を短く外反させる。内外面はナデ調整である。口縁部のナデ調整は強い。胎土が荒く砂粒を多く含む。形態からみて鉢か。時期は不明であるが、遺構の切合関係からみて、13世紀前半前後の時期と想定される。

・6047－〇〇出土土器（712）

黒色土器・瓦器・土師器が出土する。黒色土器は、椀で内面が黒色化するA類である。瓦器は椀で微細な小破片である。土師器は、大皿・小皿がある。小皿（712）は口縁部のナデ調整を軽く行い、さらに端部をナデ調整するため、内湾気味になる。口径・器高からして、13世紀代の遺物と想定される。

・6051－〇〇出土土器（786～799）

瓦器・土師器が出土する。瓦器には椀・皿がある。椀（786）は、口縁部のナデ調整は幅広い。皿（787～792）は、丸味を帯びた底部で直線的に口縁部が伸びる。口縁部のナデ調整が強いもの（790）も存在する。見込みの暗文は僅かに斜格子が観察できる（788）ほか、残存状態の悪いことも手伝って不明瞭である。土師器は大皿・小皿がある。小皿（793～799）は色調が違い、白色系（794）と淡赤褐色系（793・795～799）がある。胎土は精選され、良好である。口縁部の調整技法に特色があり、2回のナデ調整を施すため、口縁端部は僅かではあるが内湾気味になる。良好な瓦器椀が存在しないため明確ではないが、瓦器皿や土師器皿の形態・技法からして、12世紀末から13世紀初頭と考えられる。

・6053－〇〇出土土器（692～699）

瓦器が出土する。瓦器は椀・皿である。椀（692～697）は小破片が主で、量的にも少ない。口縁部はナデ調整を1回施すのが通有であるが、2回になるもの（692）もある。高台の断面形状は、三角形と貧弱な台形を呈する。見込みの暗文は、斜格子（697）が存在する。皿（698・699）は口縁部をナデ調整する。13世紀前半段階である。

・6054－〇〇出土土器（700～707）

瓦器・土師器が出土する。土師器は小破片の皿である。瓦器には椀・皿がある。椀（700～706）は、平坦な底部に内湾する口縁部をつける。調整技法等は摩滅のため不明である。皿（707）は内面に僅かに磨き調整が残存する。12世紀末～13世紀初頭段階である。

・6055－〇〇出土土器（864～866）

黒色土器・土師器・須恵器が出土する。黒色土器は椀（866）である。底部の破片で内面に炭素を吸着させるA類である。高台の断面形状は三角形を呈する。土師器（864）は口縁部を「く」の字形に屈曲させ、端部を内側に折り曲げる甕で、体部外面にはタタキが存在する。口縁部はナデ調整を行なう。胎土は荒く砂粒が多い。須恵器は椀（865）であるが、小破片のため器形については不明確である。古墳時代後期の坏蓋の可能性もあるが、胎土は荒い。10～11世紀代の遺物である。

・6064－〇〇出土土器（711）

瓦器が出土する。椀（711）である。口縁端部を僅かに外反させる。13世紀後葉から14世紀前葉段階にかけてのものであろう。

・6082－〇〇出土土器（691）

瓦器椀（691）が出土する。完形に近いが器表面の摩滅が激しい。底部は平坦で、体部は僅かに屈曲しながら口縁部にいたる。高台の断面形状は三角形を呈する。口縁部はナデ調整する以外調整は不明である。13世紀第II四半期のものである。

・700－〇〇出土土器（867～877）

17世紀代の遺物と混入と考えられる瓦器・土師器がある。867は土師器の甕である。口縁部と底部破片があるが同一個体と考えられる。口縁部の形態は、台形を呈し、端部は平坦面をなす。外面タタキ、内面ハケ目調整を施す。868は備前系すり鉢である。口縁部の外面には3条の擬凹線を施し、内面は2段に屈曲する。体部内面には縦方向のすり目を施した後斜め方向のすり目を施す。875は唐津系椀の高台部分である。高台部分には多量の砂目が残る。混入の遺物は、瓦器椀（870～874）、土師器皿（876・877）がある。14世紀

代の遺物である。瓦器すり鉢（869）は、硬質で片口をもつ。15世紀代の遺物である。

・720-〇〇出土土器（713）

土師器皿が出土する。皿（713）は小皿である。良好で堅緻な焼成である。口縁部のナデ調整は軽く施し、さらに端部を軽くナデ調整するため内湾気味になる。口径・器高からして、13世紀代の遺物と考えられる。

・783-〇〇出土土器（714）

土師器皿が出土する。皿（714）は小皿である。良好で堅緻な焼成である。口縁部は軽くナデ調整をし、底部は丁寧に仕上げる。口径からして13世紀代のものであろう。

・786-〇〇出土土器（808・809）

瓦器・土師器が出土する。出土遺物は小破片が多い。瓦器には碗・皿がある。碗（808）は口縁部をナデ調整する。土師器は小皿（809）で、口縁部のナデ調整は2回にわたって軽く施すため、口縁端部は内湾気味になる。福瀬遺跡の13世紀代の土師器の小皿の通有の技法と考えられ、13世紀代と想定される。

・873-〇〇出土土器（709）

瓦器・土師器が出土する。土師器は皿である。瓦器には碗がある。碗（709）は軽く口縁部をナデ調整する。口径と器高からして14世紀代であろう。

・653-〇S出土土器（823）

瓦器皿が出土する。皿（823）は、口縁部をナデ調整する。13世紀前半代である。

・6037-〇S出土土器（810～817）

瓦器・土師器・須恵器が出土する。瓦器には碗・皿がある。碗（810～816）は小破片が主である。高台の断面形状は三角形を呈する。側壁の磨き調整は間隔を荒く施す。磨き原体は太い。皿（817）は口縁部をナデ調整する。土師器は、大皿・小皿・羽釜がある。羽釜は体部の破片である。須恵器の甕は体部の破片で、外面にはタタキを施す。13世紀前半代の時期である。

・6085-〇S出土土器（822）

2点のみの出土である。土師器・磁器がある。土師器は外面タタキを施した甕である。磁器は青磁碗（822）である。見込み部分には印花文が施される。B地区04-〇I出土（第66図-6）の青磁と接合する。龍泉窯系で15～16世紀の時期である。

・6086-〇S出土土器（818～821）

瓦器・土師器・須恵器が出土する。瓦器は碗・皿である。碗（819～821）の残存状態は

悪く、器表面の摩滅は著しい。体部から口縁部にかけては僅かに内湾しながら伸び、高台は低く、断面形状は三角形を呈する。内面の磨き調整については、存在は確認しえるが、詳細は不明である。土師器は、大皿・小皿・羽釜がある。羽釜（818）は和泉地方に通有の口縁端部を折り曲げ、体部に水平方向の鐳を付けるものである。須恵器は甕で外面にはタタキの痕跡がある。時期は13世紀の第II四半期であろう。

・651-OX出土土器（824～862）

瓦器・土師器・須恵器・磁器が出土する。瓦器は椀・皿である。椀（824～846）は、平坦な底部に内湾する体部を付ける。高台は低いものと高いもの（839）があり、断面三角形を呈する。体部外面は指押えで既に磨き調整はない。内面側壁の磨き調整は、間隔を荒く施す。磨きの幅は2mm前後である。見込み暗文は平行線（839）と斜格子（846）がある。口縁部外面のナデ調整は幅広く行なう。皿（847～852）は、椀に比べて数量的に少ない。底部は平坦で、口縁部のナデ調整はきつい。見込みの暗文は既に存在しない。土師器は大皿・小皿がある。大皿（856・857）は、口径15～17cm、器高2～2.5cmを測る。口縁部のナデ調整は2回に分割して行うため、口縁端部は内湾する。底部は指押えの後軽くナデ調整する。口縁端部の外面には調整の際にできたと考えられる沈線が一条巡るもの（856）がある。小皿（853～855）は、口縁部をナデ調整し、端部をさらにナデ調整するため、形態が内湾するタイプ（853・854）と1回のナデ調整をするタイプ（851）がある。後者のタイプは炭素の吸着がないため、ここでは土師器皿としたが技法から見れば瓦器皿かもしれない。須恵器はすり鉢（858・859）である。断面の面取りは鋭い。重ね焼きの跡が口縁部に残り、内外面にナデ調整する。磁器は、白磁椀（860・861）と皿（862）がある。椀は玉縁の口縁を持ち、胎土からみて軟質（860）と硬質（861）の2種類がある。玉縁の断面形状はシャープを欠いている。皿は外反する口縁をもつもの（862）である。磁器類は12世紀代の遺物であるが、在地系の土器類は、12世紀末から13世紀初頭の時期である。

・水田出土土器（800～806）

推定水田㊦-OZ（805・806）、推定水田㊧-OZ（800～802）、推定水田㊨-OZ（804・803）から遺物が出土している。瓦器・土師器・須恵器がある。共に小破片である。

推定水田㊦-OZ出土土器（805・806）

瓦器・土師器が出土する。瓦器は椀・皿である。椀（805・806）は小破片である。断面三角形の高台（806）である。13世紀代の時期である。口縁部の破片（805）は小さく口径等は不明瞭である。内面には磨き調整の跡があり、口縁部のナデ調整は軽い。14世紀代の

時期であろう。土師器には皿がある。大小の区別は不明である。

推定水田⑩—O Z 出土土器（800～802）

瓦器・土師器が出土する。瓦器には椀（800・801）がある。椀は、口縁部を軽く幅狭くナデ調整する。内面の磨き調整は荒い。器高からみて14世紀代の時期と思われる。土師器の皿（802）は、復原口径7 cm・器高1.2 cmを測る。口縁部のナデ調整は軽く施す。14世紀代であろう。

推定水田⑩—O Z 出土土器（803・804）

瓦器・土師器が出土する。瓦器は椀・皿（803）がある。皿は口縁部のナデ調整がきつい。土師器の小皿（804）は、口縁部のナデ調整は軽く、形態は内湾する。13世紀代であろう。

・整地土出土土器（878～911）

ここでいう整地土とは、いわゆる遺物包含層と6200—O B周辺部上面地域との間に存在する暗褐色の堆積層を指す。しかし、厳密には遺物包含層とは区別しにくい。ただ出土遺物が極めて多くなんらかの形で人為的作用を受けているものと考えられることから、ここでは包含層出土遺物とは別に整地土出土土器として説明する。

瓦器・土師器・須恵器・磁器が出土する。瓦器には椀・皿がある。椀（878～898）は、体部から口縁部にかけては内湾しながらのびる。高台は低く、断面三角形（893～895・896・897）と台形（896）を呈する。共に貧弱である。体部外面は指押え調整を行い、既に磨き調整はない。内面側壁の調整は、間隔の荒いヘラ磨き調整を施す。磨きの幅は2 mm前後である。口縁部外面のナデ調整は幅広く行なう。見込み暗文は斜格子（893）・平行線（885・897）がある。皿（907～909）は、底部が平坦で、口縁部のナデ調整は強く施すため僅かに外反する。土師器は、大皿・小皿・羽釜がある。小皿（910）は、2回にわたるナデ調整によって内湾気味の口縁部をもつもので、福瀬遺跡出土皿通有のものである。羽釜（899）は、口縁部を欠くが、やや扁球気味の体部に水平に伸びる鏝をつける。外面は器壁を薄くする目的のためか削りを行なう。内面はナデ調整する。使用のための煤が外面に付着する。須恵器は、すり鉢・甕・壺がある。すり鉢（901・902）は、口縁部を尖り気味に仕上げるもの（902）がある。内外面はナデ調整を施す。902は内面に自然釉がかかる。胎土は砂粒を含み、いわゆる山茶椀と同一の胎土を持つことから瀬戸系であろう。901は口縁部を欠く。内面は摩滅しており、使用が激しかったことをうかがわせる。産地については口縁部を欠くため不明である。壺（911）は、直立する口縁部を持ち、口縁端部は丸

くおさめる。陶器質の焼成で、砂粒を含む。甕（900）は、外反する口縁部に、端部は面取りを行なう。口縁端部上面には一条の沈線をシャープに施す。口縁の外面にはタタキの痕跡が残存する。東播系のものか。13世紀前葉から中葉にかけての時期である。

・H地区包含層出土遺物（912～1044）

黒色土器・瓦器・土師器・須恵器・陶磁器が出土する。黒色土器は椀（999・1000）である。内面に炭素を吸着させるA類で、口縁部外面の削り調整や内面の磨き調整については摩滅のため不明である。

土師器は皿・羽釜・甕がある。皿は、胎土・調整・形態からみて平安時代初頭の時期（1001～1003）・中世の時期（967～991）・時期不明（997・998）がある。平安時代初頭とされる皿は、口縁部をナデ調整することによって外反し、口縁端部に沈線を施す（1001・1003）。器壁の摩滅しないもの（1001）は、赤褐色の色調である。中世の皿は小皿である。口径6.3～9 cm・器高1～1.8 cmを測り、口径・器高ともに大小があり、各時期のものが混在している。当然のことながら、口径・器高ともに容量の大きいものは底部は丸味をおび、少ないものは平坦で器高も低い。技法は全て同じで、口縁部をナデ調整し、底部は指押え調整する。大小を別にした形態の違いは口縁部の調整技法であるナデ調整の回数の違いにより、その傾向は口縁端部の形態の違いに現れる。13世紀前半段階から14世紀後半段階の時期の遺物であろう。羽釜・甕（1039・1044）は口縁部を「く」の字状に屈曲させ、端部を内側に折り曲げるもの（1044）と折り曲げないもの（1039）がある。1044は紀伊産の甕あるいは羽釜である。口縁部は短く、体部には退化した鏝が付くか付かないかの時期で、14世紀後葉であろう。1039は、羽釜と思われるが時期は不明である。

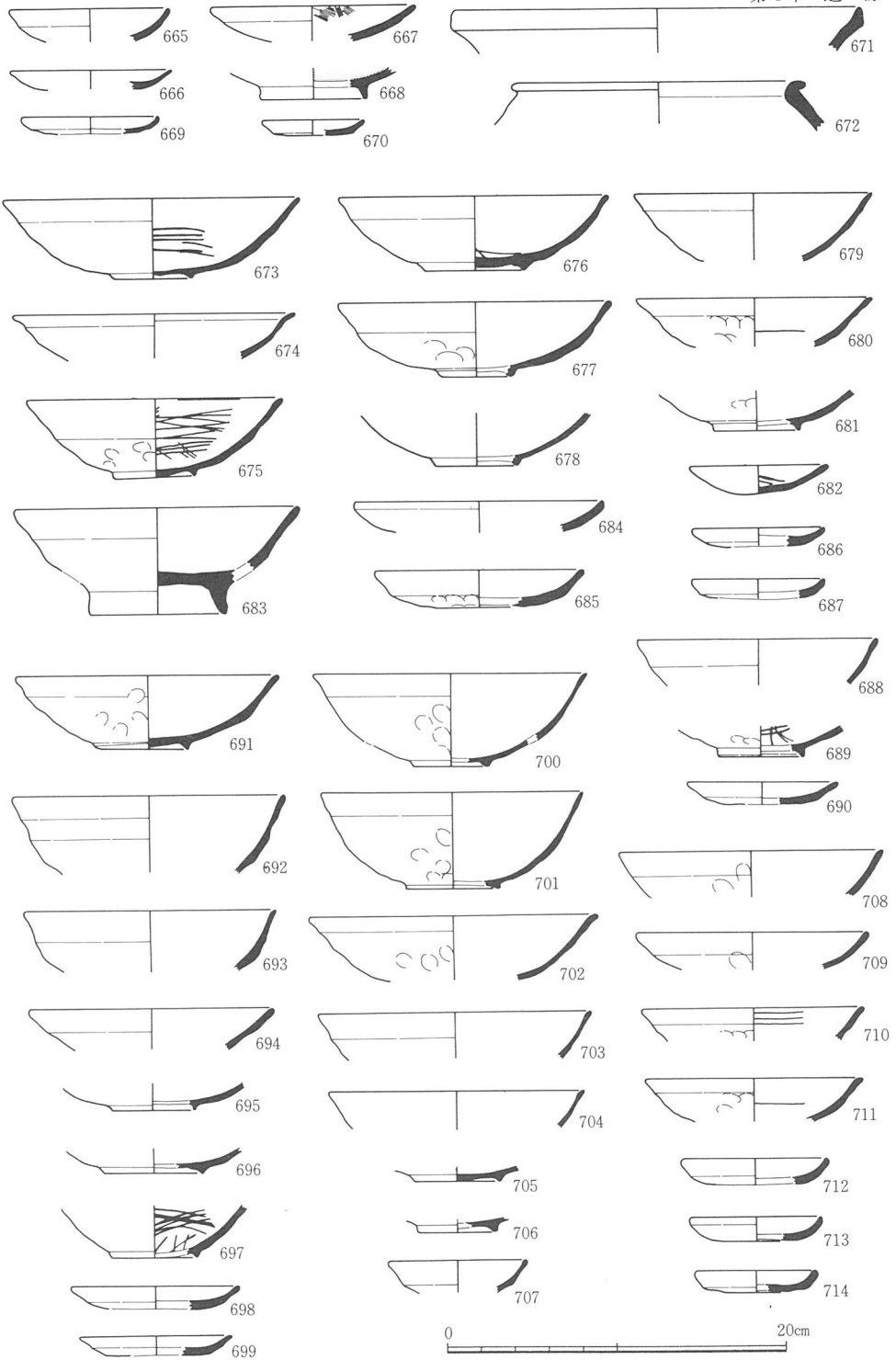
瓦器は椀・皿・羽釜・すり鉢がある。全て小破片である。椀（912～953）は、高台をもつものと既に高台を消失し、底部が丸くなってしまった段階のものまである。高台を有するものは、体部から口縁部にかけては内湾しながら伸び、高台は低く、断面三角形を呈する。体部外面は指押えで既に磨き調整はない。内面側壁の磨き調整は間隔を荒くへら磨き調整を施すもの（920・924・925・939）と細かく丁寧に施すもの（934）がある。磨きの幅は太い3 mmのもの（920・924・925・939）から細い1 mm（926・934）ものがある。口縁部外面のナデ調整は幅広く行なう。見込み暗文は、斜格子（927・931）や暗文をもたないものがある。胎土は精選されたものから粗いものまである。皿（954～966）は、底部は丸いものから平坦なものまであり、口縁部のナデ調整は比較的に強いいため、外反するタイプと軽く施すため直線的に伸びるタイプがある。見込みの暗文は既に存在しない。瓦器椀・皿

共に13世紀前葉から14世紀後葉にかけてのものであろう。羽釜（994・995）は、口縁部に段を持ち、体部には水平に鏝を付ける。内面はハケ調整、外面は削り調整を施す。15世紀前半段階の遺物であろう。すり鉢（1029～1035）は片口のもので、断面三角形の口縁部をもつ。体部外面へ削り、内面ナデ調整を施すものが主であるが、一部ハケ目調整を施すもの（1029・1032）もある。口縁部はヨコナデ調整である。すり目が認められるものは比較的細かい。概ね15世紀代である。

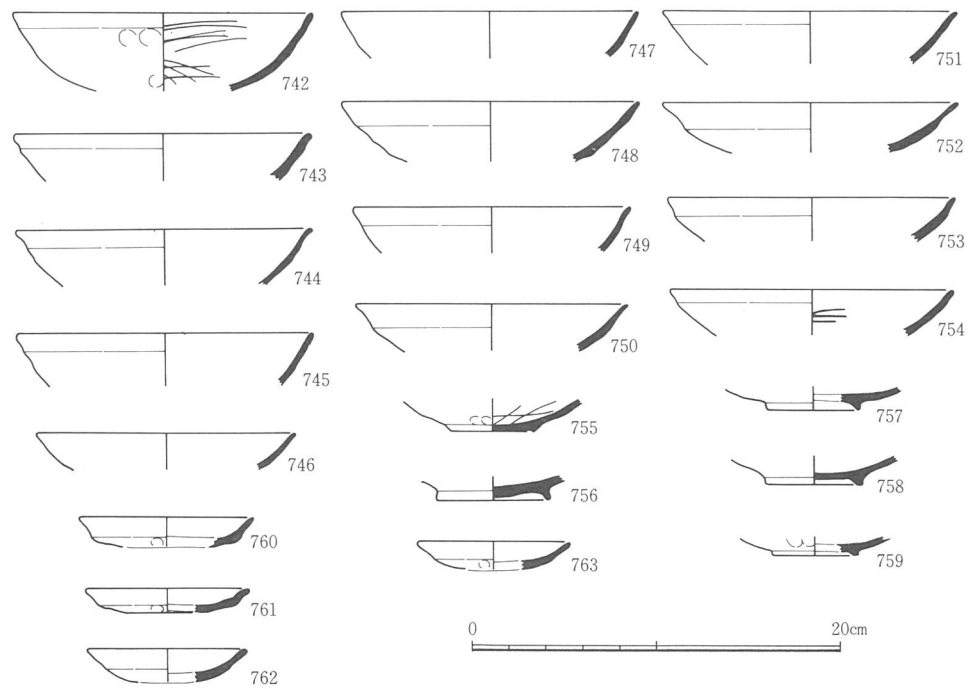
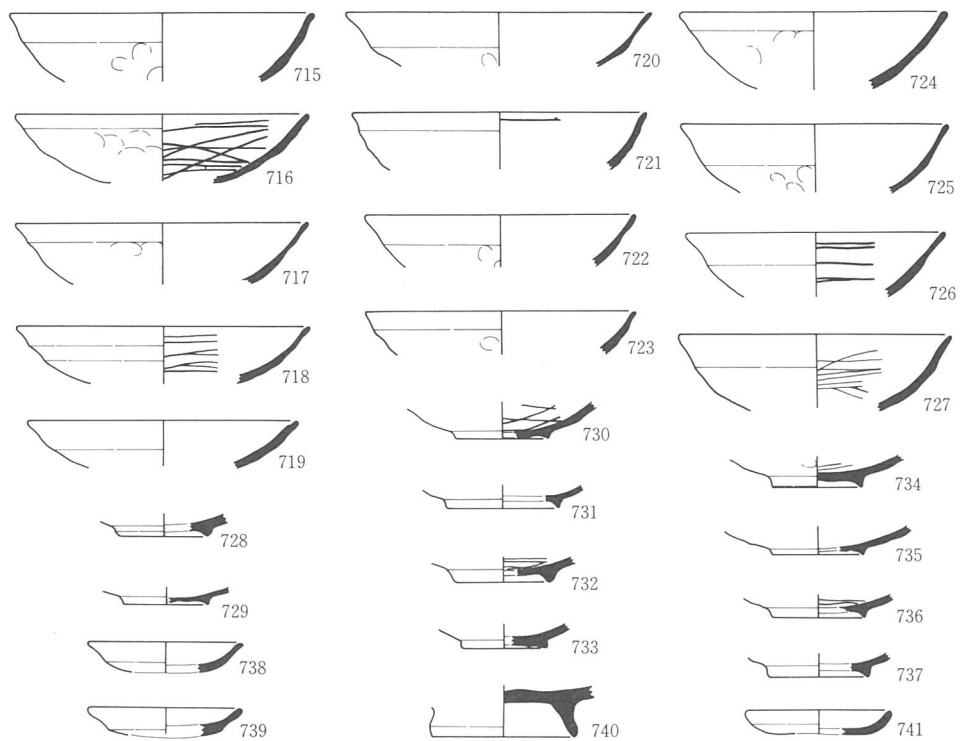
須恵器は坏・壺蓋・すり鉢がある。坏（1004～1005）は、口縁部と体部の境界に断面四角形の高台をつける。淡青灰色を呈する。壺蓋は天井部に宝珠つまみをもつ器形で、口縁端部は段をなす。平城宮VIに該当し、8世紀末から9世紀初頭の時期である。すり鉢（1021～1028）は、底部には回転系切り痕が認められる。口縁部の形態からみて、12世紀後葉から14世紀後葉の時期のものであろう。甕（1041～1043）は、口頸部が長く直立させるもの（1041）や、器壁が太く短い口頸部で外面にはタタキを施すもの（1043）、あるいは外反する口縁部に一条の沈線をめぐらせる端部をつけたもの（1042）がある。東播系の甕と想定されるのは（1041・1042）である。13世紀から14世紀にかけてであろう。

陶器（996・1036～1038・1040）は壺・すり鉢がある。壺（996）は、僅かに外方に伸びる口頸部で、口縁端部は丸く仕上げ、僅かに屈曲して外反する。外面には自然釉がかかる。緻密な胎土で丹波系であろう。形態からみて14世紀代のものである。すり鉢（1036～1038・1040）は、口縁部の発達した備前系（1036）の16世紀前半段階のものと口縁部は面取りを行い、ナデ調整で仕上げる産地不明のもの（1038）、底部の破片で須恵質のすり鉢（1037）、口縁部を面取りし口径の大きい産地が不明のもの（1040）等がある。

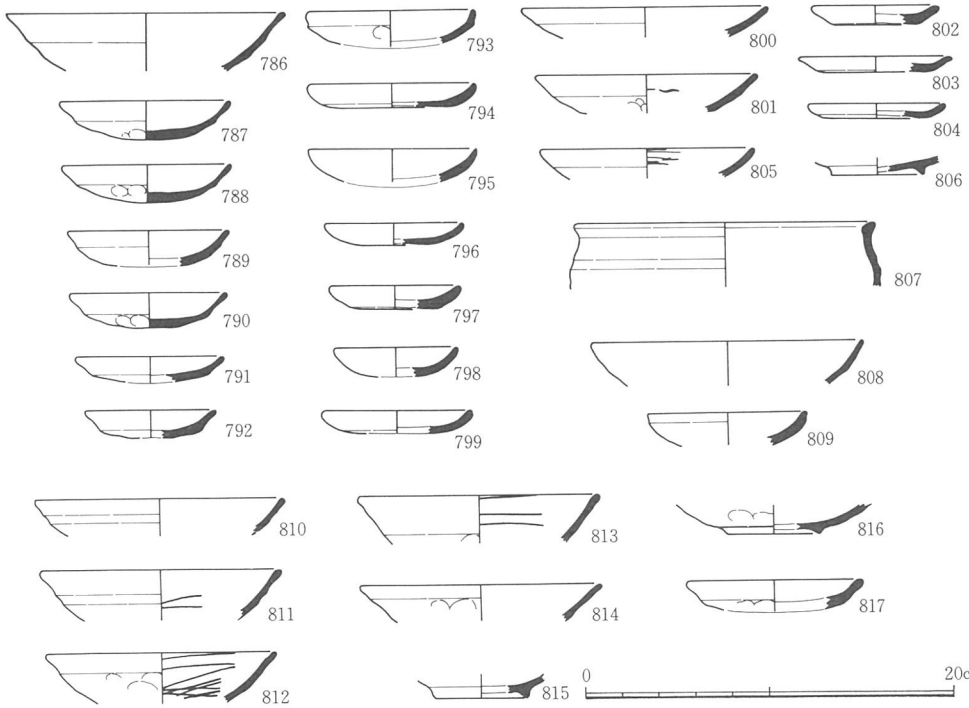
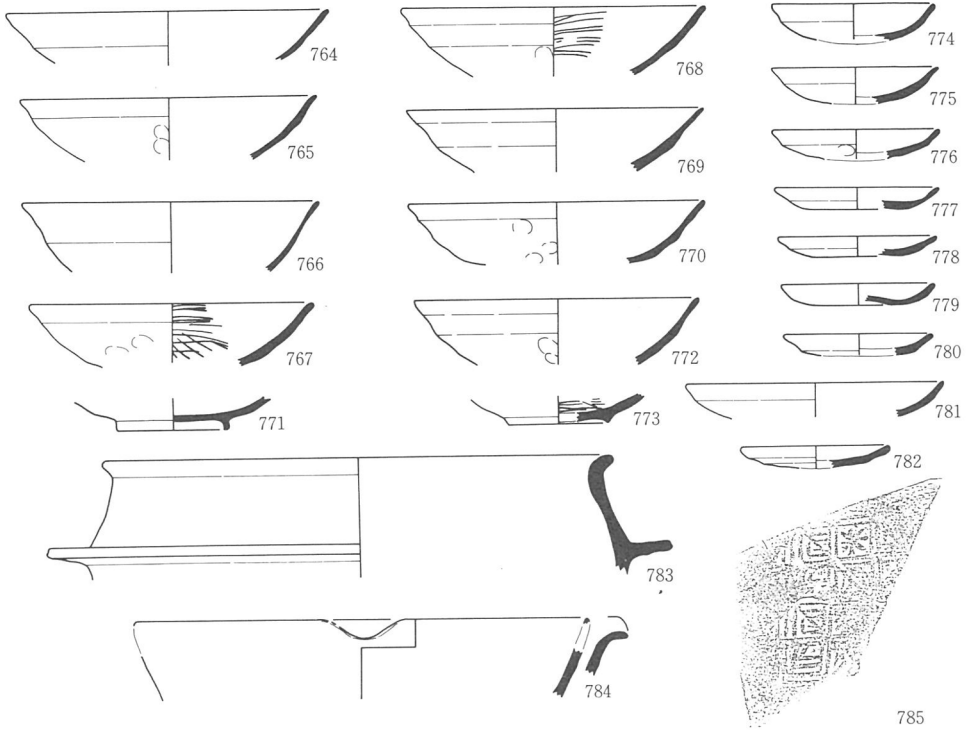
磁器は青磁・白磁がある。青磁は碗（1007～1015）・皿（1016・1017）があり、全て龍泉窯系である。1007・1008は内面に飛雲文を施し、13世紀代である。1009は外面に雷文体をめぐらし、14世紀末～15世紀初頭である。1010～1012は無文で、口縁部を端反するもの（1010・1011）と内湾するもの（1012）がある。共に15世紀代である。1013～1015は、高台の破片で形状から16世紀代のものであろう。1016・1017は皿である。内面見込みには花文を有するもの（1016）と櫛によるジグザグ文（1017）を有するものがある。時期は13世紀代である。白磁は碗（1018）・皿（1019・1020）がある。碗は口縁端部を玉縁状に肥厚させるもので、13世紀代である。皿は、口縁部が外上方に直線的に伸びる。口縁部と見込みの境界には凹線をめぐらす。13世紀代の時期である。



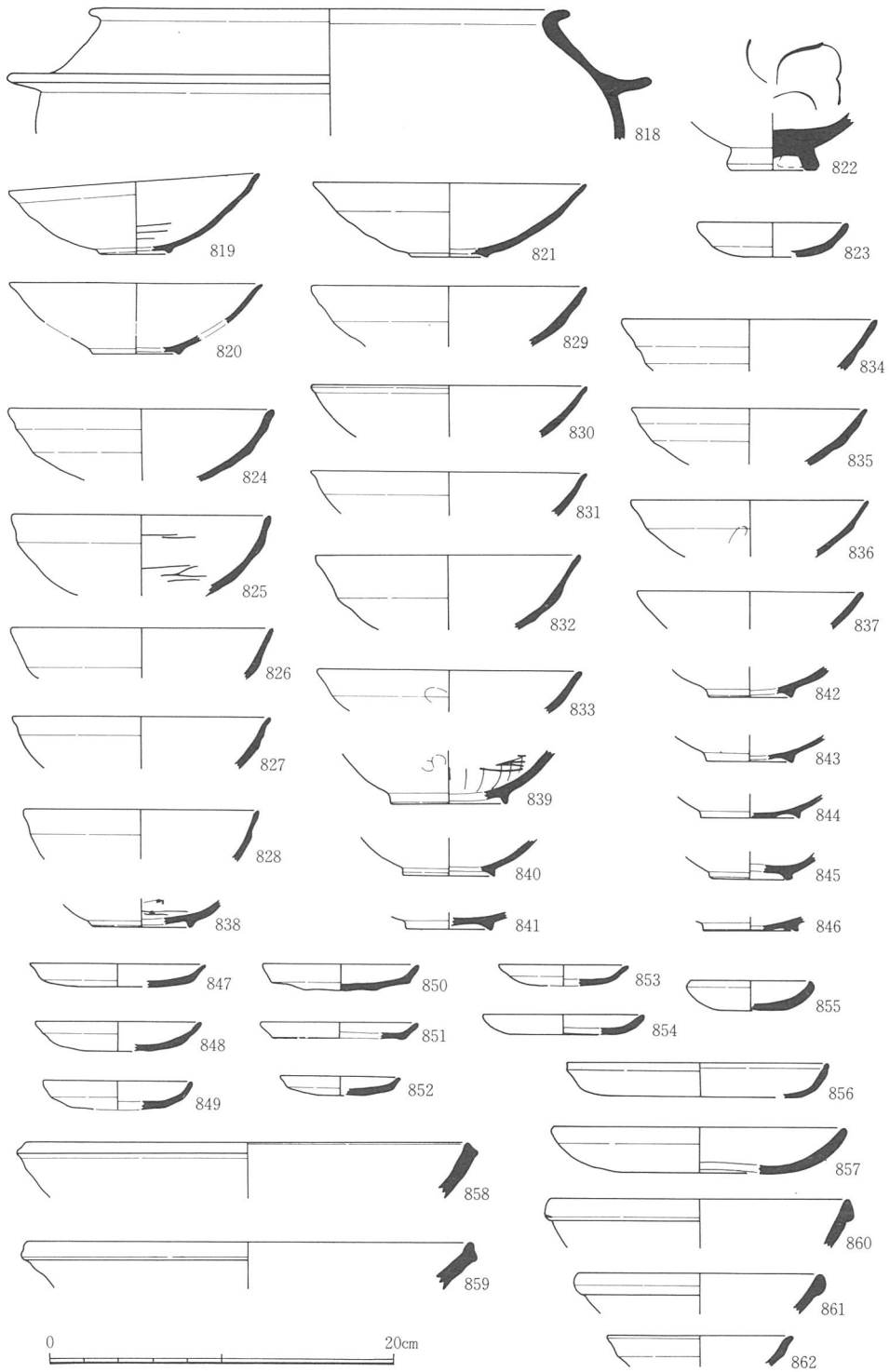
第87图 G·H地区出土土器(1)



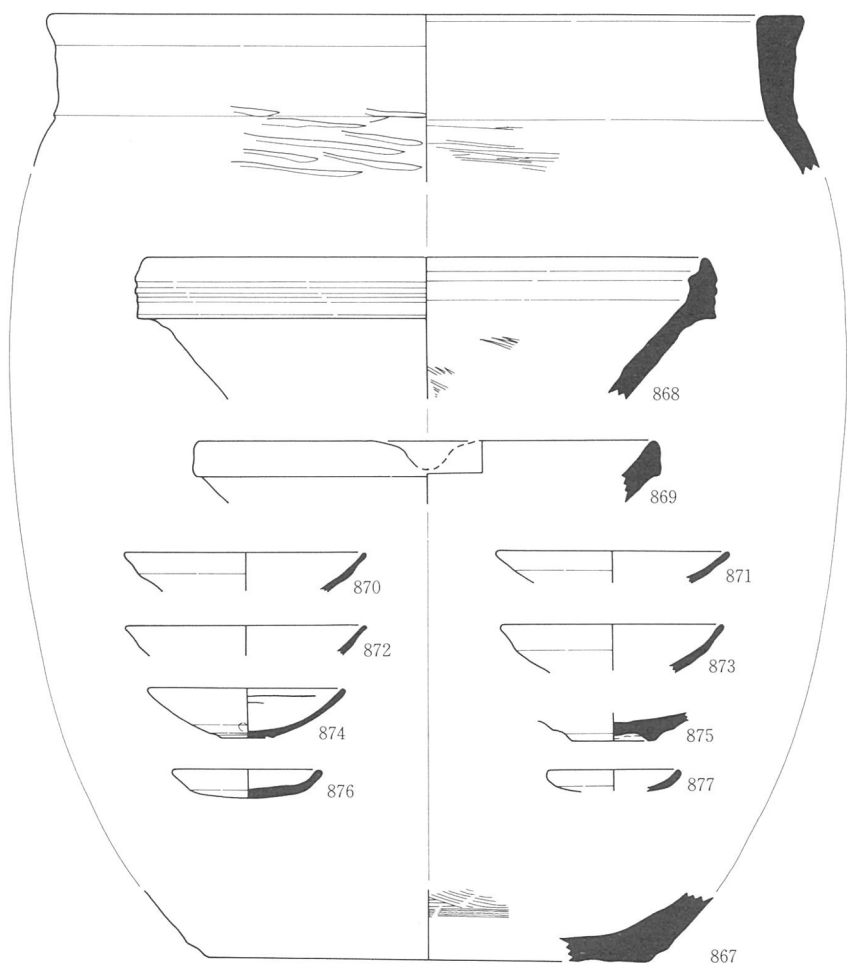
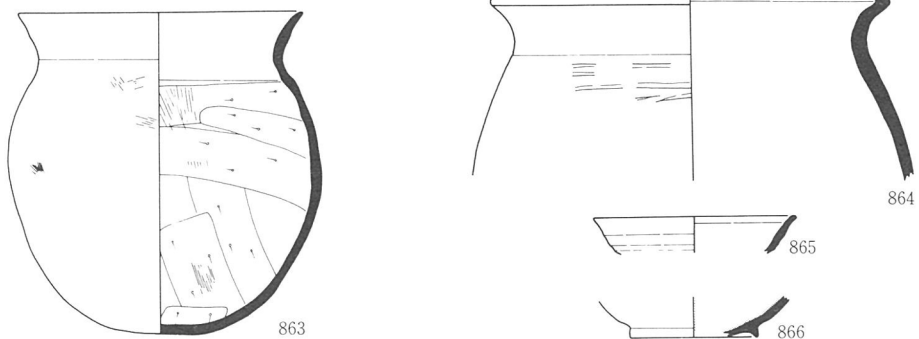
第88图 H地区出土土器(2)



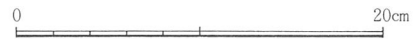
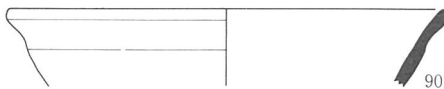
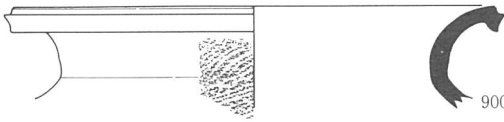
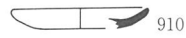
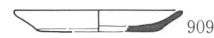
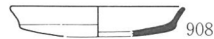
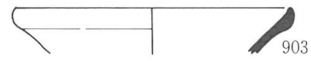
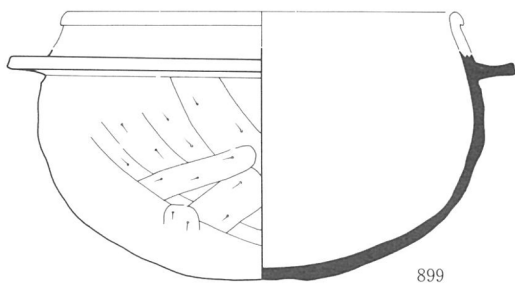
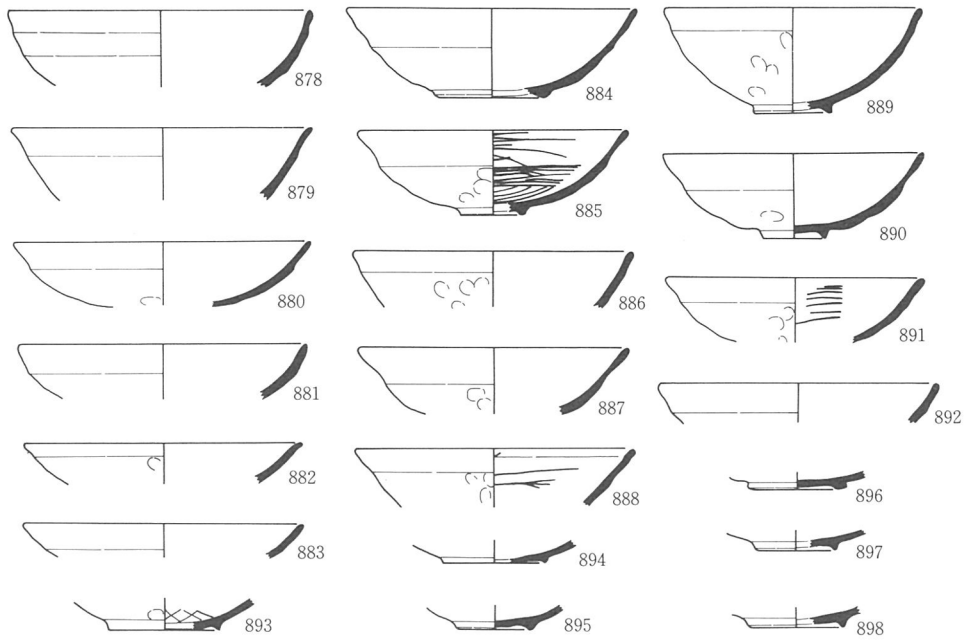
第89図 H地区出土土器(3)



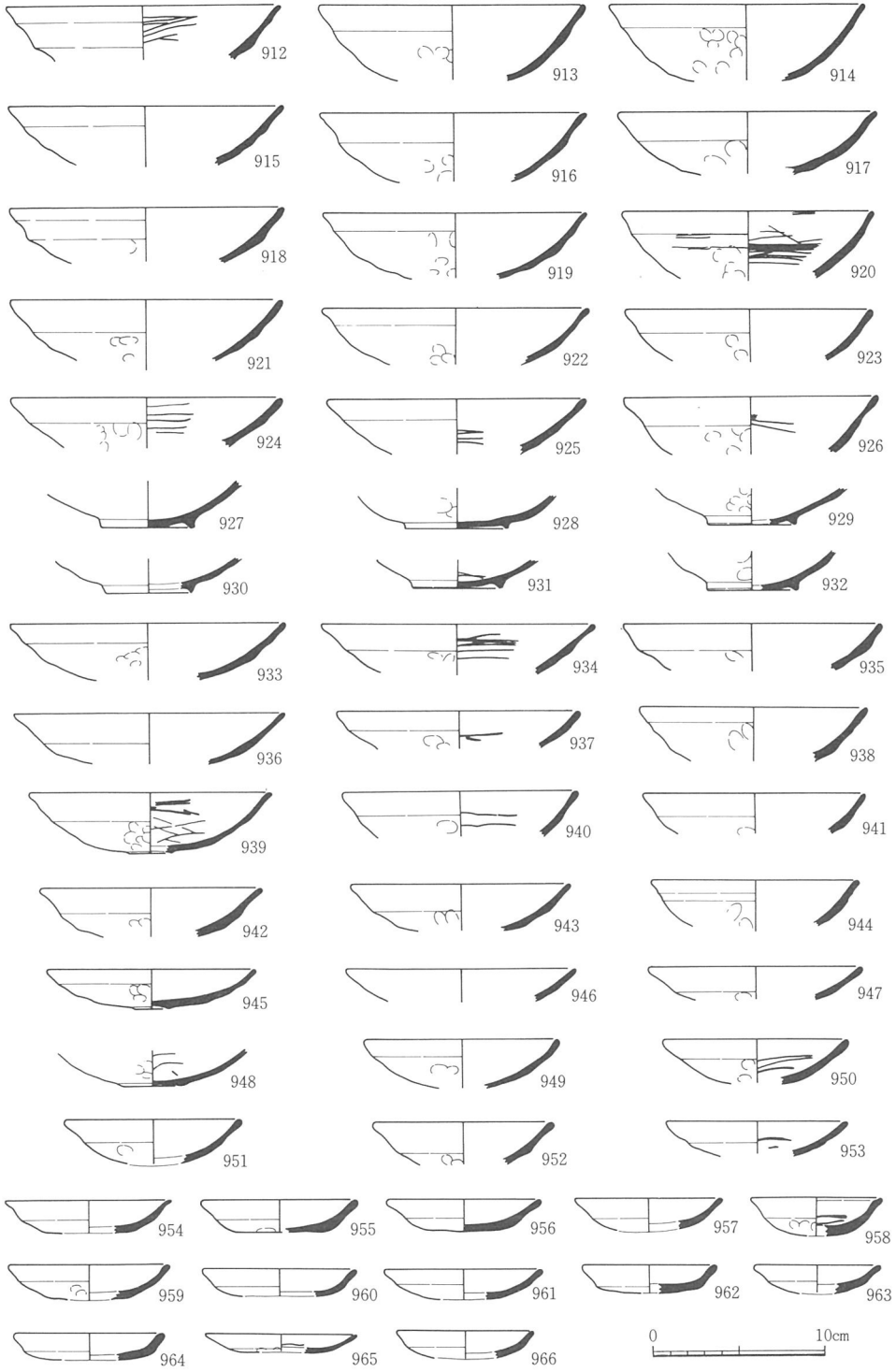
第90图 H地区出土土器(4)



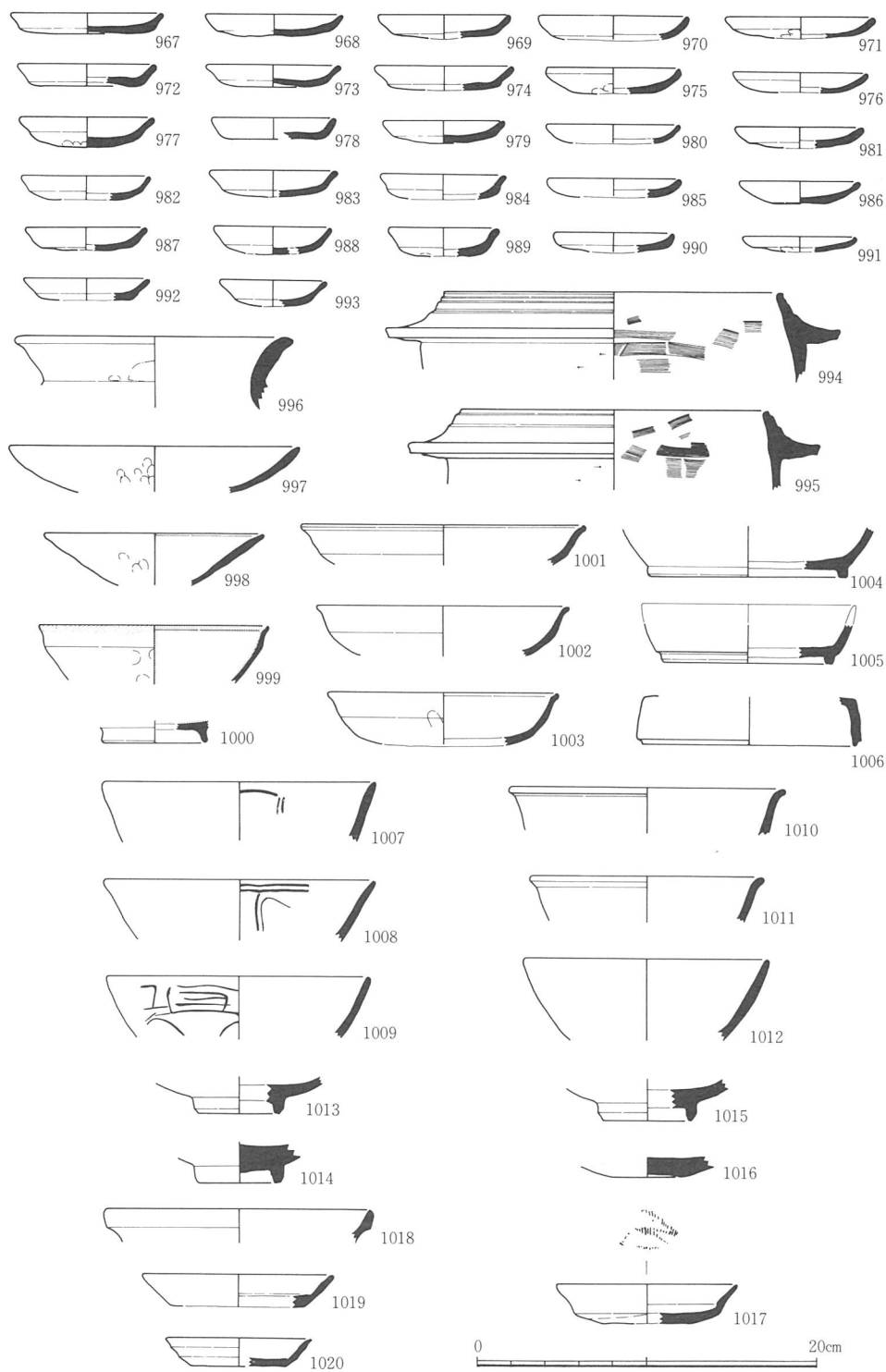
第91図 H地区出土土器(5)



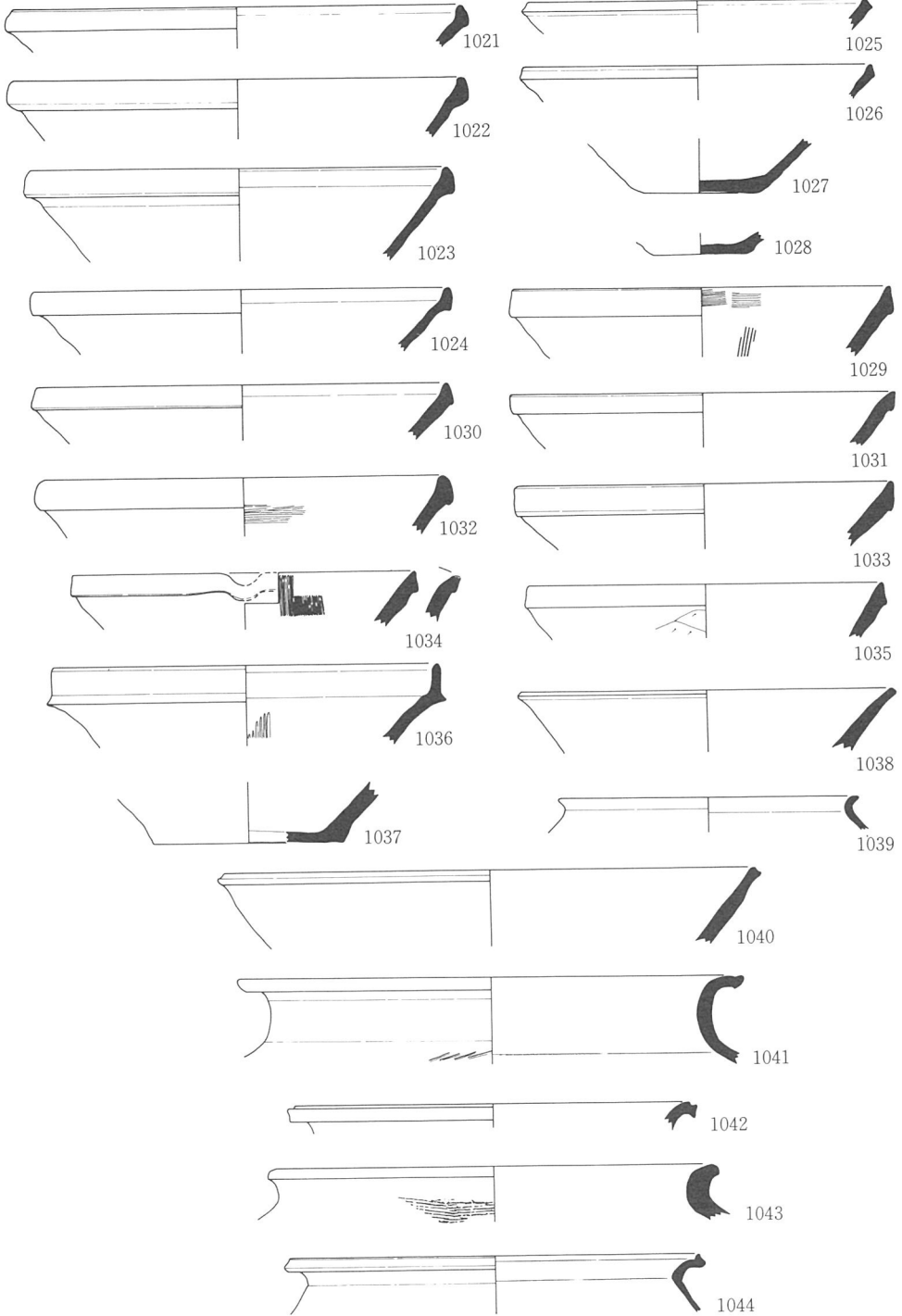
第92图 H地区出土土器(6)



第93图 H地区出土土器(7)



第94图 H地区出土土器(8)



0 20cm

第95図 H地区出土土器(9)

9. I 地区 (第96～101図)

・800-OX出土土器 (1045～1094・1165～1244・1279～1291)

瓦器・土師器・陶磁器が出土する。瓦器には椀・皿・鉢がある。椀 (1045～1094・1165～1192) は、13世紀から15世紀前葉の最終末の時期までである。小破片が多い。量的には14世紀中葉の時期が最も多い。13世紀代の遺物を除外すれば、14世紀代の瓦器椀は高台は消失直前段階のもので、低く断面三角形を呈するものや台形を呈するものがあり、高台径は2～3.5cmを測る。内面側壁の磨き調整は、14世紀代の瓦器椀は、側壁と見込みの区別なく間隔を荒く施す。見込み部分は連結輪状に磨く。胎土は、13世紀代と14世紀代とでは異なる。皿 (1193～1202) は底部平坦で容量が少なく、14世紀代のものであろう。鉢 (1243) は、片口でナデ調整する。すり鉢 (1288～1290) は断面三角形の口縁部をもつ。15世紀代の時期であろう。土師器は皿・羽釜・鉢がある。皿 (1203～1237) は小破片で、口縁部のナデ調整によってタイプがわかる。口縁部が内湾するもの、口縁部が外反するもの、平坦な底部で口縁部が直立するものがある。平坦な底部 (1213～1221) の小皿は、底部を糸切りもしくはヘラ切り調整をしていないが、胎土・焼成が異なり、隣接する紀伊産の可能性がある。口径は、12～6.8cmまでである。羽釜はa～cの3タイプに大別できる。aは口縁端部を折り曲げ体部には水平に伸びる鏝を付けるもの (1279～1284)、bは「く」の字状の口縁部をもち体部には退化した鏝を付けるもの (1244・1285)、cは内側に短く直立して伸びる口縁部をもち、端部を水平にし、体部上半に鏝をつけるもの (1286) がある。aの1284の鏝は、把手状になる。b・cは、胎土に砂粒を多く含む。aは和泉産で、b・cは紀伊産である。a・bは14世紀中葉前後、cは15世紀前後であろう。陶器 (1287) は鉢と考えられ、口縁端部は丸い。砂粒をふくみ、焼成は良い。磁器は、白磁 (1242)・青磁 (1238～1241) がある。青磁は椀で、外面に蓮弁を施す。龍泉窯系である。13～14世紀前後のものであろう。白磁は椀で、玉縁の口縁部をもつ。

・800-OX [B] (1095～1164)

瓦器・土師器が出土する。瓦器は椀・皿・羽釜である。椀 (1095～1130) は、1095が13世紀前葉～中葉の古い形態であるが、他は丸味を帯びた底部に内湾する口縁部を付け、高台は消失直前段階で退化したものと消失してしまったものがある。内面には間隔を荒く、側壁と見込みの区別なく磨き調整を施す。皿 (1131～1140) は、丸味を帯びた底部に口縁部をナデ調整することによって外反したものである。羽釜 (1161) は、形態的には滑石の鍋と同一である。口縁部は削りを行ない、内面は横方向のハケ調整を行なう。土師器の羽

釜と異なり、瓦器の焼成であり、しかも滑石の模造品として、二重の意味がある。土師器は皿・羽釜がある。皿（1141～1155）は、小皿のみで大皿は存在しない。口縁部のナデ調整によって外反するものと内湾するものがある。羽釜（1162～1164）は内湾する口縁部をもち、端部を外反させ、体部に水平方向の鏝を付けた和泉地方のものである。鏝の上には2孔穿つものもある。棒等を差し込み、もち上げるためのものか。これらは14世紀中葉の時期の良好な一括資料である。

・861－〇X（1245～1266）

瓦器・土師器・須恵器・磁器が出土する。瓦器には椀・皿がある。椀（1257～1265）は、時期的に13世紀代と考えられる1257以外は、体部から口縁部にかけては内湾しながらのびる。高台は低く退化しており、消失直前の段階であろう。内面側壁の磨き調整は、間隔を荒く見込みと側壁の区別なく行なう。土師器は皿・羽釜がある。皿（1252～1256）は、小皿のみで大皿は存在しない。形態は口縁部のナデ調整に規定されて、直線的に伸びるものと外反するものがある。羽釜（1245～1250）はいわゆる和泉型である。1249は口縁部外面の調整が不十分のため、接合痕を残存させており、製作技法がよくわかる好資料である。この資料からは口縁部の接合は、鏝の接合まえに行なうことが判明する。須恵器（1251）は甕である。直立する頸部に緩やかに外反する口縁部で、端部を肥厚させる。体部外面にはタタキを水平及び斜めに施す。内外面ナデ調整する。東播系である。磁器は青磁の椀（1266）である。鎬蓮弁文を施す。大半の遺物は、14世紀中葉時期であろう。

・827－〇〇出土土器（1269・1270）

瓦器椀・皿がある。椀（1269・1270）は、口縁部の破片で、13世紀代のもの（1269）と高台のない14世紀後半段階のもの（1270）である。

・830－〇〇出土土器（1271）

瓦器椀が出土する。内面を磨き調整をする。13世紀前半段階のものであろう。

・832－〇〇出土土器（1278）

土師器の皿が出土する。皿は小皿で、口縁部のナデ調整により、直立気味である。淡白灰色を呈す。13～14世紀代であろう。

・833－〇〇出土土器（1272）

瓦器椀が出土する。側壁の磨き調整は比較的丁寧である。14世紀初頭の時期である。

・836－〇〇出土土器（1267・1268）

瓦器・土師器が出土する。瓦器は椀（1267）である。底部は平坦で体部から口縁部にか